

居た。

「アレツシヤのマイロニぢやな？」

と院長は机に向つた儘、前と同じ厳しい調子で云つた。

ベネデットーの答を聞いてから、彼は又頁を繰つて読み續けたが、終に眼鏡を外して、振り向いた。

「お前はこのサンタ・スコラスティカへ何しに來たのぢや？」

「私は大なる罪人で御座いましたが、神様が私に世から退けよと命じ給ひましたので、私は世から退きましたので御座います。」

院長は曇時黙つてベネデットーの顔を見詰めて居たが、纏て態とらしい、優しい口調で云つた。

「否、それは違ひませう！」

彼は嗅煙草箱を取り出して、「否、否、否、」と口早に殆ど囁く様に云ひながら、それを振つた。それから、嗅煙草を熟と見て、その中に指を突き込んで、又ベネデットーの顔を見上げて、一語一語に力を籠めて云つた。

「それは本當ではあるまい！」

嗅煙草を一扱拵指と食指と中指とで撮んで、その煙草を空中に投げやうとする様に手を急速に擧げて、腕を宙に止めた儘、彼は言葉を續けた。

「お前が大なる罪人ぢやつたといふ事は、多分本當ぢやらうが、お前が世から退いたといふのは本當ではない。お前の居る處は世の中でもないし、世の外でもない。」

彼は大きな音をさせて嗅煙草を嗅いで、繰り返した。

「世の中でもないし、世の外でもないわ！」

ベネデットーは答をせずに、院長の顔を眺めた。その眼の中には、實に嚴肅な、又實に優しい、或物が在つたので、院長は思はず伏目になつて、蓋の開けてある嗅煙草箱を見て、又その中に指を突き込んで、煙草を手弄つた。

「私はお前の云ふ事が解らぬ。お前は世の中の者であつて、又世の中の者でない。お前は修道院に居つて、又修道院に居らぬ。多分お前の頭は、お前の曾祖父ぢやの、祖父ぢやの、父親ぢやのといふ輩の頭と同じ事で、一向役に立たぬのぢやらう。皆立派な頭ぢや！」

ベネデットーの象牙色の顔は薄く赤味を帯びた。

「その人々は既に神と共に居て、私共よりも勝つて居ります。貴方のお言葉は神の御掟の
一に反いて居ります。」

「喧しい！お前は世を捨てたと自分で云つて居ながら、お前の心には世の中の誇が充ちて
居る。若し眞實世を捨てる氣なら、見習僧になりたいと思ふ筈ぢや。何故見習僧にならうと
せなんだのぢや？お前は遊山の積で、面白半分に此處へ來たのぢやらう。それが如何も本當
ぢや。それとも又、家に何か義務があつたからかも知れぬ。何か面倒な事が——私が何の事
を云つてるのか解つてるぢやらう！そんな事柄は我々の口にすべき事ぢやないわ。お前はそ
の面倒を避けやうと思つて、又新しい面倒に陥つたのぢやらう。お前はあの好人物のドン・
クレメンテに色々の事を饒舌つたり、貧乏な巡禮の寢床を横奪りしたりして居る上に、多分
お前は殊勝氣に祈禱をしたり、聖餐を受けたりなどして、寺の者の目を暗まさうと思つたの
ぢやらう。寺の者を胡魔化するのは誠に易い事ぢやが、お前はそれよりもずつと難しい、神様
の御目をも暗まさうと思つたのぢやらう。え？、如何ぢや。一言もあるまい！」
先程の薄赤色は既に象牙色の顔から消えて、靜に厳格な言葉を語らうとして一旦開いた唇
も今は動かさず、人の肺腑に透徹する様な眼は、前と同じ優しい眞面目な色を浮べて、院長を

熟と見た。この泰然として口を嚙む様子は大に院長を激せしめた様であつた。

「さあ、云つて仕舞へ！白状するのぢや！聞けばお前は又、何か特別の恵を受けたとか、
幻を見たとか、奇蹟に遇つたとか云つて、自慢して居る相ではないか。お前は大な罪人ぢ
やつたて？それなら今はもう罪人ではないといふ證據があるか！今は潔白ぢやと云へるなら
云つてみい。お前は今まで如何な生涯を送つたか云つてみい。お前は神がお前を呼び給うた
と云ふなら、其事を判る様に説明してみい。お前はこの寺へ來て、僧の食ふパンを、何もせ
ずに遊んで居つて、食ふ権利があるか云つてみい。お前は僧に成るのは厭で、その上に仕事
といふては、唯だ是ん許りしかせぬのぢやから。」

「院長様。」

「ベネテットの聲の嚴格な調子と、彼の顔の峻厳な威儀とは、彼の言葉の謙遜な優しさに
不釣合であつた。」

「私の様な罪人、三年の間神の靈に充ちた敬虔な空氣の中に、聖い人々に愛せられて、安
樂に、幸福に、平和に、靈の生涯を送る事が出来ました罪人に取りましては、貴方のお言葉
は相應しう御座います。貴方の御言葉の刺は、私知らずにおりました誇が、未だこの様に

July

私の心の中に残つて居るかご私に思はせました。私は自分を賤しめる事を喜ぶ致しますから、貴方の御言葉は私の魂に取りまして相應しう、又美しう響きます。是は神様の御恵で御座います。併しながら、聖い真理に事へる僕の一人として、私は貴方に申し上げますが、苛酷な言葉は、偽を云ふ人に對する時にでも、宜しう御座いませぬ。何故かと申しますれば、若し優しい言葉を以て諭したならば、或はその人が偽を云つた事を悔いるかも知れませんが、御座います。また院長様、貴方の御言葉の中には、私共の唯一人の眞の父の御精神が御座いませぬ。——嗚呼、凡ての光榮は彼に歸せん事を——

「凡ての光榮は彼に歸せん事を」と云つた時に、ベネテットは強い熱情に顔を燃して、跪いた。

「貴様の様な罪人が教師の眞似をして宜いのか！」

と院長は叫んだ。

「御尤で御座います！御尤で御座います！」

ベネテットは感情に激した様子で、手を組み合はせて、苦し氣に喘ぎながら答へた。

「私の罪を今すつかり申します。私は不義の戀を求めました。私は妻のある身でありなが

ら、而も主ある女の愛情を喜んで受けました。私は宗教上の勤を全く投げ棄てまして、世間の噂なんぞに少しも構ひませんでした。その女は神を信じませんでした。私の信仰は死んで仕舞ひまして、淫な、我儘な、ぐらくした、虚偽の生涯を送りながら、その女と一つになつて神を蔑に致しました。神は私の亡くなりました。兩親の聲を以て私を呼び返し給ひました。其時私は私を愛する女を棄てましたが、尙是といふ強い目的もありませぬ、心は善と惡との間に立つて、孰へ行かうかと取つ置いつ迷つて居りました。暫時する中に私は又、身を滅ぼす原因となる事を知りながら、身を滅ぼす覺悟をさへして、罪の烟に焦されて、その女の處へ歸りました。到頭私の魂の中に神の恵が最早微塵も無くなりました時に、愛する、聖い、死んで行く者の手が私を捕へて、私を救つて呉れました。」

「私の眼を正面に熟と見い。お前は此處に居るといふ事を誰かに云つた事があるか？」

と院長はベネテットに起てよとも云はずに問うた。

「私は誰にも申しました事は御座いませぬ。」

院長は厳しく、

「それは本當ではあるまい！」

ベネテットは屈しなかつた。

「何故私がお前の云ふ事を本當にせぬのか、お前には判つて居るぢやらう？」と院長は言葉を續けた。

ベネテットは伏目になつて答へた。

「何故で御座いますか、想像は出来ません。『我が罪常に我が前に在り。』」院長は猶頑として命じた。

「起て！私はお前を此修道院から放逐する。是からドン・クレメンテの部屋へ行つて、暇乞ひをして来るのぢや。それが済めば寺を出て、決して歸つて来る事はならぬぞ。解つたか？」ベネテットが長つて頭を下げて、形の如く膝を曲げて敬禮をしようとした時に、院長は手を振つて彼を止めた。

「待て。」

彼は眼鏡を掛けて、立つた儘一枚の紙に何か書いた。

「お前は此處を出たら、何をする積ぢや？」

と彼は書きながら問うた。

ベネテットは静に答へた。

「眠つて居る中に父親に抱き上げられた子供は、父親が自分を如何するか知つて居りませうか？」

院長は返事をせずに、書き終つた紙を封筒に入れて、封をして、机の方を向いた儘、背後に立つて居たベネテットにそれを突き出した。

「是をドン・クレメンテの處へ持つて行け。」

ベネテットは彼の手に接吻する許可を乞うた。

「否ならぬ。彼方へ行け、彼方へ行け！」

院長の聲は腹立で顫うて居た。ベネテットは命に従つた。彼が廊下へ出るか出ぬかに、老僧が腹立たし相にピアノを殴り付ける音が聞えた。

ドン・クレメンテの狭い部屋に這入る前に、ベネテットは廊下の端の大窓の前に佇んだ。此處は、數時間前に、師ドン・クレメンテがスピアコの燈火を望み見て、彼の靈の子の所有權を彼と争ひ、又神とも争はんが爲めに來たらしいかの敵、美容と天才と自然の愛情とを具

へたかの女の事を想ひながら、立ち盡した處である。今その靈の子は、自分が思慮分別もなく劣等な物を熱愛した頃に深く愛したあの女が、自分の隠所を突き止めて、屹度自分を捜しに来るに違ひないと、何故とは知らず感じた。彼は心の底深く探つて其處に宿る神の靈を尋ねて、その靈の教に由つて、神に就いての敬虔な觀念を得た。この觀念は、あの女自身には氣が附かぬが、屹度彼女の心の中にも在るに違ひない。そして彼女も亦、多くの憐なる彷徨へる魂を待つ所の永遠の眞理と愛との海に、何か不可思議な道に由つて、早晩到達する時があらうと、神秘的な希望の萌すのを感じた。

ドン・クレメンテは彼の聲音を聞いて、扉を開けて置いた。ベネテットは這入つて、院長の手紙を彼に手渡した。

「私は是から直に寺を出て行かねばなりません。そしてもう歸つて来る事は出来ません。」とベネテットは極めて静に云つた。

ドン・クレメンテは返事をせずに、手紙を開いた。讀み終つて、彼は微笑みながら、ベネテットがイエネへ行く事は既に昨夜に定つて居たではないか、と云つた。それは左様であるけれども、院長は決して歸つて来てはならぬと云つた。ドン・クレメンテの眼には涙が溢

れて居たが、彼は矢張笑を含んで居た。

「貴方はお嬉しう御座いますか？」

とベネテットは殆ど恨むが如き調子で云つた。

噫、嬉しきかど！師は如何して自分の感ずる所を説明する事が出来やう？最愛の弟子は彼の許を去らんとして居る。三年間の靈の親交の後、今や永久に彼の許を去らんとして居る。遮、莫、神の隠れた聖旨は今遂に顯れた。神は修道院から彼を取り去つて、彼の足を異りたる道に置かむとし給ふのである。嬉しきかど！然り、悲しうして又嬉し。併し、彼の喜悅の原因は之をベネテットに語る事が出来ぬ。神の聖言もベネテット！自その意義を覺らねば、彼に取つて何の價値も無い。

「嬉しくはないが、心配はない。私等二人には互の心がよく解つて居るではないか。是から別れるに就いて、少しお前に話して置き度い事があるから、よう聞いて、忘れない様に。」

ドン・クレメンテが低い聲で斯う云つた時に、その顔は一面に赤くなつた。ベネテットは頭を下げた。ドン・クレメンテは柔和な威嚴を以て弟子の頭の上に手を按

「お前は、至高の眞理と、その眼に見ゆる教會と眼に見えぬ教會とに、お前の全身全靈を任せ度いと思ふか？」

と沈んだ、男らしい聲が云つた。

ベネデットはさながらその所作をも間をも期待して居た様に、躊躇なく決然たる聲で答へた。

「はい。」

低い聲で、

「お前は今後私が免すまで、獨身生活と貧しい生活を續けると、男同志の堅い約束をするか？」

決然とした聲で、

「はい。」

低い聲で、

「お前は聖なる公教會の律法の下に運用せられる權威に、何時も服従すると約束するか？」

決然たる聲で、

「はい。」

ドン・クレメンテは弟子の頭を引き寄せて、唇が弟子の額に觸れん許に顔を近づけて云つた。

「私はお前がこの寺を出て行く際に、せめては低い宗教上の勤務をして居たといふ紀念を持つて行く事が出来るやうにと、教友の法衣を一領お前に譲る事の許可を院長様に願つた所が、院長様は、許すとか許さぬとか決めるよりも前に、一度お前に會ひ度いと仰せられた。」

此時ドン・クレメンテは、院長が面會後自分の願を許す事に決した事を知らせる爲めに、弟子の額に接吻した。彼は今弟子を褒め度かつたのであるが、父の様な自分の身分と弟子の謙遜とに妨げられて、現には口に出す事が出来なかつたので、黙つて、その接吻の中に賞讃の辭を籠めた。

彼は弟子の全身が顫うて居る事に氣が付かなかつた。

「院長様がお前に會つてから書かれた手紙は是だよ。」

彼は例の紙をベネデットに見せた。それには斯う書いてあつた。

何を思ひ出すのであらう？」

「あゝ左様だ！お前の幻の事ではないか？」

と彼は不意に叫んだ。

全く左様であつた。その幻の中でベネテットは、自分がベネテイクト派の法衣を着て、大なる樹の蔭で、草も無い地に仆れて死にかけて居るのを見た。ドン・チウセツペ・フロレスやドン・クレメンテが忠告した如く、その幻を信してはならぬといふ一つの證據は、彼が世を通れた以來、日増に強くなつて来た修道院の掟を厭ふ心と、彼がベネテイクト派の法衣を着て居たといふ事とが矛盾して居る事であつた。所が今その矛盾は霧散せんとする様子であつた。それ故に、その幻の豫言的性質は信じ得べきものであるといふ念が再び現れて来た。ドン・クレメンテは幻のその部分を開き知つて居たから、ベネテットが再びその身に就いての不可思議な神の目的を面り見た時に感じた敬畏の念と、傲慢の罪に陥りはせぬかといふ危惧の念とを、ベネテットの心の中に認め得る筈であつたのに、彼はその事に思ひ及ばなかつたのであつた。

「お前、もうその事は考へないがよい。」

と彼は急いで話題を轉じた。彼はベネテットに書籍を二三冊と、當分彼の世話を頼まうと思つて居るイエ子の教區の教師に宛てた添書とを與へた。ベネテットがイエネに永く留まるのが宜いか、留まらぬのが宜いか、又若し留まらぬ場合には再びスピアコへ歸るのが宜いか、或は何處か他へ行くのが宜いか、それは神が彼に示し給ふに相違ない。

「御師匠様、本當に私は明日私の身の上にごんな事が起るか少しも考へません。私は唯だ『師來りて我を呼び給へり』といふ言葉だけを考へて居ります。併しこの言葉を超自然の聲としてはいは御座いません。主が何時も私共の側に居給うて、絶えず私をも、貴方をも、又何人をも、呼び給ふといふ事が解りませんでしたのは、私が悪う御座いました。私共の魂が静でさへあれば、主の聖聲が聞えます！」

弱い日光が室内に映し込んだ。ドン・クレメンテは、雨が歇めば十中の八九はデサレ夫人が修道院を見物に来るであらうと直思つた。彼は何も云はなかつたが、彼の心中の不安は、微かな戰慄と、空を見上げる眼とに現れた。ベネテットは師が空を仰ぐのを見て、早此處を去るべき時が来たこと知つた。そして始にサンタ・スコラスティカの禮拜堂で、次にサクロ・スペコで祈る事を許して呉れよと願つた。太陽は姿を隠して、又雨が降り出した。師弟は相

「承諾す。余に彼を留めんと欲するが如き心の生ぜざる様、早速彼を僧院より去らしむ可し。」

ベネテットは情に激した様子で、師を抱いて、物をも云はず額をその肩に寄せた。

「お前は嬉しいか？ 今度は私の方から尋ねる！」

ドン・クレメンテは低い聲で二度この問を繰り返したが、返事が無かつた。遂に嘔く聲が聞えた。

「お答を致さずに置き度う御座いますが、お許し下さいませうか？ 暫時祈りたう御座います、宜しう御座いますか？」

「宜いとも、お前、宜いとも！」

僧の幅の狭い寢臺の傍に、高く、祈禱机の上から、大な十字架が「基督 甦れり。いざ汝の魂を我に釘けよ！」と呼はつて居た。實際その十字架の下には、ドン・クレメンテが書いたのか、或は彼よりも前にこの室に居た者の中の誰かが書いて置いたのか、次の言葉が書き付けてあつた。

「凡ての傲れる思を十字架に釘けよ。」

ベネテットは床に平伏して、膝の當る可き所に額を當てた。扉の開けてあつた窓からは、雨降る空の蒼白い光が、平伏して居る男の脊と、大な十字架を仰ぎながら直立する男の脊との上に、斜に落ちた。雨のさゝやきと深いアニオ川の轟聲とは、ジャンの耳には、この世に活きて戀を知る者凡ての悲歎の聲と聞做されたかも知れぬが、ドン・クレメンテには、天地と心を合はせて萬物の父に祈る下等被造物の敬虔な聲と聞えた。ベネテット自身にはその音は耳に入らなかつた。

纏てベネテットは落着いた面持で起き上つて、師の身振を以て命ずるのに従つて、寢臺の上に擴げてあつた教友法衣を着て、革帯を締めた。着終つてから、彼は微笑みながら兩腕を擴げて、自分の姿を師に見せた。師は弟子がその衣を身に纏つて、如何に尊く、如何に靈的に美しくなつたかを見て喜んだ。

「貴方はお解りになりませんでしたか？ 貴方は何も思ひ當る事が御座いませんでしたか？」

否、ドン・クレメンテは今し方のベネテットの激しい感動は、その謙遜の爲す所であつたと思つて居た。けれども彼は自分が何か思ひ出す筈であつたと今漸く覺つた。だが、一體

何を思ひ出すのであらう？

「あゝ左様だ！お前の幻の事ではないか？」

と彼は不意に叫んだ。

全く左様であつた。その幻の中でベネテットは、自分がベネテイクト派の法衣を着て、大なる樹の蔭で、草も無い地に仆れて死にかけて居るのを見た。ドン・チウセツペ・フロレスやドン・クレメンテが忠告した如く、その幻を信してはならぬといふ一つの證據は、彼が世を遁れた以來、日増に強くなつて來た修道院の掟を厭ふ心と、彼がベネテイクト派の法衣を着て居たといふ事とが矛盾して居る事であつた。所が今その矛盾は霧散せんとする様子であつた。それ故に、その幻の豫言的性質は信じ得べきものであるといふ念が再び現れて來た。ドン・クレメンテは幻のその部分を知つて居たから、ベネテットが再びその身に就いての不可思議な神の目的を面り見た時に感じた敬畏の念と、傲慢の罪に陥りはせぬかといふ危惧の念とを、ベネテットーの心の中に認め得る筈であつたのに、彼はその事に思ひ及ばなかつたのであつた。

「お前、もうその事は考へないがよい。」

と彼は急いで話題を轉じた。彼はベネテットーに書籍を二三冊と、當分彼の世話を頼まうと思つて居るイエ子の教區の教師に宛てた添書とを與へた。ベネテットーがイエネに永く留まるのが宜いか、留まらぬのがよいか、又若し留まらぬ場合には再びスピアコへ歸るのが宜いか、或は何處か他へ行くのがよいか、それは神が彼に示し給ふに相違ない。

「御師匠様、本當に私は明日私の身の上にごんな事が起るか少しも考へません。私は唯だ『師來りて我を呼び給へり』といふ言葉だけを考へて居ります。併しこの言葉を超自然の聲としていは御座いませぬ。主が何時も私共の側に居給うて、絶えず私をも、貴方をも、又何人をも、呼び給ふといふ事が解りませんでしたのは、私が悪う御座いました。私共の魂が静でさへあれば、主の聖聲が聞えます！」

弱い日光が室内に映し込んだ。ドン・クレメンテは、雨が歇めば十中の八九はデサレ夫人が修道院を見物に來るであらうと思つた。彼は何も云はなかつたが、彼の心中の不安は、微かな戰慄と、空を見上げる眼とに現れた。ベネテットーは師が空を仰ぐのを見て、早此處を去るべき時が來たと知つた。そして始にサンタ・スコラステイカの禮拜堂で、次にサクロ・スペコで祈る事を許して呉れよと願つた。太陽は姿を隠して、又雨が降り出した。師弟は相

携へて禮拜堂へ降りて行つた。そして膝を並べて跪きながら、祈禱の時を移した。之が二人の唯一の別辭であつた。九時にベネデットーはサクロ・スペコ道へ出た。彼は門番のフラ・アントニオがチヨヴァニ・セルヴァの使者と雑談をして居る中に、人目に掛らず修道院を去つた。此時、再び雲間を漏れた日影が急に修道院の古壁や、道路や、丘一帯を照らした。小鳥の羽搏と、嬉しさうな高い囀りが彼處此處の草原から起つた。ベネデットーは思はず口走つた。

「主よ、我此處にありー」

(其三)

ジャンとノエミとは十時に修道院に着いた。門から數歩手前で、ジャンは烈しい神氣昂進に陥つた。彼女はスピアコから馬車に隨つて來た小僧に、サンタ・スコラスティカには立派な野菜畑があつて、スピアコ生れの老人と、何處か他處から來た若い男とがその世話をして居ると聞いたので、修道院よりも前にその畑を見度いと思つた。併しそれは今は逆も出來ぬ相談である。彼女は蒼白く、疲れ切つた有様で、ノエミの腕に縋りながら辛うじて入口まで歩き着いた。其處には一人の乞食が例のスープを貰はうと思つて待つて居た。折好く、ノエミが鈴を鳴らさぬ中に、フラ・アントニオが戸を開けたから、ノエミは、氣分が悪くなつた

友の爲めに椅子と水を一杯と持つて來て呉れよ、と頼んだ。死人の様に眞青な顔をして、同行者の肩にぐたりと凭れて居るジャンを見て、慇懃な老人は酷く吃驚して、乞食に與ふる爲めに持つて來たスープの入つた椀をノエミに預けて置いて、椅子と水を捜しに急速と引き込んだ。一は汗椀片手に呆氣に取られて立つたノエミの滑稽な姿の御蔭で、一は休息——水と、靜に眠る古い僧院の眺と、意志力の恢復と——のお蔭で、ジャンは僅數分間の中に充分元氣付いた。フラ・アントニオは二人の案内の役目を勤める接待係の僧を呼びに行つた。

「妾等はセルヴァさんの家に逗留して居る者だと云つて下さいよ。」

とノエミが云つた。

ドン・クレメンテは自分が事情をよく知つて居るといふ事をジャンが知らぬと思つたから、その純潔處女の如き魂は何か詐僞でも行つて居るかの如き感をして、顔を眞赤にしたがら現れた。彼は先に自分に近づくノエミをテサレ夫人と思ひ違つた。實際、ノエミは丈がすらりと高くて、上品に美しかつたから、ドン・クレメンテが彼女を男衒しの淫婦と思つたのも全く無理ではなかつた。けれども、彼女は如何見ても二十五歳よりは唯だの一日も老けては見えなかつた故、是が豫てベネデットーから聞いて居た女である筈はない。併しドン・ク

レメンテにはその様な勘定は出来なかつた。ノエミはフラ・アントニオが間違なく自分の頼んだ通りに云つて呉れたか如何かを確かめ度いと思つた。

「先生、今日は。昨晚お目に懸りまして御座いますね。あの時貴方は丁度セルヴァさんの家からお歸りなさる處で御座いましたね。」

と彼女は外國語の口調の混る爲めに一入人を引き附ける力のある可愛い聲で話し掛けた。ドン・クレメンテは軽く點頭いた。實は昨夜ノエミは彼を唯だ僅に瞥見したに過ぎなかつたけれども、彼の美貌に感心して、若し彼が例のマイロニといふ男ならば、ジャンがこれ程思ふのも尤もだと思つた。彼女は自分の元氣な若々しい容貌を自覺して居たから、二十五歳の自分が三十二歳のジャンと取り違へられやうなどは、夢にも思つて居なかつた。ジャンは又ジャンで、この切迫詰つた場合に如何身を處したならば最も宜からうかと、取つ置いつ思案に暮れて居た。

「昨晚は不意にいらつしやいましたのですね。ヴェネトからお出でなすつたので御座いますか？」

とドン・クレメンテはノエミに云つた。

「ヴェネトですつて？」

とノエミは驚いた様子であつた。

「ヴェネトにお住居だとセルヴァさんから承つて居りましたが。」

と僧は云ひ足した。

ノエミは漸く合點が行つた。彼女は笑を含んで「然り」でもなければ「否」でもない短い語を口の中で呟いた。彼女はこの事態を利用して、ドン・クレメンテの誤解を勿怪の幸に、彼と密談の機會を得て、時宜に由つては彼に警告を與へやうと思ひ定めた。其上に、自分をジャンだと思ひ違つて居るこの美しい僧と話す事は實に面白い事である。それで、口を開かうか黙つて居やうかと迷ひながら、大層當惑した様子で自分の顔と僧の顔とを見較べて居たジャンに、彼女は胸せした。

「無論妾の伴侶はもうこのお寺を拜觀した事があるのですけれども、妾は今日が始めてなので御座いますよ。」

彼女はジャンの方を向いた。

「先生が妾を案内して下さるなら、貴女は氣分が悪いのですから、此處で待つてゐらつし

やつたら宜いでせう。」

ノエミはジアンが餘り大人しく承知したから、彼女に何か秘密の目論見があるのではなからうか、自分がこの様な事を云ひ出したのは悪かつたのか知らと思つた。併し今更悔いても詮がなかつた。ドン・クレメンテは女一人だけを案内せねばならぬ事は餘り好ましくないと思つたから、暫時の間待つて居ては如何、今にお友達の氣分が癒るかも知れぬ、と云つた。ジアンは反對した。否、待つて居てはいかぬ、自分は此處に居る方がよいのであるから。

第一の廻廊から第二の廻廊へ移る途で、ノエミは前夜に出會つた事を又云ひ出した。

「貴方はお連があつた様で御座いましたね？」

と云ひはしたが直彼女は自分が相手を欺いて居る事と、相手の心を惱ませて居る誤解を早く晴らして遣らなかつた事とを耻ぢた。ドン・クレメンテは殆ど囁く様に、

「はい、あれは寺の野菜畑の作男で御座います。」

二人とも顔を眞赤に染めたが、彼等は互の顔を見なかつたから、孰も自分だけが赤面して居るもののみ思つた。

「貴方は妾等を誰だか御存知でいらつしやいますか？」

とノエミは言葉を續けた。

ドン・クレメンテは答へて、知つて居る積である、二人はセルヴァ夫人が待つて居た婦人達に相違あるまい、セルヴァ夫人がその妹とテサレ夫人の來る事を自分に話した様に思ふ、と云つた。

「あら、貴方は妾等の事を姉からお聞きなすつたので御座いますね？」

ノエミのこの言葉を聞いて、ドン・クレメンテは思はず叫んだ。

「では貴方はテサレさんぢやないので御座いますか！」

ノエミはこの男が事情を知つて居る事を覺つた。事情を知つて居るからには、屹度用心をしたに違ひないから、不意に二人が出會ふ虞はない。ノエミは胸の重荷が除れて、呼吸が樂になつた様と思つた。そしてその女性的の心の中には、好奇心が心配の跡を占めた。

ドン・クレメンテはノエミに塔や、古い廻廊や、禮拜堂の入口の近くに在る壁畫などの事を話して聞かせたが、其間にノエミは如何したならば彼にマイロニの事を話させる事が出来るやうかと思案に迷つた。纏て彼が例の小さな僧侶の石像の行列をノエミに見せて居る時に、彼女は何氣ない様子で口を出して、現世の生活に飽いて、失望に苦しんだ結果、神に身を任せ

たいと思つて、修道院へ来る人が澤山あるか、と問うた。

「妾は新教徒で御座いますから、斯ういふ事が大層面白く思はれるので御座いますよ。」

ドン・クレメンテは心算に、若し本當に之が彼女に大層興味を興へるにしても、それは彼女が新教徒であるからではなくて、テサレ夫人の友人であるからであらうと思つた。

「澤山は御座いませぬ。折節御座います。さういふ人々は他派の派を選びます。では貴女は新教徒だと仰有るのですなり併し、私共の方の禮拜堂へお這入りなさるのはお差支御座いますまい？ 私の申しますのは公 教 會の事では御座いませぬ」と顔を赤めて微笑みながら「この修道院の禮拜堂の事で御座います。」

それから彼は一人の新教徒の英國人で、聖ベネディクトを慕つて、よくスピアコに長逗留をして、度々サンタ・スコラスティカとサクロ・スペコを訪れる男の話をした。

「その人は實に美しい魂を有つて居ります。」

併しノエミは始めの題目に歸つて、今日までに誰か罪を悔む心に促されて世を連れて、法衣を着ずに僧院で仕へた者があるかと問うた。けれども彼女が返事を聞かぬ中に、ドン・クレメンテは一人の頗る肥大な僧が廻廊へ出て來たのを見て、一寸失禮しますと斷つて、その側

へ何か話しに行つた。纏てその威風堂々たる男と連れ立つて歸つて來て、是はドン・レオネといつて、その智識の量に於いても深さに於いても、遙に自分より優れた案内者であるを紹介して置いて、大に失望したノエミを後に、何處ともなく姿を隠して仕舞つた。

ジャンは一人になつてから、又も烈しい神氣昂進に襲はれた、噫、これは！心に還り來る過去の思出の堪へ難さ！噫、ブラリア寺が目前にちらつく！この入口やこの廻廊を通つてあの人が日に幾度となく往來するのと思ひ、またあの人がブラリア寺の事、運命の手に豫め定められたあの日の時の事、あの水の溢れた事、あの時の氣が遠くなつた様な嬉しさや、家へ歸る途すがらあの毛皮の外套の下で緊と握り合つた手の事などを、始終思ふに違ひないと思へば！噫、この胸が！あの人も今は自由の身、自分も亦自由の身！噫、この胸の中の戀しさは、戀しさは！

初この息を切らして喘々云つて居る女を脊負込で、甚だ不安を感じて居たフラ・アントニオは、纏て彼女が矢繼早に放ち出した言葉と質問とを不意に浴びて呆れ返つた。——この修道院の近くに野菜畑があるだらう？——在る。直其處の西側に在る。狭い徑一つ隔たつて居

る許りだ。——誰が畑を作るのか？——作男がやる。——若い人か？老人か？スピアコの人か、他所の人か？——老人で、スピアコの者だ。——その老人だけか？——いや、ベネデットが居る。——ベネデット？——ベネデット？——接待係の先生の故郷から来た若い男だ。——接待係の先生の故郷？——アレツシアだ。——で、其若い男はベネデット？——といふのだな？——誰でも皆ベネデットといつて居るけれども、それが本名かどうかわらぬ。——併しどんな男だ？——どんな男？それならば判つて居る。彼は殆ど僧侶にさへ勝つた位に聖い人だ。彼が身分のある人だといふ事は顔を見ても判る。けれども彼は犬小屋の様な處に住んで居て、パンと果物と野菜の他は何も食はぬ。そして、多分祈つて居るのであらう、山へ登つて終夜歸つて來ぬ事がある。彼は百姓もするし、接待係の先生に就いて圖書室で勉強もする。それに又彼の慈悲といつたら！彼の慈悲深い事はどうちや！彼は修道院から貰ふ僅ばかりの食物を貧民に遣つて仕舞つた事が度々ある。——だが、今頃何處へ行けばその人に會はれるだらう？——なかに、屹度畑に居るに違ひない。多分精を出して葡萄蔓に硫酸銅を撒けて居るだらう。

ジアンは動悸が餘り烈しく打つので眼が霞むで來た。彼女は黙つてちつと腰を掛けて居た。

フラ・アントニオは彼女がベネデット一の事を忘れて仕舞つたのだと思つた。

「時に奥様、このサンタ・スコラステイカも中々立派な寺でござすが、ブラリア寺を貴女に見せ度うござすよ！」

フラ・アントニオが斯う云つたのは、彼が若い時、ブラリア僧院が未だ廢せられなかつた頃に、彼處で數年間を送つた事があつたからであつた。それで彼は尊い尼母の噂をする様な調子で、その寺の話をした。

「いやもうブラリアの禮拜堂の立派な事といつたら！廻廊といひ、釣廊下といひ、庫裏といひ、偉いもんでござすぜ？」

思ひも掛けぬ之等の言葉を聞いて、ジアンは氣が立つて來た。その言葉は「行け、行け、直行け！」と彼女に云ふ様に思はれた。彼女は不意に椅子を離れた。

「今の畑は！何方の方なんです？」

フラ・アントニオは呆氣に取られた様子で、畑へは修道院を抜けていも、外を廻つていも行かれると答へた。ジアンは外へ出た。彼女は燃えるやうな思に心を奮はれながら、門を通り抜けて、右へ折れて、圖書室の下の廊下へ這入つた。其處で、両手で胸を抑へて雲時立ち

止つてから、又歩き出した。

巡禮の宿坊の在る中庭の入口に立つて居た寺の牧牛者が、塙と塙との間を通る小徑の向側の、畑の入口を教へて呉れた。ジアンは、畑にベネテットといふ男が居るだらうか、と彼に問うた。彼女は努めて胸の騒を抑へやうとしたが、その甲斐なく「然り」といふ答を豫期して聲を顔はせた。牧牛者は、如何か判らぬから見て来て上げやう、と答へた。彼は二三度戸を叩いて、「ベネテ！ベネテ！」と呼んだ。

到頭内に響音が聞えた。ジアンは倒れない様に用心して、入口の柱に身を靠せて居た。噫！若しビエロだつたならば何と云はうか？戸が開いてビエロではなく、一人の老人が現れた。ジアンは差當り氣が落着いた様に思つて、ほつと息を吐いた。老人は驚いた様子で彼女を眺めて牧牛者に云つた。

「ベネテットは此處に居やせんせ。」

ジアンは心の落着は既に消え失せて、彼女は身内に氷の様な寒さを覺えた。二人の男は黙つて不思議相に彼女を眺めた。

「この方がベネテットを捜してなさるのかい？」

と老人が問うた。

ジアンは答へなかつたが、牧牛者は彼女に代つて返事をした。それから彼は、ベネテットが昨夜外で一夜を過ぎた事、今朝未明にサクロ・スベコの森で濡鼠になつて臥て居た事、乳を飲めよと云つた時に、死にかゝつて居た人に生命が還つて來た様に、ぐつと飲んだ事などを物語つた。

「チヨヴァツキノ聴かつしやれ。」

牧牛者は急に眞顔になつて云ひ足した。

「ベネテットは乳を飲んで仕舞ふとな、そら、斯ういふ風に私を抱いたと思へ。私は昨夜寝られななで、頭痛はする、體中の骨はすきく痛む、いやもう氣分が悪うて、氣分が悪うてならなんだ。所がな、ベネテットが私の體を抱いて居る中にな、ベネテットの腕から一寸した身慄の様な物が、びりくつと私の體一面に傳うたと思つた、私は何か斯う暖な好い心持になり居つた。私は嬉しうてな、丁度胃袋の中に飛切上等の酒が二口程這入つてる様に、體中が暢つとして樂になつた。頭痛も癒る、骨の痛いのも癒る、何も彼も皆癒つて仕舞うた。其時私はつくづく思つた「この人はどうしても聖者ぢや！」と。いや、屹度

聖者に違ひないて！」

彼が話して居る中に、スピアコから来た跛の乞食が通り掛つた。彼は婦人が居るのを見て立ち止つて、帽子を差し出した。ジアンは牧牛者の話に全く心を奪れて居たので、彼に気が付かなかつた。そして彼が——牧牛者が語り終つてから——何卒お助けをと云つた聲も耳に入らなかつた。彼女は作男に、ベネデットは何處に居るだらうかと問うた。老人は何と答へて宜いか解らなかつたので、頭を掻いた。すると乞食は悲しげな聲で呻いた。

「奥様はベネデットーさんを捜してお出でなさりますか？ ベネデットーさんはサクロ・スペコに居られます。」

「サクロ、スペコに？」

とジアンは熱心を面に表して、乞食の方を向いた。作男は乞食に、ベネデットーがサクロ・スペコに居たのを自分で見たのかと問うた。

跛者は前よりも一層涙聲で語つた。彼は一時間餘前に、サクロ・スペコ道の、緑滴る椗の森を抜けて、僧院の二三歩手前を歩いて居た。彼は薪を一束擔いで居たが、酷く倒れて、その薪を負つた儘起き上がる事が出来なかつた。

「神様と聖ベネディクト様とが一人の坊様を其處へ送つて下さりました。その坊様は私を抱き起して、慰めて、私の手を曳いてお寺へ連れて行つて下さりました。そしてお寺で他の坊様達が私を介抱して下さりました。私は痛が癒りましたので歸つて参りましたが、その坊様は後に残つて居られました。」

「一體その話と此方の話と何の縁があるのぢや？」

と作男が叫んだ。

「何つて他でも御座りません。あんな装をして居られました故一寸氣が付きませなんだが、後で判りました。あの人で御座りました。」

「あの人で誰の事ぢやい？」

「ベネデットーさんで御座ります。」

「ベネデットーさんで誰ぢやい？」

「その坊様で御座ります。」

「氣が違つたのか！馬鹿！」

と二人の男は同時に叫んだ。

ジアンは跋者に銀貨を一つ與へた。

「よく考へて、本當の事をお云ひ！」

跋者は大喜びで、「如何なりとも奥様のお好きな様に、奥様のお好きな様に！私が思ひ違ひをしたので御座りませう、思ひ違ひをしたので御座りませう！」といった様な卑下した文句を感謝の言葉の間に交へた。そして信心深い言葉を續け様に啾々やきながら立ち去つた。ジアンはまた牧牛者と作男とに問ひ質した。若しやベネデットが僧になつたのではあるまいか？——そんな筈はない！あの乞食は白痴だから、何を云ふか知れない。

雖も牧牛者も其場を去つた。ジアンは、ノエミが自分の居所を門番に聞いて容易く知る事が出来ると思つたから、畑へ這入つて、橄欖樹の蔭に坐つた。作男の老人は好奇心を動かされて、大變失禮な事をお尋ね申しますがと幾度も詫びながら、ジアンがベネデットの親戚の者でもあるのかと問うた。

「あの人は金持の紳士ちやと皆の者が云うとりますものぢやでな。」

ジアンはその質問に答へなかつた。彼女はそれよりも何故皆の者がその人が金持であると思つて居るのか知り度いと云つた。——何故といつて、彼の起居振舞を見ても、彼の容貌を

見ても判る。眞實彼は紳士の様な顔をして居る。——で、彼は僧にはならなかつたのだな？

——左様だ。——何故僧にならないのだらう？——その譯は確に判らぬ。色々の噂がある。

中にはこんな事を云ふ者さへある。彼には妻があるが、その妻が（作男の言葉を借りて云へば）何か「不貞腐れ」をやつたのだと。ジアンが黙つて居るので、作男はこれがその妻、その「不貞腐れ」をやつた女かも知れぬと急に氣が付いた。多分彼女は後悔して、ベネデットに謝罪に來たのであらう。

「その嫁さんの話が本當なら、その嫁さんの方にも亦色々譯があつたのかも知れませんがや。ぢやが、人が善い事には掛けては、あれより善い亭主なんて、何處へ行つたて見付かりやうはごわせんせ。それゝ貴女さん、此處の坊さん達は皆聖い人に違ひごわせんが、あの人の様に聖い人は、このサンタ・スコラステイカにも、サクロ・スペコにも、一人ぢやてごわせん。それゝ受合ぢや！一番聖いドン・クレメンテさんでも左様ぢや。あの人もベネデットには敵やせん。如何したて、それゝあ！」

先程の乞食の言葉が不意にジアンの中に響いた。ベネデットが僧に！何故その言葉が胸に響くのだらう？斯う理由も無くその言葉が心の中へ還つて來るとは縁起でもない。二

人の男は、そんな馬鹿な事はない、あの跛者は白痴だ、と云つたではないか？左様だ、そんな馬鹿な事はない。それは彼女にも解つて居る。左様だ、あれは白痴だ。彼女にもその様な感があった。而も尙、その馬鹿の言葉が彼女の心の中で鼓動する。カーニヴァル節でない時に、道化た假面を被つた假装者が訪れた様に、怖しい、厭な心地がする！

「貴女さん、暫時お待ちなされたら、半時も経たぬ中に、屹度此處へ来るに違ひござせん。やあ！私とした事が、何を間違つた事を云うてる？十五分も経つたらやつて来ますぢや。今頃は圖書室でドン・クレメンテさんと一緒に勉強して居るか、ひよつとすると、禮拜堂にでも居るのでござせう。」

狭い徑を横切つて立つて居る圖書室から、直接に畑へ出る事が出来る。

「そら来た！」

と老人が叫んだ。

ジアンは飛び起きた。圖書室から畑へ出る戸が徐に開いた。そしてピエロではなく、ノエミが先刻の大僧と連れ立つて現れた。ノエミは橄欖樹の間に居る友を見て、酷く驚いて、急に立ち止つた。ジアンが畑の中に？若しや——？否、彼女の側にはあの老人の他は誰も居

らず、眞逆に彼がマイロニではあるまい。彼女は友の方を向いて微笑んで、指を振つて見せた。ドン・レオネは、修道院の中を案内して居る中にノエミから聞いた、門番小屋に待つて居た友といふのは之だと聞いて、ノエミに訣別を告げた。御二人は無論サクロ・スペコへお登りでせうが、自分の様な大體は逆も彼處へは登れません。

最早十一時に間がなかつた。セルヴァの家では晝餐の時刻が一時であるから、二人は十二時半に先程馬車から降りた處まで迎に來るやうにと、御者に命じて置いた。若しサクロ・スペコを見物したくば、ぐずぐずして居る暇がない。ジアンは病氣は最早癒つたらしいが、若し氣分が好くば、直出掛けやう。ノエミはジアンに行く事を勧めた。そして作男が側に居たから、ジアンが何故フラ・アントニオの許を去つて、畑を探險に出掛けたのかと問はずに、唯だ「貴女は好い加減な事を云つたのでせう、え？」と囁いたのみであつた。ジアンは、ノエミは是非直様サクロ・スペコへ出發せねばならぬが、自分は畑でその歸るまで待つて居る積だと答へた。ノエミは又何か企畫があるものと察した。

「いけませんよ！いけませんよ！妾と一緒にサクロ・スペコへ行きませうよ。それとも、未だ氣分が悪ければ、直スピアコへ降りませう。」

ジアンは、今頃降りても馬車が来て居ないから駄目だ、と反對した。けれどもノエミは如何しても屈服しまいと決心したから、緩々降りて行つて、馬軍の來るのを待つて直ぐ乗れば宜いではないかと、云つた。ジアンは他に異論を唱へる事が出来ないから、再び、前よりも言葉を強めて拒んだ。ノエミは物をも云はず、ジアンの眼を熱く覗き込んで、彼女の秘密の目的をその中に看破しやうとした。この無言の瞬間に、ジアンの心は再び乞食の言葉に襲はれた。奮然として彼女は友の腕を掴んだ。

「貴女は妾がサクロ・スペコへ行くのが宜いの？ 宜う御座んす。ちや行きませう。貴女は何か確に判りませぬ事を信じてるんでせう！ 運命に任せませう！」

併し、一足も歩かぬ中に、ジアンはノエミの腕を放して、ノエミが如何したのか譯が解らないので惘然と見て居る中に、手帖に「妾はサクロ・スペコへ参り申候。ドン・ヂウセツペ・フロレス師の事を御思ひ被成候て、何卒妾の歸りを御待ち被下度候。」と書いた。そして署名せずに、その小さな頁を裂き取つて、作男に渡した。

「その人が歸つたら、これを。」
それから再びノエミの腕を執つて、彼女は叫んだ。

「さあ、行きませう！」

April 20th

太陽の熱い光線は、水蒸氣の立ち昇る岩の多い丘の斜面を射て草や石に濕つばい香を發たせながら、荒涼たる狭い谿の縁に沿つて徐に這ふ霧の渦から、景色の背景を成してゐるイエネの丘陵の頂を帽子の様に覆つて居る一團の大な雲迄を銀色に光らせた。そして轟々たるアニオの水音は四邊の寂寞を満たして居た。ジアンはノエミの間に答へもせず、黙つて登つて行つた。彼女の沈黙と、蒼白い顔色と、精神が興奮したのか痙攣的にびく／＼震ふ腕と、泣吃逆を抑へる爲めに堅く詰めた唇とを見て、ノエミは益々心配した。何故彼女はこの様に心を動かされたのであらう？ 昨夜一晩、それから今朝も亦、サンタ・スコラスティカの門に着くまで、この憐な女は未來を望んで胸を躍らせながら、心配と希望との中間に彷徨つて居た。併し今はその胸の騒も昨夜のとは異つた性質のものであつた。渺くともノエミには然思はれた。彼女はジアンが、畑に居る中に、屹度何か彼女の語るを欲せない事、何か悲しい、怖しい事を聞いたのであらうと思つた。一體何を聞いたのであらう？ 眼に見えぬ川の悲歎の聲も、岩の多い坂道に生えた草の葉の無言の戦慄も、焦す様な暑氣其物も、人の心を慄然た

らしめた。櫛の黒い群を食止めながら、嚴然として立ち開かる弓門の敷歩此方で、ノエミは人聲を聞き付けて安堵した。その聲の主は、サクロ・スペコから連れ立って降りて来た、馬上のテインと徒歩のマリニエと院長とであつた。

テインは二人に會つて大層喜んだ様子で、馬を止めて、婦人等を院長に紹介してから、サクロ・スペコを激賞した。ジアンは院長と二言三言言葉を交へてから、近頃修道院で誓約を立てたか、或は又法衣を始めて着た者があるかと問うた。院長は、何分自分がサント・スコラステイカへ来てから僅數日しか経たぬから、今その質問に答へる事は出来ぬ。けれども、自分分は尠くとも過去一年の間に、サント・スコラステイカで誓約を立てたり、見習僧の法衣を着た者があつた様に思はぬ、と答へた。ジアンの顔には喜悅の色が溢れた。今漸く合點が行つた。彼女は假令暫時の間でも、農夫ピエロが僅十二時間の中に僧ピエロになつたのだらうなど信じたとは、愚な事であつた。彼女は直様サント・スコラステイカの畑へ引き返したいと思つた。併し如何して歸れやう？ どんない口實を設ける事が出来やう？ 彼女は出来るだけ早くサクロ・スペコの見物を済ませやうと思つてすん／＼歩き出した。此處、神の愛に心を動かされた人々の通路に立つて、裏に燃ゆる禁慾的熱情と、己の體を地より引き抜き、腕を空

に投げ上げんとする狂氣の様な努力との爲めに、振ち曲げられたやうに見える櫛の樹の蔭で、暫時の間休息しやうと、ノエミが云ひ出した。ジアンは苛々して拒んだ。彼女の顔色は既に舊に復つて、眼は活氣を帯ひて居た。彼女は短い小徑の向の端に在る狭い階段を足早に昇つて、ノエミ（ジアンの様子の變化した原因を覺る事が出来なかつた）が頻に勧めるのにも構はず、階段を昇り詰めた所で、息を休める爲めに止る事も肯はなかつた。この階段の頂に立つと、暗い、深い谿の景色が不意に脚下に現れる。左手には、岩石の露出した斜面を横切つて、サクロ・スペコ修道院の不様な窓のある陰鬱な壁が在つて、その上に鷹や鳥の好んで集ふ、恐しい絶壁が高く聳えて居る。僧院の下の谿間には聖ベネディクトの薔薇園が在つて、薔薇園の下には蔬菜園と橄欖樹の森とが、水音高く吼えるアネオの川床に達するまで勾配をなして居る。イエネの丘陵の上に休らうて居た雲の塊は今し次第に陸騰して、空を侵しつゝあつた。一抹の影が絶壁の上と、修道院の上と、ノエミが景色に見惚れて脇突をして居た欄干の上とを過つた。

「まあ立派なこと！ 今影が出来たから、一寸の間でも此處に居やうぢやありませんか。」
とノエミが云つた。

所が丁度其時、二人から二歩とは離れて居ない修道院の小さな入口が開いて、男と女と二人連の見物人が出て来た。案内をして居た僧はノエミとジアンを見て、彼等が這入るだらうと思つて、戸を開けた儘待つて居た。ジアンが急いで這入つたので、ノエミは意ならずもその背後に随つた。

「十三世紀の壁畫です。」

と暗い玄關を通りながら、ベネディクト僧は興味の無い調子で云つた。ノエミは立ち止つて、その古畫を珍し氣に見た。ジアンは疑惑に心を惱亂せられて、右へも左へも向かずに、案内僧に随つた。若し院長が思ひ違ひをして居たので、乞食が云つた事が眞實であつたならば、如何であらう。彼女は想像の中にあのブラリア寺の中庭での楽しい出會、男の眞蒼な顔、身が慄ふ程嬉しかつたあの「有難う！」などを思ひ浮べた。寒氣が總身の血液を傳つた。そして、想像の手綱を不意に引き締めたかの様に、彼女はノエミの方を向いた。

「いらつしやいよ！」

彼女は僧に随つて歩いたけれども、その云ふ所を少しも聞かず、その示す物を一つも見なかつた。ノエミは歸途に屹度何か禍が起る様な氣がしてならなかつたので、不安の念を裏

み兼ねた。ジアンが先刻作男の老人に云つた言葉から推せば、彼女は歸途に再びサンタ・スコラスティカの畑に立ち寄る積らしい、危険な場所は彼處である。ノエミは最早その有名なマイロニといふ男に會ひ度なくなつた。彼女は唯だジアンを、男に遇はさずに、無事にセルヴァの家へ連れて歸り度いとのみ願つた。そして、出来るだけサクロ・スペコに永く居て、歸途にはサンタ・スコラスティカへ立ち寄る時がなくなる様に心かけた。それ故彼女は心の中では、外觀は裝飾も無く陰鬱ではあるが、内部は壯嚴なこの修道院を、何時か又姉か或は姉婿かと一緒に、もつと落着いて見物に來たいと許り思ひながら、表面では頗る興味を覺えた様子を装つて周囲を見廻した。

神聖の氣の蓄藏場たるこの僧院の内へ降り立つてから後は、二人は生氣の無い冷な空氣や、神秘的な物影や、上から映し込む黄味掛つた光や、濕氣を含んだ石と燻ぶつた燈心と微臭い戸帳との香などに圍繞せられたのと、足下に踏む床と同じ高さに在る尖つた圓天井の下に立洞穴へ降りて行く時に路に踏み迷つたのと、多くの小禮拜堂や、洞窟や、暗い階段の下に立つ十字架や、血汐の色、暗夜の色、雪の色をした大理石や、壁や弓柱の上の空地に鯨子張つて居る、ピザンチン風の容貌を有つた信心深さうな多くの像や、窓際の壁龕の中や、圓天井の

尖頂の上や、長押の線に沿つて、銘々頭に尊い輪後光を附けて立つて居る小僧侶の像などに眼を眩惑せられたので、何處を如何して歩いて居るのか、ジャンにもノエミにも判らなかつた。殊にジャンには殆ど夢路を辿る心地がした。

僧が嚮導をして、ジャンが直その背後に隨いて、ノエミが五六歩許離れて殿軍をしながら、三人が、聖階を降りて行く中に、ジャンは突然兩手を伸して案内僧の肩を引摺んだが、直その無意識の動作を恥て、手を引き込めた。僧は吃驚して、足を止めて、彼女の方へ頭を向けた。

「御免なさいまし！あの坊様は誰で御座いますか？」

聖なる階段の中段と中段との間の、左側の壁の突き出た蔭に、ベネディクト派の法衣を着た真黒な姿か、暗い隅に、額を大理石に靠せて、身動きもせず直立して居た。ジャンは氣が附かずに四五歩通り過ぎてから、不圖背後を振り返つてそれを見たので、同時に、直覺的の疑念が彼女の戦く心の中に閃き渡つた。

「あれは僧では御座いませぬよ、貴女。」

と答へて、僧は或る小禮拜堂の潜戸の錠を開く爲めに身を屈めた。

「如何したの？」

とノエミが側へ寄つて來た。

「あれは僧では御座いませぬ？」

とジャンは繰り返した。

ノエミは友の聲の常ならぬ響を聞いて慄然した。彼女は壁の影の中に直立して居た姿に氣が付かなかつたのであつた。

「誰か？」

と彼女は問うた。

二人が問答して居た間に戸を開け終つた僧は、ノエミの言葉を聞き違へて、先刻自分が話した事に就いて彼女が何か云つたのだと思つた。

「いえ、聖フランシスの眞影は此處には御座いません。もう少し下へ降りますと、カヴァリエ・マネントの書きました聖フランシス像が御座います。今にお目に掛けます。何卒お這入り下さい。」

「如何したの？」

とノエミが低い聲で問うと、ジャンが前よりも落着いた聲で「何でもないのでよ。」と答へたの

で、ノエミはジアンを通り越して、小禮拜堂へ這入つて、そして僧の説明に耳を傾けた。其時、かの黒い姿は壁の前から動き始めた。ジアンはそれが尖つた弓門の下の薄明の中を徐に上へ昇つて行くのを見た。上の中段で、その姿は右へ曲つて、隠れたと思ふ間もなく、遠見になつた背景を、何處とも見えぬ窓から映し込む光に照らされながら横切つて居る階段の岐路の上に再び現れた。その姿は遅々として、さも懶氣に昇つて行つた。大な弓門の側壁の背後に消え失せる前に、その姿は頭を俯けて、下を見た。噫、ジアンはその戀人の顔を見た！

その刹那、彼女を促す電光の様な意志に後ふ如く、彼女の運命の奔流に押し流さるゝ如く、云ふ可き言葉も、爲すべき事も知らねど、血の氣を失つた顔に決然たる色を現して、彼女は階段を昇り始めた。上の中段を過ぎて將に明い階段に足を踏み掛けやうとした時に、彼女は躓いて倒れて、霎時俯に伏して居た。斯くして、ノエミには、小禮拜堂を出て行く時に彼女の姿が見えなかつたので、彼女は屹度聖フランシスの畫像を捜がしに下へ降りたのだらうと思つた。ジアンは起き上つて前へ進んだ。熱烈な情に心を引裂かれて居た彼女の耳には、聖い壁の上に年經て固くなつた、天の平和を樂しむ聖徒の像の呼ぶ聲も聞えなかつた。彼女の行手は凡て沈黙と空虚とであつた。彼女は未だ知らぬ道を、睡遊状態に在る者の様に、

踏み迷ひもせず、足早に進んで行つた。彼女の凡ての感覺は鋭敏になつて、悉く彼女の聽覺に集中した。そして何處かの戸の微に軋る音、他の戸を漏れる風の氣息、誰かの衣擦れの音など、遠くに聞える細かな響に耳を敏ながら、彼女は暗い狭い所や明い廣い所を、踟躕ひもせず、脇目も振らずに、通つて行つた。斯くて、最後の戸口の廣く開いた扉の間を足早に過ぎた時に、彼女は彼とはたと顔を見合せた。

彼も亦、聖階の上で、ジアンが彼を見たと同時に、彼女に氣が付いた。彼は女が多分自分氣が付かなかつたらうと思つたが、それでも見物人が普通に通る道筋は避けた。併し女の衣服の忙しくさらさらと擦れる音が、この神秘的な堂に近づくのを聞くに及んで、扱はど覺つて、入口の方に顔を向けて、待つて居た。

女は堂に這入らうとする刹那に彼を見て、嚙と立ち止つた。そして石に成つた様に二枚の開き戸の間に立ち竦んだ。彼女の眼は彼の眼を凝と見た。それには最早昔のピエロ・マイロ

二の眼差が無かつた。
彼の容貌は全く變つて居た。彼の體は、多分黒い法衣を纏つて居た故でもあらう、前よりは瘦せて見えた。彼の蒼白い、肉の落ちた顔と、前よりも高くなつた様に思はれる額には、

ジアンが今までに少しも知らなかつた一種の威厳と、肅然たる氣象と、哀情を帯びた優しさどが現れて居た。またその眼は曾てありし眼とは全く異つて居た。その中には得も云はれぬ神々しい或物と、深い謙遜と、大なる力——彼の心に源を發したのではなく、彼の心の中にある神秘的な泉から湧き出づる至高の愛の力、ジアン心の彼方にまで達して、而も靈魂の奥の不可思議な、彼女の未だ知らぬ境地に彼女を求め愛の力——どが輝いて居た。徐々に彼女は双掌を組み合はせた。そして膝を衝いた。

ベネテットは左の手の人差指を唇に當て、右の手でフランコラノ山の四手樹と脚下遙に轟く川とを望む椽側に面した壁を指差した。その壁の中央に、黒々と大きく、

「無言」

と書き付けてあつた。この語が壁に書かれて以來幾世紀の間、未だ曾てこの堂内に人聲の響を聞かなかつた。ジアンはその方を向きもせず、その語を見もしなかつた。ピエロの唇の上の指は彼女の唇を封するに充分であつた。けれども彼女の咽喉に込み上げて来る泣吃逆は如何とも出来なかつた。彼女は唇を堅く閉ぢて、瞬きもせず彼を見詰めた。大な涙がその頬を静に流れた。兩腕を垂れた儘、身動きもせぬベネテットは頭を少し俯けた。そし

て眼を閉ぢて、祈禱に心を凝した。堂の内では、影と死とを孕んだ、大な、黒い、權威ある語が、この二個の人の魂に打ち勝つたが、日の光に照らされた椽側からは、アニオ川と風との魂が憤然として反抗の叫聲を揚げた。

ベネテットが眼を閉ぢてから數秒経つて、ジアンは不意に大な泣吃逆、彼女の運命の悲痛を悉く集めた惨ましい泣吃逆に、肩から膝まで烈しく震はされた。彼は眼を開いて、憐むが如くに彼女を見た。彼女は渴した者が水を飲む様に、彼の眼色を飲んで、悲しい感謝を表すやうに、二度啜泣をした。そしてこの彼女の最愛の者が再び指を唇に當てたので、彼女は點頭いて同意を表した。然り、然り、黙つて居やう、靜にして居やう！彼女は猶彼が身振と眼色とを以て示すが儘に立ち上つた。そして身を後に退いて、彼が堂外に出る道を開けた。そして柔順に彼の背後に隨つた。彼女の希望は胸の中に死に、多くの楽しい空想は心の中に死に果て、彼女の愛は變じて恐懼と尊敬とになつて居た。

彼女は男に隨いて通稱「上の禮拜堂」といふ堂へ這入つた。此處で、深い影の中に朦朧と大きく見える聖壇と、夢の様な黒い古畫の前に際立つて輝く銀の十字架とを圍むで立つ三つの尖つた小弓柱の前で、ジアンは彼が手眞似で命じるが儘に、尖つた圓天井の輪廓に沿つた大

弓柱の右側に置いてあつた祈禱机の前に跪いた。彼は左側に置いてあつた祈禱机の前に跪いた。弓柱の上の壁に、十四世紀の畫家の筆に成つた、聖母大悲歎の圖があつた。左側の高い窓越しに光線が「悲哀の母」の姿を照らした。ベネデットは影の中に居た。彼は漸く聞える位の低い調子で呟いた。

「未だ信仰は無いのか？」

彼が話したと同じ様な低い聲で、彼の方を向かずに、ジアンは答へた。

「はい。」

彼は霎時黙つて居たが、纏て同じ調子で言葉を續けた。

「お前は信仰を渴望するか？お前は神を信じて居る様な生涯を送る事が出来るか？」

「はい、それが爲めに強ひて心にも無い事を云はねばならぬやうな事が御座いませんならば。」

「お前は貧しい者や不幸な者が皆お前の愛する魂の一部分であるかの様に、その人々の爲めに盡すと約束が出来るか？」

ジアンは答へなかつた。彼女は其様な事が出来るかと言ふ事には餘りに正直で、餘りに先

見の明があつた。ベネデットは猶言葉を續けた。

「私が今後或時にお前を私の側へ呼び寄せると約束したら、お前は今の事を約束するか？」

彼女はベネデットが、遠からず来るべき死の嚴肅なる時の事を思ひながら、斯く云つたといふ事を知らなかつた。彼女は身を震はして答へた。

「はいはい！」

物影の聲は更に云つた。

「その時には必ずお前を呼び寄せやう。けれども私が呼び寄せるまでは、お前は決して私に會はうと思つてはなりませんぞ。」

ジアンは両手を眼に押し當て、息が塞まつた様な調子で「はい」と答へた。彼女は烈しい熱病に伴ふ苦しい夢の渦巻の中に旋回して居る様な感をした。ピエロの聲はもう聞えなかつた。二三分過ぎた。彼女は涙の溜つた眼から手を離して、面前の尖つた弓柱の彼方の、夢の様な黒い古畫の前に際立つて輝く十字架を見詰めた。

「貴方はドン・チウセツペ・フロレスさんがお亡くなりなすつた事を御存知で御座います

か？」

と彼女は呟いた。

沈黙。

ジアンは振り返つた。禮拜堂は空虚であつた。

第五章 聖者

(其一)

月は既に没して、アニオ川の水聲は、恰も活氣ある會話を續ける中に、時々、他人に聞か
 れてはならぬ事を對手に向つて繰り返す者のやうに、或は高う、或は低う、夜風の中に響いた。
 スピアコの町の在る、景色美しい貝殻形の低地で、この川の話聲に耳を傾けて居たのは、多
 分チヨヴァニ・セルヴァ唯一人であつたらう。彼は露臺の端に近く座つて、欄干に肘を寄せ
 ながら、物をも云はず、水音の響く闇の中を眺めて居た。マリアとノエミも亦夜風の齋す涼
 しさで草木の香を樂むために露臺に出て居たが、彼等は少し離れて立つて居た。纏てマリ
 アが妹の耳に一言囁くと、彼女は戸内へ退いた。ノエミが居なくなつた時に、マリアは極め
 て静に夫に近いて、接吻した。

「貴方。」

今までも、熱烈な愛情が彼女の胸に漲り溢れた時に、彼女がその愛を表すには不十分であ
 り、また多くの唇に用ゐられて磨滅した様に思はれる他の凡ての言葉を措いて、聲を潜めて

啞くこの一言の中に、彼女の全身全霊を籠めて夫に捧げた事は、抑も幾度であつたらう！
チヨヴァニは悲しく懶げに、

「マリア。」

と答へたが、妻の顔が自分の顔を離れたのを感じたので、自分の返事が冷であつたのかと心配して、

「最愛者！」

と云つた。彼女は霎時黙つて居た後、両手で夫の頭を靜に撫でながら、云つた。

「真理の爲めに苦しむ者は福なり。」

彼は愛情に身を震はせて、微笑みながら、振り向いた。四邊を一瞥してノエミが居らぬ事を確かめながら、彼は腕を上へ伸して、愛する者の顔を自分の唇の處へ引き寄せた。

「私にはお前が實に必要だ！お前の力が必要だ！」

「ですから、妾は貴方の屬なので御座います。妾は貴方が愛して下さればこそ強いので御座います。」

彼は妻の手を執つて、恭しくそれに接吻した。

「お前には解つて居るかね？」

と彼は臙て首を上げて云つた。

「私の苦痛が實際どれ程深いか、多分お前には解らぬかも知れぬ。私は年を取つて居るが、自分で自分が解らぬのだから、私にも實際どれ程だか解らぬ。今も今で、私はその事を考へて居たのだ。我々が傷を受けて苦しむ場合には、その苦痛の原因は目に見えるけれども、若し熱で苦しむ場合には、丁度今の私の苦痛のやうに、その原因が隠れて居るから、如何しても充分にそれを知る事は出来ぬ。」

彼が進歩的カトリック教徒の同盟に就いて相談する爲めにあの集會を開いてから、未だ一ヶ月も経たなかつた。その結果として何等の同盟も興らなかつたが、あの時以來引續いて起つた奇怪な、不愉快な出来事は、如何してもあの集會にその源を發したものとより他思はれなかつた。テイン教授は彼の屬する大監督の命によつて愛蘭士へ召還せられる事になつた。彼は時を移さず法王應附の英國人の最高監督を訪問して、自分の健康の勝れぬ事を告げ、賜暇の期限の延長を大監督に請願するに就いて、その援助を求めた。その最高監督は事の成行を話して、テインの眼を開けて呉れた。この打撃は羅馬から來たのであつた。羅馬ではテイ

ンは其筋から頗る悪く見られて居た。法王廳が彼の著書を禁止書目に編入した上彼を強いて教授の職を辭せしめやうといふ或る一部の人の希望を容れなかつた理由は、唯だテインの友として知られて居たこの最高監督を憚つたからで、殊に英國政府を憚つたからであつた。最高監督はテインに忠告して、羅馬では追々暑氣が烈しくなつて來たから、此處を去つて、其筋の干渉を受けないモンテカティニかサルリマツチョレかの温泉場へ行つて、もう少し病氣を重くせよと云つた。ドン・クレメンテは其後一度も顔を見せなかつた。そしてチヨヴァニがサンタ・スコラスティカに彼を訪うた時に、彼は眼に涙を浮べて、二人の友誼は戦時の財寶の様に埋め隠して置かねばならぬと云つた。ドン・パオロ・ファレはパヴァリアで成年者の宗教教育に従事して居たが、その仕事を差止められて仕舞つた。レイニ男爵はその家族を通じて動かされた。彼の立派な、信仰篤い母は、彼に向つて、世を去つた父親大事と思ふならば、何卒あのセルヴァといふ危険な友と絶交して呉れよと、涙ながらに掻口説いた。レイニは、これは屹度母の懺悔僧の差金に相違ないと思つて居た。それで彼は中々承知しなかつたので、彼の家庭の平和はそれが爲めに亂された。それから最後に、或る教役者雜誌が、チヨヴァニの著書全體に對する評論を三篇掲載した。その中には偏頗な、不承不承の賞讃もあつ

たが、また同じく偏頗な、烈しい非難もあつた。その批評家は、チヨヴァニの著書其物の性質は唯理的であると斷言し、著者が全く世俗的學問のみに頼つて、斯くの如き神學上の智識の絶無が氣の毒な程明に見える著書を臆面も無く公にした事は、許し難き厚顔の所爲であると酷評した。この三篇の論文は、その主旨に於て、チヨヴァニが目下著作中の基督教道徳の合理的基礎を論ずる書物の世に出る事を禁ずる、恐しい宣告であつた。そして這裡の消息を解して居る者の考では、これはこの他のチヨヴァニの著書の禁止書目編入を豫言するものであつた。

「貴方は御自分の御意見に就いて疑を有つてゐらつしやるので御座いますか？」

とマリアが問うた。この質問は眞實彼女の心から出たものではなかつた。彼女は夫を深く愛して居たけれども、その愛に眼を暗まされなかつたから、彼女は彼の魂を善く解して居た。彼女は夫が教會の非難を豫期する念に胸を惱まされて居ると信じた。チヨヴァニは檢閲官會議の下した或る宣告を事も無げに評する事もあるが、彼が自分で思つて居るよりも一層深く教會の政治を執る者を尊敬する彼の良心は、將に彼の頭上に墜ち來らんとする打撃の爲めに、餘り深く苦しめられまいと思つても、矢張苦しめられて居るのだと、マリアは思つた。

で、「貴方は恐いので御座いますか？」と問うて彼の感情を害してはならぬと思つたから、彼に事の真相を明白させる爲めに、今の様な他の疑問をそれとなく掛けたのであつた。所がチヨヴァニの答は大に彼女を驚かした。

「左様だ。私は自分を疑つて居る。併しお前が推量して居る様な風に疑つて居るのではない。私は自分が純然たる智的の人間であり、また私が神の前に於ての私の意見の價値といふものを誇大して考へて居はしまいかと心配する。私は自分の意見を充分實行して居ないかと心配する。私は私と同じ意見を有つて居ない人や、私を迫害する人や、また先頃ティン君と一緒に此處へ来て、他言してはならぬ筈のあの晩の議論を、黙つて居らねばならぬ筈の場所で、饒舌つたらしいあの瑞西の僧などに對して、私は餘り腹を立て過ぎて居はせぬかと心配する。私は自分の生活が餘りに沈靜な、餘りに安逸な、又、私に取つては勉強する事が樂なものだから、餘りに快樂の多い生活ではあるまいかと心配する。私が隣人を愛するといふ事を餘りに軽く見て居る事を思ふと、之でも私は神を愛して居るのかと、それさへ疑はしくなつて来る。私は神秘的の快樂が、或はこの點に就いて私の良心を鈍らせるかも知れぬと、度氣が付く事がある。お前は、マリヤ、お前はお前の信仰を日々の生活に實現して居る。お

前は病人を見舞つたり、貧民の爲めに働いたり、慰めたり、教へたりするけれども、私は何も爲ぬ。」

「妾は貴方と一つで御座います。貴方が妾をこの様にして下さつたので御座います。それに又、貴方は智識の施物を人にお與へなされるでは御座いませんか。」

とマリヤは囁いた。

「否、否！そんな言葉を私に適用するのは僭越だ！」

人類を同胞として愛する念がチヨヴァニの心の中に強くない事は、マリヤも知つて居た。そして夫がこの缺點を有つて居るために、傳説や習慣の産物といふよりも寧ろ天才と研究と神を愛する心との果實である所の、智識によつて高められた、深い、彼の信仰と、彼の智識的能力とから當然生るべき宗教上の大使命を首尾よく成就する事が出来ないのだと感じて居たが、その事を自分に向つてさへ白状する事を好まなかつた。彼女はチヨヴァニが同胞に對して冷淡であるといふ事が、彼女に傾注する彼の深い愛情に貴い味を添へる故に、時としてその冷淡を善い事に思つた事があるのを耻ぢて、自分の無情を責めて居た。併しチヨヴァニは人間としての同胞に對する義務を覺つて居た。そしてマリヤは彼が他人の懇願に耳を假さなかつ

た事も、他人の悲に心を動かされなかつた事も、決して見た事がなかつた。博愛の極緻ともいふべき、人の中に神を認めて之を愛するといふ事は、チヨヴァニの爲さなかつた所であつた。彼は神の中に人を認めて之を愛した。斯くの如きは單に父を喜ばす爲めに兄弟に深切を盡す者の愛の如く、冷な愛である。けれども、斯ういふ氣質は如何に立派な心を有つて居る人にも免れぬ所である。チヨヴァニの心もこの様な性質を具へて居た。そして彼はかの崇高な愛を有たず、又之を人に與へる事が出来なかつたので、自らの短所を認めて、謙遜し悲しんで居た。マリヤは無限の愛情を以て彼の髪を撫でながら、惠深い神の宥恕が、自分の心と手とを通じて、彼の頭上に流れ出ると空想した。

「あの、貴方、大變人助けになる慈善の仕事が一つあるのですが、如何で御座いますか？ デサレさんからノエミに手紙が参りましたので、ノエミは貴方に力を貸して戴き度いと申して居りますの。」

「では此處へお呼び。」

ノエミが出て來た。今日チヨヴァニと彼女との間に小な不和の雲が湧いた。二人が共に宗教を談ずる様な事は滅多に無かつたが、今日は宗教の話が出た。ノエミは理も非も無く自分の宗教に縋り付いて、議論を好まなかつた。彼女はマリヤを愛し、チヨヴァニを敬慕して居たけれども、若し自分の信仰の理由と性質とを考查してみたならば、自分がセルヴァ夫婦の自由な進歩的のカトリック教の方よりも多くジャンの懷疑説の方に傾きはしまいかと危ぶんで居た。ノエミには彼等のカトリック教は混血兒的の物の様に思はれた。多分彼女はそんな考をジャンから學んだのであらう。といふ譯は、ジャンは精神が興奮して怒りつぼくなつた時に、自分の懷疑説を辯護するために、かの靈味と真理との光によつて輝く故に自分の大敵となるかも知れぬ信仰を、口を極めて罵倒した事が折々あつたからである。ノエミは姉をば疑つて居なかつたけれども、何時もチヨヴァニの心を疑つて、彼が自分をカトリック教に改宗させやうとするかも知れぬと思つて居たから、今日彼と共に懺悔所の事を論じて居た時に、二三度随分皮肉な返事をしたので、その言葉の節々に彼女の疑念が明に現れて居た。その時チヨヴァニは容を改めて言葉靜にノエミを諭して、誠實な清い心を以て真理を得んと冀ふ時に不知不識懐抱く謬見は神の前に罪が無いけれども、若し真理を求め願に關係の無い感情を少しでも有つて、真理を斥けんとするならば、その結果は唯だ罪あるのみであると言つた。

この言葉は更に深くノエミの感情を害した。彼女は姉婿が如何なる権利によつて、神に代つて人を裁くのかと問はうと思つたが、自怒を制して、其儘話を止めて仕舞つた。

彼女は後で其事を善く考へてみて、自分が腹立たし相に黙つて居た事を後悔した。これはチヨヴァニの議論が彼女の所信を動かしたからではなく、彼女が彼の懐抱いて居る宗教上の持論が彼に悲を齎した事を知り、彼の意氣が如何に銷沈して居るかを見て氣の毒に思つたからであつた。斯ういふ理由があつたから、彼女はチヨヴァニの側へ呼ばれて行く際に、姉から彼を深く愛して居る様子を彼に見せて呉れよと頼まれて、今宵だけはジャンの信任に背かうと決心した。彼女はジャンが必ず他言をして呉れるなと云つて書き越した事の中で、事情止むを得ず話さねばならなかつた部分だけをマリアに打ち明けて居た。——ジャンは今尙肉體上にも精神上にも惱んで居るので、かの「イエネの聖者」が肉體や靈魂の病を癒して居る噂を聞いて、ノエミに是非一度イエネへ行つてその聖者に會つて呉れるやう、そしてその聖者の事を委しく通知して呉れるやうにと頼んで来た。けれどもノエミには自分一人でイエネへ行く事は来ぬから、チヨヴァニに頼んで同行して貰はねばならぬ。——彼女が姉に打ち明けた事は之だけであつたが、今彼女は友の口止めをすつかり破つて、少しも隠す所なく

姉夫婦に話した。

哀なジャン・デサレは、此頃は前にも増して、其身の不幸を歎いて居る。彼女は暫時スピアコに逗留して居た間に昔の戀人に遇つたのである。では矢張ドン・クレメンテだつたのだらうかとチヨヴァニが叫ぶ。否、ジャンが此處へ着いたあの晩に、ドン・クレメンテと共に来たサンタ・スコラスティカの畑の仕事をして居た男——今は最早修道院には居ぬ——此頃アニオ川の流域到る所に大評判で、羅馬にまで「イエネの聖者」といふ名が聞えて居る男がそれである。ノエミはあの當時に事實を云はなかつた事を二人に詫びて、ジャンが繰り返し繰り返し他言を禁じたのであるから、若しノエミが信任に背いた事を發見したならば、どの様な騒動になつたか知れない。その上、あの時に話した所で、何の役にも立たなかつたらう、と云つた。チヨヴァニは人目を憚る様に密と妻の手を取つて唇に當てた。マリアはその意味を覺つて微笑むだ。それから夫婦は壘み掛けてノエミに質問を浴せた。

左様、ジャンは此處へ着いた夜にその男を見たのである。マリアもチヨヴァニもそれを聞いて、ジャンが眩暈を感じた理由を漸く了解した。ジャンとマイロニとはその翌日サクロ・スペコで出會つた。その邂逅に就いてノエミが聞いて居た事は、唯だジャンの希望が全く破

碎き盡された事、男が僧衣を着て居て、その身を永久に神に捧げた者の様な物の云ひ方をした事、女がその生涯を善行に捧げる事を彼に約束した事、今後二人が直接に文通する事は出来ぬ事位であつた。

今度の手紙は、ジャンがスピアコを去つて二日目に、羅馬に居た弟と一緒に居つたヴェネトの彼等の住居、デネエド別荘から来たのであつた。彼女は實に苦しい絶望に心を襲はれた時にその手紙を書いた。彼女の弟は、彼女が貧民の爲に多くの時を捧げるのを見て驚きに堪へず、彼女がその思想と生活との調子を斯く革新めた事を腹立たしく思つた。そして金を施したくば幾何施しても可いが、乞食をぞろぞろ家へ引張つて来たり、彼等の小屋を訪れたりする事は、如何しても許す事は出来ない！これは馬鹿馬鹿しい、五月蠅い、笑ふべき、畸人めいた、坊主臭い所作だと云つた。この他にも未だ難儀な事があつた。ジャンは町に在る色々の婦人慈善會に加入したいと思つたが、マイロニの事に就いてあの様に批評の種となつたこの女、折々日曜日に教會へ行きはするが、復活祭の献金をせぬこの女に觸られて、彼等は含羞草の様に縮み上つて逡巡して仕舞つた。これが難儀の一つ。それから今一つの難儀は、閑散で遊び馴れた彼女の従來の習慣であつた。最初の敗北に亂れた陣形を立て直して、

その習慣は今や新しい道路を進軍せんとする彼女の歩を妨げ始めて、道が次第に険しくなるに従つて益々その勢が猖獗になつた。若し今マイロニから助言が来ないならば、若し彼の助力が無いならば、彼女は如何しても兜を脱がねばならぬ様な氣がした。彼女は男に會ふ事が出来ぬ。また彼は屹度文通をも禁ずる積であつたに違ひないから、手紙を遣る勇氣も無い。若し爲すに濟むならば、彼の機嫌を損ねるやうな事はしたくない。彼を怒らす位なら寧ろの事死んだ方がよい。報知新聞に掲つて居た「イエネの聖者」に關する記事の中に、聖者は若い人物で、嘗てサンタ・スコラスティカの野菜畑で日傭稼をして居た事があると書いてあつたから、屹度彼に相違ない！彼女はノエミに、後生だからイエネへ行つて自分の爲めに慰安の一言を彼に乞うて呉れよと懇願した。

ノエミは行く積で居るが、チヨヴァニは同伴して呉れまいか？この依頼をしたノエミの謙遜な調子の中に、チヨヴァニは宥恕と和睦を求め無言の歎願を聞いて、彼女の方に手を伸して云つた。

「お安い御用です。」

マリアも一緒に行かうと云つた。そして三人はイエネの山道を登る時に熱い太陽に照り付

けられない様に、翌朝五時に徒歩で出發する事に定めた。それから彼等は聖者の噂をした。
アニオの流域一帶此處でも彼處でも、人々はどりどりに彼の噂をして居た。ジャンが見た新聞の記事には、聖者を見、その言葉を聴く爲めに大勢の人がイエネへ集るといふ事、彼が奇蹟に依つて人を癒すと云ひ觸らされて居る事、彼が三年の間サンタ・スコラステイカの畑で働きながら送つた贖罪と祈禱の生涯に就いてベネデイクト派の僧侶が感心して人に語つて居るといふ事などが書いてあつた。スピアコでは更に驚くべき噂が傳はつて居た。セルヴァ家の下女の親戚に當るトルクワトといふ森番をして居る至極正直な男が、聖者に面會する爲めに態々羅馬から來た詩人の様な男と一緒にイエネへ行つて來た話を、その下女にして聞かせた。彼處へ行く途中と歸る途中で二人は先づ五十人位の人に遇つたらう。而も皆立派な紳士や貴婦人許だつた。イエネの山道では女が大勢祈禱文を唱へながら行列を作つて行くのに遇つた。イエネへ着いてすつかり話を聞いた。或る晩イエネの教區の教師が妙な夢を見た。火の玉が一つ丘の頂に樹てゝある大な十字架の上に乗つて、その火が十字架に移つたけれども、十字架は炎々と燃える許で、少しも減らなかつた。そして四邊の山も谷も皆その光に照らされて明るかつた、といふ夢であつた。その翌日、ベネデイクト派の教友の法衣を

着た若い男が、彼に宛てた手紙を持つて、彼の前に現れた。その手紙はサンタ・スコラステイカ修道院長から來たので、その中に次の様な事が書いてあつた。「余は明に燃ゆる火を有てる天使を汝に送る。彼に依つてイエネは宇宙にその名を知らるゝに至らむ！」その手紙には又、この青年は王者の血統に生れた偉い貴公子であるが、神に仕へる爲めにその身を卑しうして、三年の間サンタ・スコラステイカの野菜畑で勞働したのであると記してあつた。教師は夢の中に見た火と、彼の家へ來た火との爲めに烈しく心を動かされたので、氣が狂はん許になつて、酷い熱病に罹つた。その翌日は祭日であつたが、イエネに住んで居る他の二人の教師の中で、一人は病氣で、今一人は母の病氣を見舞ふために二日前にフレッツチノへ行つて留守であつた。教師の家の僕は、そのベネデイクト派の青年の事も、教師の夢の事も、何も彼も残らず村中に云ひ觸らした。村中の人はその青年が勤行をするのを聞かうと思つて、我も我もと教會堂へ集まつて來た。彼等は彼が教會堂へ這入る姿を見て、彼が禮拜式を司るのではないと、幾何云はれても肯かなかつた。そして、式を司らないのなら、せめては説教だけでもせよと頻に求めた。彼は自分は禮拜式に説教をする資格がないと云つて聞かせたが、中々承知せず、彼を取圍んで、餘り喧しく促したので、遂に彼は手を振つて彼等に教會堂を出

よと命じて、自分の近くに居た人々に外で話さうと約した。到頭約束通りに外で話した！その話が實際如何いふ事であつたか、下女はマリアに話す事が出来なかつた。又マリアも直接トルクワトーに聞いてみたが、餘り善く判らなかつた。けれども彼女は自分の方から色々問を掛けてみ、また自分の想像を所々に加へてみて、漸くその説教を大凡次の様に組立てる事が出来た。

汝等は教會堂に這入る資格を有つて居るか？ 汝等は隣人と睦しく暮して居るか？ 汝等は主耶蘇が何人でも隣人と睦じくない者は祭壇に近付いてはならぬと仰せられた御言葉の眞意を覺つて居るか？ 若し汝等が愛又は正義に對して罪を犯して、その賠償をせず、又は如何しても賠償が出来ぬ場合に悔い改めなかつたならば、汝等は教會堂に這入つてはならぬといふ事を知つて居るか？ 當に汝等が隣人に對して惡意を有つて居る時許ではなく、手段の如何を問はず、隣人との取引に彼に損害を與へ、或は彼の名譽を毀損した時にも、彼を誘つた時にも、彼の身體や魂に對して害心を抱いて居る時にも、汝等は教會堂に這入つてはならぬといふ事を知つて居るか？ 若し汝等が耶蘇の御言葉に従つて先づ汝等の心を清めなければ、凡ての禮奠も、凡ての祝禱も、凡ての珠數も、凡ての祈禱文も、何の役にも立たぬ事を知つて居るか？

汝等は憎惡の念又は何等かの不淨に汚されて居るか？ さらば去れよ！ 耶蘇は汝等が教會堂に入るを好み給はぬぞ！

「いやその説教は何でもごわせんが、あの顔でごわす！ 聲でごわす！ 眼でごわす！」

とトルクワトーは自分で現場を見て來た様に、其時群集が地に跪いて泣いた事、今まで敵同志であつた女が互に抱き合つた事などを物語つた。イエネの男子は皆ネツツノやアンチオで牧羊をやつて居るので、六月の末にならねば歸村しないから、その日その説教を聞いたのは女や老爺許であつた。聖者は彼等がそれ程までに罪を悔いて居るのを見て「教會堂に入つて跪けよ。神は汝等の心の中に居給ふ。黙して彼を拜せよ。」と云つた。其時群集は教會堂に這入つた。其人數の多かつた事！ 彼等は一人も残らず跪いた。そして——トルクワトーの話に依ると——十五分程の間は、大な教會堂の中は蠅の羽音が聞える位靜であつた。癒て聖者は聲張り上げて「主の祈禱」を唱へ始めた。群集は大聲でそれに和した。そして彼は一節毎に聲を切つて、終まで唱へた。教區の教師はその事の顛末を聞いて思はず客に接吻した。そして接吻した時に、彼の熱病は癒つて仕舞つた！ すると人々は聖者に祝して貰つて癒される爲めに、病人を連れて教師館へ來た。聖者はその求に應じなかつたが、密々でも彼の衣に

觸る事が出来た者は皆癒つた。又多くの人は彼の助言を求めに彼を訪れた。その他にまた騾馬に就いての大奇蹟があつた。或る騾馬が険しい山道をおりて行く時に、急に暴れ出して、乗手を岩の上に振り落さうとした。丁度その時水を持つてインフェルニロの洞から登つて来た聖者が通り掛つて、それを見て手を伸した。すると騾馬は立に穩になつた！

マリヤは森番に聞いた通りに以上の話をした。

「その話は何處も皆、王者の血統に生れた貴公子だなどいふ筆法と同じ位に本當なんてせうか知ら！」

とノエミが云つた。

「明日になつたら判るでせうよ。」

とチヨヴァニは椅子を離れながら答へた。

(其二)

彼等は六時頃に出發した。空は曇つて居た。そして涼しい風が、森や丘の馨しい香を漂はしながら、小鳥の樂し氣な聲に生氣を得て、人の靈魂をも清めん許にそよそよと吹いて居た。ネロ帝の浴場の處で、彼等はアニオ川の右岸を紆り昇つて、緑滴る狭い谿間に這入る騾馬徑

に進み入つた。左の方に高く、サンタ・スコラステイカとサクロ・スベコと聖ローレンツォ寺院とが、鐵色の巖石の下に、白く見えた。三人はスカリラ橋——橋といつても唯だ小な激流の淋しい左岸に投げ渡してある一本の丸木に過ぎぬ——を右に見て進んだ。彼等は途すがら頻に此奇妙な聖者の事を話した。チヨヴァニは何故ドン・クレメンテが今までにあの作男の性格に就いて一言も自分に語らなかつたのだらうと怪しんだ。彼はこの戸外の小説教を稱讚した。彼は嘗てそれと同趣旨の事をドン・クレメンテに話して、その基督の御言葉が正しく守られて居す又教へられて居ぬ事、最も立派な信者でさへその御言葉を唯だ聖奠執行の場合にのみ適用して居るといふ事を指摘した事があつた。若し信者が潔からぬ心を有つて會堂へ這入つてはならぬといふ事を覺つたならば、基督教國民は實に世界の模範となるであらう。其時には、道徳は何處でも餘り異つた事はなく、宗教上の信仰とは何等の關係もないものだなど、敢て斷言する者は誰も無いであらう。

彼は又禮拜式にその様に「主の祈禱」を唱へた事を甚く稱讚したけれども、その奇蹟は非難した。そして一般人民の間に行はるゝ迷信が自分の虚榮心を満足させる時に、斷乎としてそれを棄てないこの男の心の中に弱い所のありはせぬかを疑つた。

この男の性格に就いてノエミは如何いふ事を知つて居るか？ ジアンの打明話から推してこの男を如何思ふか？ ノエミは問はれて當惑した。この男に就いてジアンが話した事は何れも皆、マイロニがジアンに對して強顏い仕打をしたといふ事と、彼が決して眞實にジアンを愛しては居なかつたといふ事とを彼女に信せしめた。又それと同時に、彼女の心には追ひ遣つても追ひ遣つても引き返して還つて来る一つの智的好奇心——若し彼女がジアンと代つたならば、この男はジアンよりも彼女の方を深く愛したであらうか知り度いといふ好奇心を、呼び覺した。彼女は、マイロニの性格は彼女には謎の様に思はれると答へた。では、彼の理性は？ 彼の教育は？ ノエミは彼の理性に就いても、教育に就いても、何事も知らぬが、ジアン・デサレ程の女があつたやうに魂を打ち込んで愛したことを見れば、屹度賢い、教育のある人に相違あるまい、と云つた。それでは、彼の以前の宗教上の信仰は？ この最後の質問に對するノエミの答は、ジアンに聞いた二三の事實から推しても、又マイロニの家族の中に代々傳はつて居る宗教上の信仰が、彼とジアンとの戀の一危機に際して、彼をして斯くの如くにその身を處決せしめたことから察しても、彼は舊派のカトリック教徒であつたらうと思はれる。決して兄——の様な——ノエミは顔を赤くして微笑みながら、その儘話を止めて仕舞つた。チヨ

ヴァニも亦微笑を洩したが、マリアは少しむつとした様子であつた。で、その問題はその後で中止せられた。

それから暫時の間三人は、折々、麥を積んだ驛馬に跨つてスピアコの粉挽場へ下りて行く途中の山人に遇つて、挨拶の言葉を交す他は、無言で歩み續けた。

スピアコ領とイエネ領との境界にある聖チヨヴァニの原で彼等は休息した。大分前を通り過ぎた、鐵色の巖石の下に眞白く見える聖ローレンツオ寺院は、高から彼等を俯瞰して居た。雲間を漏る日光が丘陵を照らしたので、三人はイエネの乾燥した山道の暑氣を想ひ起して、又歩き出した時に、行手からイエネの醫師が来るのに遇つた。彼は少し以前にスピアコの同業者の家でマリアに會つた事があるから、彼女を見て會釋して、微笑みながら驛馬の手綱を引き締めた。

「イエネへお出で、すな？ 聖者にお會ひなさるお積ですか？ 今日は大勢の人ですよ。」

大勢の人！ それではマイロニと靜に語る事が出来まいと思つて、ノエミは失望した。セルヴァ夫婦はその事に就いて委しく聞き度いと思つた。何故そんなに大勢の人が？ 何故つて、フネレッツノでも聖者に來て欲しいと云つて居るし、ヴァレビエトラでも來て貰ひ度いと云

つて居るし、トレヴ非でも来て欲しいと云つて居るからだ。けれどもイエネの女等は如何しても彼を手離さない積で居る。

「そんなにして私に商賣休をさせて遣らうつていふんですよ！ 藥屋もお蔭で商賣休が出来ます。此頃はその男が醫者で、その男の着物が藥屋の代理をやります！」

と醫師は云ひ足した。彼はまた、今日はフ井レツチノからも、ヴァレピエトラからも、トレヴ非からも、イエネへ人が来て、この四箇所へ甘く聖者を分ける方法に就いて、イエネの人々と協議する筈であるが「殿合をおつ始めるかも知れませんが！」 兎に角イエネには既に兵隊が駐屯して居ると、彼等に話した。

「貴方もその方の事を『聖者』と仰有るので御座いますか！」

とマリアが問うた。醫師は笑ひながら、

「え、左様ですよ！ 皆が左様いひます。尤も中には早『惡魔』つて云ふ者もありますが。」

これは驚いた！ これは今始めて聞いた！ 誰が彼の事を「惡魔」と云ふのか？ 何故？

「何故ですつて？」

と醫師は、事情をすつかり知つて居るが、それを皆話す積ぢやないといつた様な、鹿爪ら

しい顔付をした。

「斯うなんです。羅馬から坊さんが二人イエネへ遊びに来て居るんです。坊さんが二人、ね、坊さんが二人！ 二人とも中々如才の無い人物でね！ その坊さん達は聖者を如何思つてるか、私には何とも云ひませんが、兎に角、教區の教師の熱心は餘程冷えた様です。他の者も皆左様です。つまりその坊さん達は運動屋なんです。人の眼には付きませんが、始終仕事をやつてるんです。あれは蟲ですわ——これはあの人達を悪く云はうと思つて云つてる積ぢやないんですよ。實際今度の遣口なんぞは、褒めて遣つても可い位です。本當にあの人達は中々伶俐な蟲です。譬へば或る木を枯らさうと思ひましても、その果だとか、花だとか、葉だとかには觸りません。また根にだつて觸りません。何故かと云ひますと、根の所に居れば、毒な風が當るかも知れないでせう。また鋤で掘り返されて自分等の在所を見付られるかも知れないでせう。先生等には、風に當つたり、見付かつたりするのは禁物なんです。ですから、髓の中へ喰ひ入るんです。所でその二人は早髓の中まで喰ひ込んで居ます。もう二月先か、或はもう二月先か、確に判りませんが、その木は枯れる運命を有つて居ます。如何しても枯れなきやなりません！」

「ですが、貴方御自身では如何お思ひなさいますか？その方は本當に自分で聖者だと云つて居なさるんで御座いますか？その方は、迷信な人達が自分の事でそんなに喧嘩するのを喜んで居なさるんで御座いますか？病人が癒つたといふのは本當で御座いますか？」

とマリアが問うた。

醫師はマリアが話して居る間笑ひ續けて居た。

「實に面白い。これは傳染性神秘精神病なんですよ！併し是で失禮します、八時にスピアコへ参らねばなりませんから。今日はお樂でせう。まあ折角面白い目をなさいませ。」

彼はまごまごして居れば自分が斷言した事の證據を擧げねばならぬかも知れぬと思つたら、この皮肉な捨臺詞を後に殘して、騾馬の頸の上で手綱を捌いて、立ち去つた。

一行の中で、ジアンジャンの戀人に會ふ事を豫想して最も胸を騒がせて居たノエミは、疲勞を覺え始めた。彼等はイエネの阪の麓に在つて、インフェルニロの洞から川まで流れ下る幾筋かの浅い小川に横斷せられて居た小石原で、二度目の休憩をした。誰か背後から彼等に近付く者があつた。これはこれは！好い所で！ドン・クレメンテ！僧の美しい顔にも嬉し相な色が浮んだ。彼はチヨヴァニを眞の基督者として敬愛して居た。そして折々、彼がチヨヴァニを

訪れる事を禁じた彼の目上の院長を非難し度いといふ誘惑と戦ひ、彼の魂の中に在す、院長よりも偉い、法王よりも偉い「或者」に訴へ度いといふ誘惑と闘はねばならなかつた。その「或者」は今「この邂逅は我が賜なるぞ」と彼に云ひ給うたから、彼は喜んで友の一行に加はつた。マリアは彼をノエミに紹介した。彼は曩に彼がベネテットの誘惑者と思ひ違つた女を見て、再び顔を赤めた。

「貴女のお友達は？」

と彼は、彼女が居ると答へられはしまいかと胸を躍らせながら、問うた。そして、彼女が居ないと聞いた時に、安心の色が彼の顔に閃いた。ノエミはそれを見て微笑むだ。彼はその微笑に氣が付いて、大層極が悪く思つた。他の二人も亦笑を洩したが、皆黙つて居た。チヨヴァニが始めに沈黙を破つた。屹度ドン・クレメンテも、彼等と同様に、イエネへ行く途中だらう？多分彼も同じ目的で彼處へ行くのだらう？同じ人に、あの作男に會ひに、え？あの名高い晩の作男に？左様だらう！ドン・クレメンテ、ドン・クレメンテ！——左様ドン・クレメンテも亦ベネテットに會ひにイエネへ行く途中である。それから、あの晩にセルヴァの家へ彼を連れて行つた事であるが、あれは何も騙す積で爲たのぢやなく、唯だ、二人の靈魂

を最も自然な方法に由つて、無理をせず、推薦もせず、豫め譯をも話さずに、會はさうと思つて爲たのであつた。

彼等はベネデットの話をしながら、連れ立つて阪を登つて行つた。

ノエミは疲勞を忘れて、僧の言葉に聞き惚れた。けれども僧は、ノエミが熱心に聞いて居ると知つたから、用心して、僅しか語らなかつたので、ノエミは甚だじれつたく思つて、纏てまた草臥れて來た。彼女はマリアの腕を執つて、ドン・クレメンテと姉婿とを先へ歩かせた。其時ドン・クレメンテはジョヴァニに、自分がイエネで果さねばならぬ用向は辛い性質のものであると打ち明けた。誰かは知らぬがイエネに居る者が羅馬へ書面を送つて、敵意を含んだ言葉を以てベネデットを評し、彼は異端めいた事を説教し、奇蹟を行ふと自稱し、また身に纏ふ權利の無い法衣を着て居るなど、當路の人々に訴へたものらしい。彼が法衣を着て居るといふ事はこの讒訴の價値を大に高めた譯である。それで、院長がドン・クレメンテにイエネへ行つてベネデットの手からあの法衣を取り返して來いと命じた事をみれば、屹度羅馬から内訓があつたに違ひない。ドン・クレメンテは老院長を宥めてみたが、その甲斐が無かつた。院長は戯言を以てその事柄を葬つて仕舞つた。福音書を讀んでみい――

馬可傳の中の基督の苦難の所を。他の弟子が皆基督を捨て、逃げて仕舞つた後に、まだ主に従うて行く者は、如何でも着物を捨てにやならん。それが聖者の標ちやて。斯ういふ次第で、是非誰かこの使命を帯びてイエネへ行かねばならないのであるから、ドン・クレメンテは自進んでその事に當つたのである。その上に、彼はイエネの教區の教師から妙な手紙を受け取つた。この教師は好人物であるが氣が小さい。彼はその手紙の中に、自分の考へる所ではベネデットは實に信仰の篤い基督者であるが、彼は人々に餘り宗教上の話を爲過ぎる。又彼の話は時として靜觀主義や唯理主義の傾向を有つ事がある。その上彼がその餘り正統的でない説を播ろめる爲めに悪魔の力を借るなど、彼の罪を鳴らす者がある。尤もこの様な非難は據のあるものでないといふ事は確であるが、兎に角、自分としては、ベネデットを此處に置かない方が當を得た處置だと思ふ、と書いて寄越した。この様な譯であるから、ベネデットに取つては、何處か彼の名が知られて居ない處へ退隱して靜に日を送るのが一番得策であらう。

此時二人の會話はマリアの呼ぶ聲に妨げられた。ノエミが焦さん許に照る太陽の熱に堪へ切れず、動悸が餘り高くなつたから、又休まねばならなかつたので、姉妹はとある岩の影に

腰を下して居た。

ドン・クレメンテは、後刻またイエネで會はうと云つて、三人に訣別を告げて先へ行つた。マリアは妹の身體を大層心配して、彼女を歩かせた事を心竊に悔いた。彼女とチヨヴァニとは黙つてノエミを見守りながら立つて居た。ノエミは随分着い顔をして居たが、二人を見上げて、元氣を出して微笑んだ。美しい所の無い、荒野の様な山々と、太陽に焼かる、岩石とを、沈黙は恐しい重さを以て壓迫した。纏て此方へ登つて来る幾人かの旅人の聲を聞いた時に、三人とも嬉しく思つた。その一行は六七人の人と二頭の騾馬とであつた。彼等は祈禱文を唱へながら、骨を折つて阪を登つて来た。行列が近付いた時に、騾馬の上に一人の男と一人の娘とが乗つて居るのが見えた。二人とも瘦せ衰へて、殆ど死人の様な顔をして居た。娘の方は眼を大きく開けてセルヴァ等を見たが、男の方は眼を熱と閉ぢて居た。他の人々は祈禱を續けながら、祈禱に酔つた様な顔付で彼等を見た。單調な讃詠の聲と騾馬の蹄の音とは漸々幽になつて、遂に上の山蔭に消え失せた。この陰氣な行列が通つてから間も無く、羅馬から来た青年の一行が、昔の羅馬人は聖者なんぞよりも寧ろサビニ美人の方を捜して居たものだなと語り合つては、面白さうに笑ひ興ひながら、登つて行つた。チヨヴァニ等を見付けた

時に、彼等は話を止めたが、その前を通り過ぎてから、また洒落を云つたり、笑つたり始めた。そしてチヨヴァニが二人の女と共に居るのを、聖者が二人の誘惑女の間に居るのかも知れぬなど、戯言を云つた。

西に向つて走る一群の雲の魁をして居た銀色の縁のある大な雲が太陽を隠した。ノエミは餘程氣分が癒つたので、この影のある中に先へ行かうではないかと云つた。森番トルクワト一の話に、教區の教師が夢の中に見たといふあの十字架の數歩下で、彼等は黒い着物を着た一人の町人風の男が騾馬に乗つて下りて来るのに遇つた。

「失禮で御座りますが、貴女方お二人の中孰かチヴ非テラ公爵夫人様では御座りませんでせうか？」

どその男は騾馬を止めながら、婦人等に尋ねた。

答を聞いた時に、彼は言譯をして、自分は上院議員をして居る或る友人から、その公爵夫人を饗應する事を頼まれた。自分は彼女を知らぬが、彼女は聖者を見にイエネへ来る筈だと云つた。

「いや、多分貴方がたその御用でお越しなされたので御座りませう。」と微笑みながら

「此頃は誰も彼も皆その用事で参ります。昔は皆が法王を見に来たものです。本當ですよ。昔はイエネにも一人法王が居りました。アレクサンドル第四世と申しましてな。夏の暑氣を避けんが爲めに」といふ碑銘があります。所が此頃は皆聖者を見に参ります。聖者は法王よりも偉い筈ですけども、どうも法王より偉くない様です。貴方がたはあの二人の病人を御覽なさりましたか？ 羅馬から来た學生を御覽なさりましたか？ 未だ未だもつと吃驚なさる事がありますよ？ 吃驚なさるやうな事が？ ですが、詰る所、あの聖者は法王よりも偉くない様ですな。では御機嫌宜うお出でなさいませ！」

十字架を通り過ぎてから、三人は青々とした山の背の間を通つて、廣々とした大空の前に見て登つて行つた。その山の背は下の方に傾斜して、淋しいイエネの窪を形づくつて居る。窪の向側にはみすばらしい家の群が並んで、その中に會堂の鐘樓が大將顔をして立つて居る。チヨヴァニは前にも一度イエネへ来た事があつたが、今聖者がその中に住み、奇蹟がその中で行はれても、村の有様は少しも以前と變つて居る様に見えなかつた。今日始めて此處へ来た彼の妻には、この村は、海拔が高いといふ觀念——遠景の工合で左様思ふのでは無い——と、村の背後の奥深い空と、その寂寞と、その沈黙とに由つて、人の心に宗教的冥想を鼓吹

しさうな處の様に感ぜられた。ノエミは深い憐憫の情を以て、遠くに居るジヤンの事を思つて居た。

(其三)

イエネの宿屋の亭主は眼鏡を掛けた、立派な、重々しい慇懃な男であつた。彼は米國へ行つて来た事があるから、世の中を知つて居ると云つてもよいが、人心を腐敗らせる世間の悪感化を免れたらしかつた。客に向つては、彼はベネテットの事を、大體に於て善くは云つたが、その言葉の中には何處となく外交家的の用心が仄見えた。彼はベネテットを「聖者」といはずに「兄弟ベネテット」と云つた。セルヴァ夫婦は彼から、ベネテットが彼の所有の小屋を借りて、その家賃の代に小な畑を耕して居る事を聞いた。ベネテットに會ひ度い人は十一時まで待たねばならぬ。彼は今草刈をして居る。彼の一日の仕事は次の様に定められてある。夜明に教區の教師が勤行をするのを聴きに行つて、それから十一時まで働く。食物はパンと野菜と果物との他は口に入れぬ。飲料は水許り。午後には寡婦や孤兒の畑で働く。夕方には住居の入口の前に腰を掛けて、宗教上の話をする。

十時半にセルヴァ夫婦とノエミとは宿屋の主婦——上品で、形が大きくて、甚だ質素ではあ

るが小瀧洒した姿をして、しとやかな中に陽氣な所のある女——に伴はれて、イエネの會堂サンタンドレア教會を見に出掛けた。宿屋の在る邊の、迷宮の様に錯綜れた狭い小路を出て、廣い四辻へ來ると、大勢の女が集つて居るのが目に付いた。主婦は、あれは皆他所から來た人で、何處の者か、胸當や、綾織木綿の袴や、靴などを見れば判る、あれはトレヴ井の者で、あれはフ井レツチノの者で、それからあれはヴァレピエトラの者だと云つた。それから彼女は會堂の右手のパン屋の店へ這入つた。其處にはイエネの女が數人、銘々家から圓パンを持つて來て、焼いて貰つて居た。

「皆聖者に會ひに他所から來た人で御座ります。」

と彼女はマリアに云つた。彼女は亭主の様に「兄弟ベネテット」と云はずに「聖者」と云つた。

「でも、あの方の前では左様申しません」と顔を赤くしながら「左様申しますと腹をお立てなさりますでな。——否、聖者で御座りますで、本當に腹をお立てなさりはしません、何卒、頼みちやで、聖者だなんて云はずに置いて呉れとお云ひなさります。」

「何時かの日曜日、私共を皆、鼠の様に壓し潰すので御座りませう」と宿屋の主婦が云

つた、大な、壊れかゝつて居る會堂の中には、先刻の病人二人と、その一行のみが居た。その男と娘とは、會堂の丁度中央の床の上に枕を並べて臥て居た。彼等を連れて來た人々は跪いて詩篇を歌つて居た。そして、人が這入つて來ても見向きもせず、禮拜を續けて居た。

「多分聖者に祝福して貰ひに病人を連れて來たので御座りませう。あの方はそんな事は厭ぢやで、お困りなさります。この人達は密とあの方の衣に觸らうとするかも知れませんが、此頃はそれも中々手輕には出來ません。」

と主婦は囁いた。

病人の一行は歌を止めた。そして一人の女が主婦に近付いて、もう十一時が打つたかと問うた。マリアは、十一時にはもう十五分しかないと答へて、それから二人の病人の事を尋ねた。男の方は二年前から熱病に罹つて居るので、女の方は、その妹であるが、心臓が悪い。彼等はイエネの聖者に癒して貰ふ爲めに、アルチナツツオの低地から數時間の旅をして來たのである。同じアルチナツツオの女で心臓病に罹つて居た者が、數日前に聖者の衣に觸つただけで癒つたとか。マリアとノエミは病人に言葉を掛けた。娘の方は屹度癒るものと信じて

居たが、熱で震うて居た男の方は、唯だ家族の者を満足させる爲めに、癒るか如何か験す爲めに、来たものらしかった。彼は来る途中で大變苦しんだ相である。

「こんなに彼處此處と行く中には私はあの世へ行つて仕舞ふ。左様したら私は癒るだらう。」

と彼は云つた。

多分彼の母親であらう、一人の女がこれを聞いて、わつと泣き出した。そして彼に、祈れ、耶穌様とマリア様とに身を任せよと願うた。マリア姉妹はチヨヴァニに呼ばれてその方へ行つた。今朝坂でセルヴァ等の前を通り過ぎた學生と、四辻に集つて居た女等とが喧嘩を始めたからであつた。喧嘩の起因は多分、學生が女等の聖者に對する熱心を見て、四邊構はず戯言を云つたので、女等が腹を立てたからであらう。イエネの女等はパン屋の店から飛び出して来た。それと反對の方向に兵士の帽子の羽毛が二つ現れた。ノエミとマリアとは女等の間に混つて彼等を宥め様とした。チヨヴァニは學生を諭してみたが、彼等は肯かずに、威張散らしては哄と笑つた。或はもつと怪しからぬ事をするかも知れなかつた。會堂の内に讃詠の聲が聞えた。始の中は低かつたが、聽て入口の戸が颯と開いた時に高くなつた。

「聖きマリアよ、我等の爲めに祈り給へ。」

二人の病人が現れた。娘は兩方から人に支へられて歩いて居た。死體の様にぐたりとなつて居た男は、肩と足とを持つて昇かれて来た。昇いて居た女等も、嚴な顔付で歌つて居た。

「處女の中に最も優れたる聖き處女よ、我等の爲めに祈り給へ。」

四辻に居つた女等は皆地に跪いた。呆氣に取られた兵士はその真中に立つて居た。學生等も黙つて居た。ヴァル・タニエル驛馬徑から四辻へ這入らうとした紳士と婦人の一行は驛馬を止めた。始にマリア、次いでノエミは、身を震はす程彼等の心を動かした或る感情に引き付けられて、不意に地に跪いた。チヨヴァニは脚躡つた。斯ういふ事は彼の信仰ではなかつた。病に苦しんで居る人を、偶像や聖徒の遺物や人間の力に由つて奇蹟的に癒されやうと思つて、驛馬に乗せて遠い處へ旅行させるなどいふ事は、人に理性を與へ給うた造物主に對しての罪であると思はれた。併し之も矢張信仰である。之は、弱い無智の粗皮に包まれて居るが、傲慢な心を有つ者の感ずる事の出来ない、生命なる隠れたる眞理を認める本能である。不純な鑽石の塊の中に包まれた不可思議なラヂウムである。之は信仰である。罪の無い謬見である。愛である。苦である。宇宙の至高の秘密の合一に屬する眼に見える或物

である。大地も、教會堂の大きな悲し氣な顔も、四辻の周圍に在る小さな家の小さな謙遜な顔も、之を覺り、之を崇める様であつた。チヨヴァニの心眼に、斯くの如くに信じて居た、既に世を去つた女の懐しい姿が映つた。冷な波が彼の血液を傳つて、彼の膝は自ら曲つた。病人を連れた小な一隊は、前進しながら、空を仰いで歌つた。

「基督の御母よ。」

跪いて居た女等は、頭を垂れた儘、之に應へた。

「我等の爲めに祈り給へ。」

それから彼等は立ち上つて、行列に隨つた。

「そんな事爲ねえが好い！お困りなさるで！」

と三四人のイエネの女が大聲で云つた。その中の一人はマリアに、聖者は病人を自分の處へ連れて來られるのを好まないのだ、と説明した。誰も彼等の言葉に取り合はなかつたので、彼等も亦、何事が起るか見度いと思つて、行列に加はつた。

始は隨いて行くのを好まなかつたチヨヴァニとマリアも、熱心にすん／＼先へ行くノエミの後を追つて歩るき出した。その背後から、俺等はあの仲間ぢやない、唯だ見物に行くだけ

だといふ事が判る位の距離を隔て、學生等が隨いて行つた。最後に、皆からすつと離れて兵士が殿軍をして行つた。この紆々とした、蛇の様な行列は、教會堂の向側に矢鱈に押し並べた荒屋の間の隙間へする／＼と這入つて、見えなくなつた。

行列は見えなくなつてから、名前だけは頗る立派な暗い小路をのたくり廻つて、村の向の端へ出た。此處は村の中でも最もみすばらしい、最も醜い部分である。勾配の急な、岩の多い山腹の、出張つた所や、岩の平たい所へ、無造作に附着けた小屋が、階段の様に、石塊の間を下へ降りて行く。小さな黒い窓は、稠體の空虚になつた眼窩の様に、物靜な、深い、狭い路を熟と睨め下して居る。入口は危険な階子を坂の上へ吐き出して居る。その階子の横木は次第に減つて、大概のは割れたのが三四個だけになつて居る。家によつては全く階子の失くなつて居るものもある。斯ういふ家の入口まで漸うの事で攀ち登つて、内部へ這入つてみると其處は光線も空氣も這入らない洞穴である。

「悪い路ぢや、歩き悪い事ぢや！」

と一人のにこ／＼した婆さんが自分の家の入口に立つて、マリア等の通るのを見て云つた。

この様な這入り悪い洞穴の一つがベネデット一の住居であつた。坂を降りる時に二筋に分れた人の流は、その小屋の開けてあつた入口の下で出會つた。二三人の女が近所のパン屋の店から出て来て、ベネデット一は留守だと云つた。人浪は病人の周圍に騒立つた。呻き聲が聞えた。心配さうに容體を問ふものがあつた。噂は坂を上へ上へと二筋の人の流を傳つて、行列の一番端にまで達した。端ではその呻き聲の原因が解らなかつたから、皆は何事が起つたのか早く見度いと思つて、下へ下へと押して行つた。病人は暑い日向を連れて歩かれたので、容體が益々悪くなつたのかも知れぬ。學生が三人、女の間へ入り込んで、吐き罵詈雑言を以て迎へられた。

「病人を内へ入れなせえよ。」

と一人の村の女が云つた。

左様だ！左様だ！内へ！内へ！聖者の家の内へ！

既に群集は聖者の住まふ家の壁や、その足に踏まれる床や、其聖い徳を飽くまで吸ひ込んだ家の内の物が、奇蹟を行ふ力を有つて居ると思つて居た。聖者の寢臺の上へ！聖者の寢臺の上へ！誰か、入口へ昇る階子の代をして居る數個の磨けた板石の上へ板を二三枚並べる

と、騒立つ群集は二人の病人を、家の中へ半ば押し上げ、半ば擔ぎ上げた。病人は聖者の粗末な寢臺の上へ横様に並んで臥た。群集は洞穴の中へ一杯に這入つた。そして皆跪いて祈つた。

此處は本當に洞穴である。その一方は全面、斜に削られた、黄味掛つた岩の壁で、床は凸凹した地その儘である。寢臺の側には、掌の幅を二つ合はせた程の高さに、爐が築かれてある。窓は一つも無いが、一筋の日光が、煙突を通つて、天から下つた烟の様に、灰の跡形も見えぬ爐の石の上に映し込んで居る。寢臺の上に茶褐色の毛布が擴げてある。入口に近い岩の表面に十字架の形が粗と彫り付けてある。片隅に、水が一杯這入つた大な手桶と、緑色の洗面盥と、饅と、コップとが見える——贅澤品は之だけである。書物が數冊、ぐら／＼する籐底の椅子の上に重ねてある。また別の椅子には蠶豆とパンの這入つた皿が乗つて居る。一體の様子は甚しい貧乏を表して居るが、室の内は清潔で、片付いて居る。

熱病の男は冷氣と濕氣と暗さを感じて吐いた。そして、氣分が前よりも悪くなつた。皆は自分を此處へ死に連れて來たのだらう、と云つた。人々は、心を落着けて、落膽するな、と彼に求めた。之に反して、心臟が悪いその妹は、殆ど寢臺へ臥かせられるや否や樂に

なつた様に感じ始めた。彼女は直様その事を人々に知らせて、病氣は今癒りつゝあると云つた。人々は、彼女を轟と取圍んで、皆一時に笑つたり、泣いたり、神を讚美したりした。彼等はその娘自身も聖くなつたと思つたのか、彼女の着物に接吻した。この出来事は洞穴の外に居た人々に大聲で傳へられた。歡呼の聲が之に答へた。そして更に多くの者が顔と眼とに熱心の色を浮べて、洞穴の中へ詰め掛けた。所が、丁度その時、聖者を捜しに降りて行つた者が、遠くから「聖者が來なざるぞ！聖者が來なざるぞ！」と叫んだ。すると、洞穴は人の流を阪の上へ注ぎ出した。騒がしい人聲と覺音とが下の方へ流れて行つた。そしてものゝ一秒時も經たぬ中に、小屋の入口の下に立つて居た者はセルヴァ夫婦と三四人の學生のみとなつた。イエネの女等は多くはパン屋の店へ這入つた。残つて居た者は入口から外を眺めて居た。マリアは入口に居た者と少し言葉を交した。あれは皆他所から來た人々か、阪を降りて行つた者は？左様、皆ではないが、大抵左様だ。大概ヴァレビエトラの者だ。ヴァレビエトラから人間が來るよりも、水が來る方がよい。だがあの人達は何の用事で來たのか？聖者をイエネから持つて行つて仕舞ふ積か？左様だ、彼等は左様云つた。彼等は偉い事をするに云つて居た。それで、貴女等イエネの人達は如何する積だ？妾等イエネの者は、聖者が行き

度がつて居ぬといふことを知つて居る。その上——その女の友達の家の中から大なる聲で何か云つたので、彼女はその方を見た。内では喧嘩が始まつて居た。ヂョヴァニとマリアと學生とは奇蹟的に癒された娘を見に小屋の中へ這入つた。ノエミは外に居た。彼女は早くベネデットーを見度いと、氣を苛立て、居た。彼女は何故とも知らず身體が震うた。彼女は心中で自分を馬鹿だと云つた。併し彼女は其處を動かかなかつた。阪の下の遠い小な野を横切つて、ベネディクト派の法衣を纏つた姿が二つ歩いて居た。後の方の者の頭の上で、大鎌の刃が折々煌いた。騒がしい人聲と、阪を降りる覺音とが聞えたので、ベネデットーは微笑みながら道連の方を向いた。

「御師匠様！」

イエネに着くと直に、ドン・クレメンテは、その小な野で草を刈つて居たベネデットーに面會した。そして云ひ悪い使の趣を傳へてから、二人で永い間相談した後、彼はベネデットーを聖者だと云ふ人々に向つて、ベネデットーが話して欲しいと云つた或る事を、語らうと約束した。彼も亦、今此方へ降りて來る群集の騷擾と、彼等が口々に「聖者！聖者！」と叫ぶ聲を聞いた。そしてベネデットーが笑を含んで彼に「御師匠様！」と云つた時に、彼の顔

色は蒼白くなつたけれども。彼は承諾の意を身振に表して、前へ進んだ。ベネテットは大鎌を地に下して、徑から二三歩横へ行つた。彼はとある岩と花盛りの大な林檎の木との蔭に坐つたので、彼の姿は此方に近づく者の眼に見えなかつた。ドン、クレメンテは唯一人群集に向つて立つた。

彼を見て群集は足を止めた。「違ふ違ふ！」と二三人の聲が云つた。「あの背後だ！」と他の聲が答へた。殿軍の連中は「行け行け！」と叫んだ。縦隊は前進した。

ドン、クレメンテは片手を舉げて云つた。

「皆さん！」

僅二人許の人にでも顔を赤めずには物を云ふ事の出来ぬこの人は、今着い顔をして居た。彼の低い優しい聲は殆ど聞えぬ位であつたが、その身振は人々に見えた。美しい穏やかな顔と丈の高い姿とは、見る者に尊敬の念を起させた。

「貴方等はベネテットを捜して居るのでせう。貴方等は彼を聖者だと云ふ。これは彼が大層悲しむ所であります。彼はこのイエネへ来たその日から、彼が大なる罪人であつたが神の御恵によつて悔い改めるに至つたのだと、繰り返し繰り返し話しました。今彼は私にその事

が事實である事を貴方等に向つて證明して呉れよと云ひます。私は茲にそれを證明します。それは眞實の事でありませう。彼は大なる罪人でありました。明日また墮落するかも知れませう。若し彼が唯だの一瞬時でも、貴方等の言葉を信じて、自分は聖者であるなど、思つたらば、神は彼を去り給ふでせう。貴方等は今後また彼を聖者といつてはなりません。殊に奇蹟を行へよと求めてはなりません。」

「先生！」

と丈の高い、瘦せた、齒の無い、横顔の鷲をつくりの老爺が、大手を擴らげて進み出ながら、嚴な聲で彼の言葉を遮つた。

「先生、私等は奇蹟をやつて呉れるとは云はねえんですが。奇蹟はもう疾に濟んだのです。あの娘はその人の家に身體が觸るなり癒りやした。如何してもその人は聖者に違えねえんです。このイエネの村に左様云はねえ者があつても、そんな奴等は地獄のどん底で熱い火の責苦に遇ふ價値のある奴等ですが。先生、私等は貴方を敬ひやすが、これだけは如何しても云はにやあなりやせん。」

「もう一人癒して貰ふ者がある！もう一人癒して貰ふ者が！聖者を出せ！」

と十人、二十人程の聲が叫んだ。

「聖者を出せ！聖者に話をさせろ！」

と群集の殿軍をして居た學生等の中で怒鳴る聲が聞えた。

「これやあ何たる事ぢや？」

と老爺は、今まで人民の輿望を身に集めて居た演説家が最早人民が自分の言葉に耳を傾けぬ事を見て發する様な憤を以て、人々の方を振り向きさま叫んだ。

「これやあ何たる事ぢや？」

大勢の罵る聲が彼の言葉を壓倒して仕舞つた。學生等は益々大聲で怒鳴り續けた。

「聖者！聖者に話をさせろ！坊主を除けろ！其奴を除けろ！」

「自分等の方から退け！さつさと退け！」

と女等は彼等の方を向いて、恐しい顔をして叫んだ。

上の方、山腹に乗つかつて居る荒屋の間に、兵士の帽子の羽毛が現はれた。此時ベネデッ

トは立ち上つて、人々の前に出た。

彼の姿が見える直、人々は嬉し相に大聲を上げて、彼を迎へた。セルヴァ夫婦は洞穴の

入口に出てその方を見下した。ノエミは足早に阪を駆け降りた。人々は矢庭にベネデットーを取り巻いて、彼の衣に接吻して、彼の身に神の恵の豊ならん事を祈つた。地に跪いて泣いて居る者も澤山あつた。學生等の背後から唯一人馳り降りたノエミは、人を押し分けて、豫てから見度い見たいと思つて居た男を、到頭見た！

曾てジアンはノエミにマイロニの寫眞を數枚見せて、其中どれも全く氣に入つたのは無いと云つた事があつた。其時ノエミはピエロ・マイロニの愛好する顔の中に、悲の影が宿つて居る事に氣が付いたが、今面前に見るベネデットーの顔は、世の常ならぬ活氣を帯びて輝いて居た。彼は一人の女が彼を見て「耶蘇様みた様にお美しい！」と咥くのを開いたから、二日前に髪と鬚とを剃つて仕舞つた。彼を支配する強い魂の調子は益々明に顔付に現れて居た。鼻は顔の肉が前よりも落ちたので愈々高く、眼の下には大な薄黒い輪が附いて居た。眼は得も云はれぬ魔力を有つて居た。その中には今尙悲の色を帯びて居たが、その悲は、精力と、平和と、神秘的敬神の念に充ちた、美しい悲であつた。此處、林檎の花の小さな白雪の下、地に平伏した群集の真中に、日光と動搖する影とに圍繞れて立つた姿は、昔の畫聖等を訪れた幻像とも見えた。ノエミは石に成つたやうに身動もせず突立つた。彼女の咽喉は

塞がつた。彼女の近くには數人の女が、聖者を見た嬉しさの餘りに、互に共通の感動に觸れて、泣いて居た。病氣に罹つて居た女が一人、疲勞たので、聖者の姿が見えぬ徑の片脇に坐つて居たが、何故とも知らず精神が興奮して、泣いて居た。ヴァレピエトラから遅く此處に着いた一人の老爺と三人の女とが此方へ來た。その女等は早速ドン・クレメンテをベネデットと思ひ違へて、急にしく／＼泣き出して「まあ美しいお方ちやの！まあ美しい！」と叫んだ。

その内にベネデットは、林檎の花の小さな白雪の下に立ちながら、慈悲と懇願と非難の言葉を以て様々に説き諭した末、漸く彼を崇拜する群衆の襲撃を撃退して、跪いて居た彼等を起き上らせる事が出來た。學生が集つて居る所から「話し給へ！」と叫ぶ聲が響いた。丁度この時、人々の遙上で、イエネの鐘が、嚴な音を以て村と、荒野と、レオ、サントニオ、アルツイノの山々と、西に急ぐ雲とに、正午の時を報じた。ベネデットは指を唇に當てた。鐘のみ獨聲を立てた。ベネデットはドン・クレメンアの顔を見たが、その眼色は無言の勸誘を彼に傳へた様であつた。ドン・クレメンテは帽子を脱いで、「主の使マリアに告げて」を唱へ始めた。ベネデットは直立して、合掌しながら、彼と共にその祈禱を唱へた。

そして鐘の音が終るまで、今彼に向つて話せよと叫んだ青年の顔を熟と見詰めた。その眼には慈悲と神秘的な優しさが充ちて居た。その得も云はれぬ顔付、嚴な鐘の音、草の微動、微風に吹かるゝ花を着けた林檎の枝の靜な揺めき、この一人の顔に向けられた、多くの、涙に濡れた顔の恍惚とした表情——これ等のものは相交つて唯だ一つの語となつて、ノエミの心を深く動かしては、また、それを捕へやうとする彼女を逃れた。その有様は恰も靈魂が、美妙な音樂の悲壯な調の底に潜むかの玄妙な一語を捕へやうとする渴望に苦しめらるゝやうであつた。鐘の音が止んだ時に、ベネデットは言葉靜に、彼の最も近くに居た人々に云つた。「聖者で無い者を聖者だと云つて、私の處へ來なすつた貴方等は何人です？ 又何事が起つたのです？」

數人の聲が一時に答へて、今斯く斯くの奇蹟が行はれたといふ事と、此處彼處の村で彼を迎へたいと云つて居る事とを彼に話した。彼はそれを聞いて答へた。「貴方等は盲だから、私をその様に偉い者だと思つて居るのです。その娘が本當に癒されたにしても、それは私が癒したのでありません。その人自身の信仰がその人を癒したので、彼女を立ち上らせて歩かせた信仰の力は、私共を戰かせて仆れさせる恐怖の力と同じ様

に、神様が造り給うたこの世界の到る處に何時も在るものであります。この力は、水の中や火の中に在る力の様に、魂の中に在る力であります。それ故、若しその娘が癒されたのならば、それは神様がこの廣大な力をこの世界の中に置き給うたからであります。神様を讃美なさい。私を褒めるものではありません。今私の云ふ事をよくお聞きなさい！貴方等が、神様の御力と御恵とは、奇蹟によつて一層強く現はれるものだと信じて居る事は、神様の御心に適ひません。神様の御力と御恵とは到る處に在つて、何時も限無く大であります。如何して信仰が人を癒す事が出来るか、これは實に解り悪い事ではありませんが、それよりも、この邊に咲いて居る花が如何して出来るのか、これは猶更解らぬ事であります。これは如何しても解りません。縦しその娘が癒されなかつたにせよ、神様の御力や御恵が、それだけ妙いといふ譯ではありません。健康を與へられん事を祈るのは善い事であります。けれども、それよりも猶、今私が話したこの大なる事が解る様に、熱心にお祈りなさい。神様が死を與へ給ふ時にも、生命を與へ給ふ時と同じ様に、神様の御旨を崇める事が出来る様にお祈りなさい。この世の中には、神を信じないと自分で思つて居る人があります。さういふ人等は、家族の中に病む者が出来る時、「これは法則である、自然である、宇宙の經濟である。我々は頭を垂れて、

吐かすに之を受ける。我々は義務の道を進んで行く。」と云ふ。氣をお付けなさい、斯ういふ人等が貴方等よりも先に天國へ這入るかも知れませんぞ！それから又、貴方等が如何いふ風の奇蹟を求めるか、よく考へて御覽なさい。貴方等は肉體の病を癒されやうと思つて来る。又その爲めに、私に自分達の村々へ来て呉れよと云ふ。信仰をお有ちなさい。さうしたならば、私が行かなくつても癒されます。併しながら、貴方等の信仰は、神様の御旨に依つて、もつと善く使ふ事が出来るといふ事を忘れてはなりません。貴方等は皆、魂は全く無病ですか？否、左様ではありませんまい。いくら革袋が、丈夫になつても、その中の酒が腐つて居たならば、何の役に立ちますか？貴方等は、眞理よりも、正義よりも、神様の律法よりも、自分の身と、自分の家族とを愛して居る。貴方等は何時も、自分と家族の者が當然得べきものの事を考へて居つて、他人が當然得べきものの事は滅多に考へぬ。貴方等は唯だ澤山祈れば、それで魂が救はれると思つて居て、そして如何いふ風に祈るべきかも知らぬ。貴方等は僕たる聖徒に祈る時も、主人たる神に祈る時も、同じ風に祈る。併し貴方等はまだく之よりも尙悪い事をする事がある！貴方等は主が言葉の多い事を望み給はぬといふ事を考へぬ。主はそれよりも寧ろ、貴方等が何時も主の御旨を心に留めて、黙つて眞心から主に仕へる事を

望み給ふのであります。それに又貴方等は自分等の病の性質が解らぬ。貴方等は、死にかけ
て居ながら「俺は達者だ！」といふ人の様です。多分今貴方等の中に「若し自分が悪いと知
らずに悪い事をしたならば、神は自分の罪を問ひ給はないだらう」と思つて居る人があるか
も知れません。けれども、主はこの世の裁判官の様な判決は下し給ひません。毒と知らずに
毒を飲んでも、矢張知つて飲んだ者と同じ様に倒れねばなりません。白い衣を有たぬ者は、
假令白い衣が必要だといふ事を知らなくても、主の宴に列する事は出来ません。何物よりも
先づ己を愛する者は、その罪たるを知つて居ても知つて居なくても、天國の門を通る事は出
来ません。これは、若し花嫁が指を折り曲げて居たならば、その指が花婿の與へる指環に通
らない様なものであります。貴方等は自分の魂の病を知つて、その除かれん事を、信仰を
以て祈らねばなりません。私は基督に代つて、貴方等の病は必ず除かれると、貴方等に告げ
ます。貴方等の肉體の癒される事は、貴方等自身に取つても、貴方等の家族に取つても、ま
た貴方等が世話をする家畜や作物のためにも、結構な事であります。けれども、貴方等の魂
の癒される事は——貴方等は知らないけれども、これは實際の事ですぞ——貴方等の魂の
癒される事は、善と悪との間に迷つて、行く所を知らぬこの世の人の憐な魂の爲めにも、

又辛苦と苦痛とによつて潔められて居る死んだ人の哀な魂の爲めにも、善い事であります。
これは丁度、一人の兵士の勝利が國民全體の爲めに善い事であるのと同じ事であります。貴
方等の魂が癒される事は、また天の使のためにも善い事であります。天の使は人の魂が
癒される毎に深い歡喜を感じると耶蘇様は仰せられました。歡喜は彼等の力を強めます。彼
等の力は聞のために盡されるのか、又は光の爲めに盡されるのか、死のためか、或は生命の
爲めか、貴方等にも解つて居りませう。信仰を以て、先づ始に魂の癒されん事を求めて、
其後に肉體の癒されん事をお祈りなさい！」

峻しい坂の上から人の顔の海が彼を俯瞰した。一番高い處、彼の聲の響だけしか聞えな
つた處に居た者の顔は、熱心の色を浮べて、涙に濡れて居た。一番近くに居た人々の中には
呆氣に取られた者もあり、熱情を面に現して居た者もあり、疑を抱いて居た者もあつた。涙
はノエミの蒼白い顔にも流れて居た。學生等は既に嘲笑の態度を棄て、居た。そしてベネテ
ットーが話を止めた時に、其中の一人は決然とした眞面目な面持で、彼に話す爲めに進み出
た。それと同時に、先刻の老爺が大聲で叫んだ。

「私等の魂を癒して下さい！魂を癒して下さい！」

「私等の魂を癒して下され！私等の魂を癒して下され！」

と他の聲が熱心に繰り返した。

瞬時の中に傳染は前衛全體に擴がつて、人々は憐憫を乞ふが如くに腕を伸して地に跪いた。

「私等の魂を癒して下され！私等の魂を癒して下され！」

「またその様な事をする！又その様な事をする！」

と叫びながら、ベネテットは頭髮を両手で掴んで、人々の方に躍り進んだ。

上の方から「奇蹟で癒つた娘！奇蹟で癒つた娘が来た！」と叫ぶ聲が響き渡つた。ベネテ

ット一の寢臺の上で臥て居る中に健康がその身に還りつゝあると感じた娘は、姉の腕に縋つ

て、ベネテットを捜しに降りて来た。ベネテットはその叫聲にも、坂の上に住つた人々

が此二人の女の通路を開けるために両方に分れた動作にも、心を留めなんだ。彼がいくら論

しても群集が立ち上らなかつたので、彼自身も地に跪いた。其時に彼の周圍に居つた人々

は立ち上つた。そして、大勢の興奮した騷擾と「奇蹟で癒つた娘が来た！」と叫ぶ聲とが既

に彼等に達したので、彼等は強ひて彼をも立ち上らせた。彼は人々の叫聲を聞いた様にも見

えなかつた。人々は彼に向つて「奇蹟で癒つた娘が来ました！奇蹟で癒つた娘が来ました！」と口々に繰り返した。そして彼等は「娘が貴方の所へ参ります！貴方は彼女をお癒しなすつたのです！」と叫ぶ様な眼を以て、奇蹟の結果を見て満足する色が何處にか潜んで居るかと、彼の顔を凝と見た。彼等は僅二三分前に聞いた彼の言葉を早忘れて仕舞つたかの様に騒ぎ廻つた。

太陽に焼かれた足下の石高道の様に顔色の蒼黄色い娘は、陰氣な、大人しい、小な顔を姉の腕に寄せながら、降りて来た。姉も亦沈んだ顔をして居た。群集は二人のために道を開けた。ベネテットは片方に寄つて、ドン・クレメンテの背後に隠れた。彼は我知らず斯うしたのであつたが、その舉動は豫め思ふ所があつて爲られた様に見えた。人々は皆、再び奇蹟が行はれるのであらうと思つて、身慄して微笑んで居た。二人の女は人違ひもせず、ドン・クレメンテの傍を見向きもせずに通り返して、ベネテットの前に立つた。そして姉の方が確乎とした調子で云つた。

「聖者様！貴方はこの娘を癒して下さりました。何卒今もう一人の方もお癒しなすつて下さりませ！」

「私は聖者ではありません。私がこの人を癒したわけではありません。そして貴女が云ふも
う一人の人の爲めには、私は唯だ祈るの外はありません。」

とベネテットは甚く探ひながら、殆ど囁く様に答へた。

二人の姉妹が、その病人は彼等の兄であつて、今ベネテットの小屋の中で寢臺の上に臥
て、大層苦しんで居ると話した時に、彼はドン・クレメンテに云つた。

「これから歸つて、介抱をしませう。」

彼は師と共に歩き出した。兩方に分れた群集の河は再び一つになつて、彼等の背後に隨い
て、騒がしく流れた。ベネテットは後振り向いて、彼等が隨いて來る事を禁じた。そして
熱い太陽に照らされて、徒歩で峻しい坂を登らせてはならぬかの娘の介抱を、女等に命じた。
彼は女等に、その娘を宿屋へ連れて、行つて、寢床に臥させて、食物と葡萄酒とを與へて元
氣を附けよと命じた。彼の背後から隨いて行かうとした人々は立ち止つた。その他の者は道の
片脇へ寄つて、彼の通路を開けた。先程彼に話す事を求めた學生は、恭しう彼に近付いて、
自分と數人の友人とが後刻他人の居ない處で彼と少し語る事は出来まいかと問うた。

「え、宜しいとも！」

とベネテットは男らしい熱情を面に現して答へた。近くに立つて居たノエミは、これを
聞いて力を得た。

「妾も五分許時を拜借致したう御座いますか。」

と彼女は顔を赤めながら佛蘭西語で云つたが、直、自分が佛蘭西語で話したのは、彼が教
育ある人だといふ事を自分は知つて居ると告白したやうなものだど氣が付いたので、眞赤な
顔をして、同じ懇願を伊太利語で繰り返した。

ドン・クレメンテは思はずベネテットの腕を緩く締めた。ベネテットは懇懇に答へた
が、その調子は少し鋭かつた。

「若し深切な行をしたいとお思ひなさるならば、あの可哀相な娘の介抱をなさい。」
斯う云ひ棄て、彼は歩を續けた。

彼とドン・クレメンテと二人だけ小屋に這入つた。誰も隨いて來た者は無かつた。病人の
母の老婆は、彼が這入つたのを見て、泣きながら彼の足下に平伏して、彼女の娘が云つた通
りの言葉を繰り返した。

「貴方が聖者様で御座りますか？え、貴方が？貴方は妾の小供を一人癒して下さりまし

た。何卒今此者の病氣もお癒しなまつて下さりませ。」

日向からこの暗い處へ這入つたので、始の中はベネデットーは物の識別が付かなかつたが、纏て寢臺の上に臥て居る男が見えた。その男は苦し氣に喘ぎながら、呻いたり泣いたりする合間に聖徒や、女や、イエネの村や、自分の不幸な運命を呪つて居た。マリア、セルヴァは寢臺の側に跪いて、病人の額に染み出る汗をハンカチで拭いて居た。この他には誰も洞穴の中に居なかつた。明い入口の近くの、黄味掛つた岩壁の面に粗と彫付けてあつた大なる十字架が、この時一つの不可思議な嚴な語を繰返して居た。

「神様にお頼りなさい！」

とベネデットーは言葉優しく老婆に答へた。そして寢臺の側へ行つて、病人の上に身を屈めて、その脈を見た。老婆は泣き止んだ。病人は呪詛と呻吟を止めた。日光が映し込む爐の中に飛び交ふ蠅の聲さへ聞える位静になつた。

「醫者を呼びに遣りましたか！」

とベネデットーは囁いた。

老婆は又啜泣を始めた。

「貴方が癒して遣つて下さりませ！ 耶蘇様とマリア様の御力によつて、癒して遣つて下さりませ！」

病人の呻く聲がまた聞えた。マリア・セルヴァは低い聲でベネデットーに云つた。

「お醫者さんはスピアコへ行つて留守で御座います。貴方は多分セルヴァを御存知で御座います。妾はセルヴァの家内で御座います。良人は今藥屋まで参りました。」

丁度この時、チョヴァニ・セルヴァが心配らしい顔をして、息を切らして歸つて來た。彼が態々行つたのに、藥屋の店は戸が閉つて居て、藥屋は留守だつた。併し教區の教師がマルサラ葡萄酒を少し呉れたし、又羅馬から來た或る見物人の一行が食料品を澤山携帶て居たのでブランデイと珈琲を呉れたから、それを持つて歸つた。ベネデットーはドン・クレメンテを手招きして、病人が死にかけて居るから教區の教師を呼んで來て呉れよ、自分で呼びに行つてもよいのであるが、今病人の側を離れるのは、哀な老婆に對して殘酷であるやうに思はれるから行けぬ、と囁いた。ドン・クレメンテは黙つて出て行つた。小屋から數歩離れた處に「イエネの聖者」を見たいといふ好奇心に曳かれて態々羅馬から來た、流行風の洒落た装をした人々の一行が、互に何か相談して居た。その一行は三人の婦人と四人の紳士から

成立つて居て、その案内をして居たのは今朝セルヴァ等が坂の上で遇つたイエネの村人であつた。彼等はドン・クレメンテの姿を見て何か口早に密々話し合つたが、纏て一行の中の頗る氣取つた装をした若い男が、片眼鏡を眼に密着けて、ドン・クレメンテに近付いた。婦人等はこの美しい僧を感心して眺めて居たが、案内者が彼は聖者ではないと云つたので、失望しながらも尙熟と見惚れて居た。

これ等の人々も亦ベネットと會見する事を望んで居る。殊に婦人達が熱心である。尤も私などは聖者と語る價値のある者ではありませんが、とこの男は人を馬鹿にした様な笑ひ様をしながら云ひ足した。ドン・クレメンテは今の所ではベネットと會談する事は逆も出來ぬと手短に答へて、其儘急ぎ去つた。若い男は婦人等に、聖者は今御厨子の中に入れて錠が下してある相だと復命した。

小屋の中では、狂氣の様になつて居る老婆が、藥などを飲まさずに奇蹟を以て癒して呉れよと只管頼むにも構はず、ベネットは病人にチョヴァニが持つて歸つた興奮劑を二口三口興へて慰めた。併しそれよりも、彼の優しい慰撫や、今に有難い言葉を聞かせて上げやうといふ約束の方が、一層深い慰藉を與へた。そして哀憐に充ちた、優しい眞面目な聲は平和の奇蹟を行つた。病人は今尙呼吸するのも苦し氣に呻き聲を發して居たけれども、最早呪詛を止めて仕舞つた。希望を以て狂氣の様になつた母は、涙を流しながら手を合はせて、「奇蹟を！奇蹟を！奇蹟を！」と呟いて居た。ベネットは言葉靜に病人を慰めた。

「愛する者よ、お前さんは神様の御手の中に居るので、お前さんはその御手の強い事を感じて居るが、今お前さんの身體をすつかり神様に任せて仕舞つたならば、その御手の優しい事が解りますよ。神様の御手がお前さんをもう一度生命の海にお置きなさるとも、天國にお置きなさるとも、また何處へお置きなさるとも、その様な事は考へずに、唯だすつかり神様にお任せなさい。お前さんが小な小供の時分には、お前さんのお母さんがお前さんを彼方此方と抱き歩いたが、お前さんはどの様に抱かれるのかも、何時抱かれるのかも、何故抱かれるのかも、尋ねなかつたでせう。お前さんは母の腕に抱かれ、母の愛の中に居たから、その上に何も望まなかつたでせう。愛する者よ、今もそれと同じです。今この様に話して居る私は生涯の中に澤山悪い事をしました。多分お前さんも少しは悪い事をしたでせう。多分お前さんはそれを覚えて居ませう。お泣きなさい。今お前さんをお呼びなされる天の父様、お前さんがした悪い事を宥して、それをすつかり忘れて仕舞ひ度いとお思ひなさる父様の懐に抱かれ

て、お泣きなさい。今に教師さんが来られますから、お前さんは自分がした悪い事を、覚えて居るだけ、煩悶せずにつかり話すのですよ。さうしたならば、あの深い秘密の中に這入る時に、誰がお前さんを迎へて下さるか知つて居ますか？愛する者よ、如何な愛と、如何な哀憐と、如何な歡喜と、如何な生命とがお前さんを迎へるか知つて居ますか？」

哀な青年は死の影の中に苦しみ悶えながら、強烈な渴望と、その渴望が言葉に表されぬ事を恐れる念とを以て光る硝子の様な眼でベネテットを凝視して居たが、ベネテットの言葉を聞き違へて、今彼に向つて懺悔をせねばならぬと思つたので、その罪を色々白し始めた。母はベネテットが話して居た間、壁の前に跪いて、奇蹟の行はれるのを今か今かと待ちながら、其處に彫り付けてあつた十字架に唇を押し當て、居たが、今我が子の聲の異様な響きを聞き付けて飛び起きさま、寢臺の側へ駆け寄つて——この有様を見ると——天に向つて兩腕を投げ出して、絶望の叫を上げた。ベネテットは青年が懺悔し始めたのを見て、大に驚いて「いや、いや愛する者よ、私に云ふのぢやない、私に云ふのぢやない！」と叫んだ。けれども病人にはそれが聞えなかつた。彼はベネテットの頸に片腕を懸て彼を引き寄せて、その悲しい懺悔を續けた。ベネテットは幾度も「是はしたり、是はしたり！」と繰り返した。

がら、その言葉を聞かないやうに努めたけれども、死なんとする男の腕を拂ひ除けて、無理に自分の身を離す勇氣が無かつた。併し、病人の言葉は調子が遅うて、斷れぎれで、混亂して居たから、ベネテットには聞えなかつた。縦し聞かうと思つても容易ではなかつたらう。大分時が経つたのに教師は未だ來ぬ。ドン・クレメンテも未だ歸らぬ。外では密々話す聲や、兎音を潜めて歩く音が聞えて、折々様子を知り度相な顔が入口から中を覗き込むが、誰も中へは這入つて來なかつた。死なんとする人の言葉は何とも意味の解らぬ弱い音の中に紛れて、遂に黙つて仕舞つた。

「戸外に誰か居ませんか？誰か教師さんの處へ行つて、急いで來て貰つて呉れませんか？」

とベネテットが云つた。

チヨヴァニコマリアとは、氣が狂はん許に歎いたり怒つたりして居る母を慰めて居た。一度奇蹟の力を信じた彼女は、其子がこの様な危篤な容體に立ち到つたのは病氣の自然の結果であるとは如何しても信じなかつた。彼女は今子の爲めに歎いて居るかと思つと、直またベネテットが彼に飲ませた藥を呷つた、そしてセルヴァ夫婦があれば藥ではないと、いくら

云つて聞かせても承知しなかつた。マリアは彼女を慰めるため、又彼女を熟として居させるために、兩腕で彼女を抱いて居たが、今ベネニツトの言葉を聞いて、チヨヴァニに教師の處へ行つて呉れよと胸したので、チヨヴァニは急いで出掛けた。死なんとする男の光つた眼には歎願の色が充ちて居た。

「子よ、お前さんは基督様に會ひ度いと思ひますか？」

とベネニツトは彼に云つた。病人は何とも名状の出来ぬ呻き聲を出して、力無く頭を下げて同意を表した。ベネニツトは一度、二度、優しく彼に接吻した。

「基督様は私に、お前さんの罪が宥されたから、お前さんは安心して世を去つてよいと仰有りますぞ。」

光つた眼には歡喜の色が輝いた。

ベネニツトは母を呼んだ。マリアが抱いて居た腕を離すと、彼女は駆け寄つてその子の身體に縋り付いた。此時ドン・クレメンテが草臥れた様子で這入つて來た。チヨヴァニと教師も彼と一緒にあつた。

ドン・クレメンテが教師の家へ行つた時に、見知らぬ僧が教師と議論をして居た。その僧はこの様な事を云つた。宗教的熱心の爲めに狂氣のやうになつた人々が大勢、奇蹟で癒された娘をサンタンドレア教會堂へ連れて行つて、神に感謝を捧げやうとして居る。この様な怪しからの事を防止するのは教師の職務である。あの娘を癒した事が詐僞でないにしても、又それは事實でもない。それに又、あの自奇蹟を行ふと稱して居る男は、奇蹟と永遠の救拯とに就いて飛んでもない異端をどつさり説教した。彼は信仰を自然の力だなど云つて、その上に、病人を癒し給うた基督の御行の批評までもした。彼は今又別の不運な馬鹿者を捕へてもう一度奇蹟をやる支度をして居る。そんな事は如何しても止めさせねばならない！何、そんな事は止めさせなければならぬ！「止めさせる」と口で云ふ事は容易いが、如何したならば止めさせる事が出来るのだらう？と、既に宗教裁判所の香を嗅ぎ付けた哀な教師は獨思つた。ドン・クレメンテが其時這入つて來た事は、瞬時の間に安堵の息を吐かせた。「この人が來たからには私の味方をして呉れるだらう」と彼は思つた。所が豫想に反して、事態は益々面倒になつた。ドン・クレメンテがその悲しい用向を話した時に、その見知らぬ僧は叫んだ。

「そら御覽なさい！あんな奇蹟のお仕舞は屹度斯うです。この異端信者が出て行つて仕舞つて、もう歸つて来ないといふ事が判るまでは、貴方はヅヰアチクム（臨終の聖餐）を持つてあの家へ這入つてはなりませんぞ。」

ドン・クレメンテの顔は赤くなつた。

「彼は異端信者ではありません。彼は神の人です。」

「へえー左様ですかい！」

とこの僧は彼に返答して置いて、それから教師の方を向いて云つた。

「貴方はまあよくお考へなさい！だが、どうせこれは貴方がお好きなやうになさればよいので、私なんぞの出る幕ぢやありませんさ。ぢや、失禮します！」

彼はドン・クレメンテに會釋して、其儘すつと室から出て行つて仕舞つた。

「それぢや如何しませう？如何しませう？あれは實に恐しい男です。けれども私は全能の神様に裏切は出来ません？如何したら可いでせう？如何したら可いでせう？」

と心配で堪らない教師は兩手で顚顚を抑へながら呻いた。

實際この教師は神に對する宗教的の恐を有つては居たが、またその他にドン・クレメンテ

の峻嚴な良心の非難に對する、半ば宗教的で、半ば世間的の一種の恐をも有つて居た。この危機に當つて取るべき最上の手段が急にドン・クレメンテの心に明に知れた。

「兎に角ヅヰアチクムの支度をして、今直に私と一緒にお出でなさい。そしてあの可哀相な青年の懺悔をお聞きなさい。ベネテットが異端信者か、神の人か、今に判ります！」

その時侯が這入つて来て、一人の紳士が、病人が死にかけて居ますから教師さんに早く来て貰つて下さい、と云ひに来たと云つた。

ドン・クレメンテは疲れ切つて、チヨヴァニ及び教師と一緒に小屋に這入つた。彼はベネテットを側へ呼んで、入口の近くに立つた儘、聲を潜めて何事か彼に云つた。病人の咽喉は既にゴトゴト鳴つて居た。ベネテットは頭を垂れて、彼に聖者に相應しい卑下を求め、聞き辛い師の言葉に耳を傾けた。聞き終つてから、彼は一言も答へずに、自分の手で岩に彫り付けた十字架の前に跪いて、岩の面を窪めて造つたこの犠牲の象徴から、その愛と、その祝福と、その力と、その生命とを自分の身に吸ひ込もうとするかのように、その悲壯な二本腕の交叉する所に熱心に唇を押し當てた。そして、やをら身を起して、永久に歸らざる

べくこの家を立ち出でた。

太陽は、北の方、村の背後から湧き昇つた煙の様な雲の渦巻の中に隠れんとして居た。ついで先程まで大勢の人が騒ぎ廻つて居た場所は、今は人影一つ見えす、静まり返つて居た。石塊で凸凹した小徑の曲り角や、半ば開いた戸の蔭や、みすばらしい家の角から、女等が覗いて居たが、ベネテツトの姿が見えると、皆引き込んで仕舞つた。彼はイエネの村が、健康を得んが爲めに彼の許に來たあの病人が將に死なんとして苦しみ悶えて居る事を、知つて居るのであらうと感じた。彼は彼の敵の勝ち誇る時が來たのであらうと感じた。彼の師たり又友たるドン・クレメンテまでが、初彼にその法衣を脱がん事を求め、今又彼にその家を出て、イエネの村を去らむ事を求めた。尤も彼は、悲と愛とを以て彼に求めたには相違ないが、それでも矢張求めたのである。この様な事を思ふにつけて、悲しさに胸を刺される様に感じた故でもあり、又——今日晝餐の蠶豆とパンとを食べる隙が無かつたので——永く食物を口に入れなかつた故でもあらう。彼は今にも氣絶せんばかりに感じて、眼が霞んで來た。で、彼はテラ・コルテといふ狭い小路の端に在る家の小な、戸の閉ちてあつた入口の、朽ちた闕の上

に、倒れる様に腰を下した。長い雷鳴が彼の頭の上で轟いた。

休息して居る中に、彼の氣分は少しづつ、好くなつて來た。彼は基督を慕ひつゝ、世を去らんとするかの男の事を想つて、心を掠め過る甘美な感情の波を感じた。彼は自分が主の大なる賜を假令暫時の間でも忘却したといふ事と、十字架から生命と歡喜とを受けると直にその十字架を愛さなくなつたといふ事とに氣が付いて、悔恨の情に心を満たされた。彼は兩手で顔を覆つて、聲を立てずに泣いた。上の方の窓の扉が開く小な音がして、何か柔な物が彼の頭の上へ落ちた。愕然として彼は眼から手を除けて見ると、足下に小な野薔薇が落ちて居た。彼は身慄をした！數日前から毎日、夜小屋へ歸つた時か、朝小屋を出る時かに、闕の上に花が置いてあるのを見た。彼はそれを少しも取らなかつた。唯だ花が踏まれないやうに、片脇の石の上に乗せて置いただけであつた。また、何人の手がそれを闕の上に置いたのか探り出してみやうともしなかつた。屹度この小な野薔薇も同じ手から落ちたに違ひない。彼は頭を上げて見なかつたが、縦しその野薔薇を手に取りなくとも、その方に手を動かさなくとも、この道此處を去らねばならぬと知つた。彼は起き上らうとしたけれども、彼の足は未だ身體を支へる事が出来なかつたから、歩き出すまでには猶曇時熱として居た。雷がまた前

よりも高く、長く、鳴り渡つた。小さな入口の戸が押し開けられて、黒い着物を着た若い女が顔を出した。彼女は美しく、蠟の様に白い顔をして居た。彼女の青い眼には絶望の色と涙とが充ちて居た。ベネテットは彼女の方に顔を向けずには居られなかつた。そして、この女は嘗て教區の教師の家で一寸遇つた事のある、村の學校の教師であると知つた。彼が會釋もせずに行きかけた時に、彼女は低い聲で「どうぞ妾の申します事をお聞き下さいませ！」と悲し相に云つた。そして少し後へ退つて、廊下に跪いて、歎願する様に兩手を彼の方へ伸して、頭を胸の上に垂れた。

ベネテットは歩を止めた。彼は霎時踟躕つたが、纏て威嚴のある重い調子で云つた。

「如何いふ御用があるのですか？」

四邊は殆ど暗くなつて居た。電光が閃いて、雷鳴がみすばらしい、狭い小路に轟き渡つたので、二人には互の言葉が聞えなかつた。ベネテットは戸口に近寄つた。

「妾は貴方がイエネを出てお行きなさらねばならぬかも知れぬと聞きました。貴方が仰有いました或るお言葉を承りまして、妾は生命を授かりましたが、貴方が他所へお越しなされるやうになれば、妾の生命は亡くなつて仕舞ひます。どうぞあのお言葉をもう一度お聞かせ

下さいませ。妾に、妾だけに、お聞かせなすつて下さいませ。」

と若い女は頭を垂れた儘で、雷が鳴りはためいた時には言葉を切りながら、答へた。

「如何な事をです？」

「先達貴方が教師さんのお宅で教師さんとお話をなすつていらつしやいました時に、妾は次の室に下男と一緒に居りましたが、間の戸が開いて居りました。其時貴方は斯う仰有いました。人が神の存在を否認しても、眞實無神論者でもなく、永遠の死に陥る事も無い場合がある。それはその人が存在を認めて居ないその神が、その人の理性に嫌惡の感を起させるやうな形に於てその人に示され、そしてその人が眞理と徳と同胞とを愛し、且その人の生涯がその愛を證據立て、居る場合である。」

ベネテットは答へなかつた。如何にも彼はその様な事を云つたには相違ないが、それは基督教の教師に向つて云つた事で、また、他の人(多分その言葉を了解する事が出来ない者)が聽いて居やうとは露知らずに云つた事である。女は彼が黙つて居る原因を推量した。

「今申しましたのは妾の事では御座いませぬ。妾は信者で御座います。カトリック教徒で御座います。妾の父がその様な生涯を送つて死にましたので御座います。所が如何で御座い

ませう！人は皆、父は如何しても救はれない者だと云つて、母にまでも左様思ひ込ませて仕舞ひました。」

彼女が電光と雷鳴の烈しい中で斯う話して居る間に、疎な大粒の雨が、しゆつと音する許に空を切つて、鞭つ様に壁に當りながら、塵の中に大なる形を付けて、道路をぼつりぼつり叩き始めた。けれどもベネテットは雨を避ける爲めに家の内へ這入らうとしなかつた。彼女も亦彼に這入れよと云はなかつた。そして、今の彼女の言葉が、神秘と孝心との衣に包まれた彼女の深刻な感情の、唯一の告白であつた。

「お願で御座います！妾の父は救はれて、妾は天國で父に會へると、何卒仰有つて下さいませ！」

と女は遂に眼を擧げて彼に乞うた。

「お祈りなさい！」

「え、！それだけで御座いますか？」

「私等は宥される事の出来ない者が宥される事を祈りはしますまい？お祈りなさい！」

「お、！有難う御座いました！——何處かお悪う御座いますか？」

この最後の言葉は誠に低い聲で囁かれたから、ベネテットの耳に這入らなかつたかも知れぬ。彼は訣別を告げる様な身振をして、歩き出した。その頭の上から叩き付けるやうに降る大雨はかの濁んだ小な野薔薇を打ち挫いで、泥の中へ押し流した。

アルチナツツオから来たあの病氣の娘に附添うて宿屋に居つたノエミは、その家の窓からか或は入口からか、彼が戸外を通るのを見た。彼女は亭主に傘を借りて、風雨を冒して彼の背後から隨いて行つた。

彼女はベネテットが帽子も冠らず、傘も翳さずに行くのを見て深く氣の毒に思ひ、又若し彼が聖者でなかつたならば、人は彼を狂人と思ふであらうなど考へながら、彼の背後から隨いて行つた。教會堂の在る四辻まで来た時に、彼女は右手の或る家の戸が少し開いて、丈の高い、瘦せた僧が戸外を覗くのを見た。彼女は屹度その僧がベネテットに内へ這入れよと云ふであらうと思つたが、それに反してその僧は、ベネテットが間近へ来た時に、大なる音を立て、戸を閉じたので、大層腹が立つた。ベネテットはサンタンドレア教會堂に這入つた。ノエミも續いて這入つた。彼は中央の大聖壇に近いて跪いたが、ノエミは入口の近く

に止つた。別の聖壇の階段に腰を掛けて居睡をして居た番人は、二人の噂を聞いて、立ち上つて、ベネデットの方へ歩いて行つた。けれども彼は羅馬から来た僧の味方であつたら、今這入つて来た男が例の異端信者であると思つた時に、後戻りをして、ノエミに、今朝アルチナツツオから来たあの病人が會堂へ連れて來られた時に、貴女も側に居つたのを見受けたが、あの男は如何なつたか知らぬか、と問うた。それから、彼はその病人の處へダ・アチクムを携へて行く教區の教師を待ち受けて居れよと命ぜられたから、この様な事を問ふのであると云ひ足した。ノエミはそのアルチナツツオから来た青年が死にかけて居るといふ外何も知らぬと答へた。

「なある程、左様ですがすかい」と番人は態と聲を高くして「その男は基督様に會ひ度くないのでがせう。皆がわい／＼云ふ奇蹟なんて、そんな物ですがすよ！神様が雷鳴と電光を送つて下さつたので好うがしたが、若しこんなに荒れなければやあ、皆はあの娘を此處へ連れて來るのでがせうが！」

斯う云つて置いて、彼は又舊の階段に腰を掛けて居睡を始めた。

ノエミはベネデットから眼を離す事が出来なかつた。彼女は眞の意味に於て彼に心を奪

はれて恍惚となつたのでもなく、又かの若い女教師の様に熱烈な感情に動かされたのでもなかつた。彼女は彼が俯に倒ふれかけて兩手を階段の上に衝いて、それから漸く身を廻らし、て坐るのを見た。けれども彼女は彼が病氣なのかと自分にも問はなかつた。彼女は彼を熱く見詰めて居たけれども、彼よりも寧ろ自分に心を奪はれて居た。彼女の衷に徐々に起りつゝある一つの變化、彼女を以前の彼女と異つた者、自見違へる程に彼女を異つた者とせんとする變化——不可思議な道に由つて無理に彼女の衷に押し入らんとし、彼女の心の奥の細い線を断らんばかりに強く緊張する所の廣大なる眞理に關する、今尙ほ難然とした、盲目的の觀念——を深く思ひ廻らして居た。彼女の姉婿の宗教上の議論は、彼女の精神を亂した事はあつたかも知れぬが、決して彼女の心を感動させた事はなかつた。それに今何故彼女の心はこの様に動くのであらう？一體あの蒼い顔をした、瘦せ衰へた男が如何な偉い事を云つた？嗚呼！言葉よりも彼の顔付である、彼の聲である、彼の——何？捕捉へる事の出来ない或物である。多分何かの豫覺かも知れぬ——だが何の？多分將來に於いてこの男とノエミとの間に結ばれる縁の豫覺かも知れぬ。彼女は彼と話す機会を逸しまいと思つて、彼の背後から隨つて來て、教會堂に這入つたのであるが、今になつて彼が殆ど恐しくなつて來た。そ

れに、又ジアンを彼に話さねばならぬとは！だがジアンは本當に彼を解して居たのだからか？ジアンは彼を愛して居ながら、如何して彼の衷にある高尚な思想の潮流に抵抗する事が出来たのであらう？その思想は以前は外に現れずに内に潜んで居たのかも知れぬが、ジアンともあらう女がそれを感ぜなかつた筈はない。ジアンは何を愛して居たのであらう？ピエロの衷の卑い情慾を愛して居たのであらうか？若しノエミが彼と語るならば、ジアンは事ばかりでなく、宗教上の事をも亦語らうものを。彼女は彼の信する宗教は實際どの様なものか、問はうものを。けれど、若し彼が其時に何か馬鹿氣た事を、何か平凡な事を答へたならば如何しやう？この様な事を氣遣つたから、彼女は彼に話しかける事を殆ど恐れたのであつた。

壊れた窓から雨の餘瀝が吹き込んで舗石を濡らした。此場の光景、この大なる空虚の會堂、暗い空、涙の様に降る雨、大聖壇の階段の上に蹲つて、神のみ獨り給ふ崇高な思に己を忘れて居るこの世の流浪人、別の聖壇の階段に腰を掛けて、全能の神を己の同僚のやうに思ふ狎々しさを態度に表して居る彼の敵、會堂の番人——ノエミは、この有様を何時までも忘れることは出来まいと思つた。大分時が経つた。多分一時間、或はもつと永かつたか

も知れぬ。會堂の中は前よりも明るくなつた。雨は止みかけて居るらしい。四時が打つた。ドン・クレメンテとマリアとチヨヴァニとが連れ立つて這入つて來た。セルヴァ夫婦はノエミが何處へ行つたのかと思つて居た所であつたから、彼女を見て喜んだ。番人はドン・クレメンテを知つて居たから、此方へ出て來た。

「如何でがす？ ヴァアチクムは？」

「ヴァアチクム？ 嗚呼、あの男はもう死んで仕舞つた！ ヴァアチクムに氣が付いたのが遅かつたのだ！ ドン・クレメンテはベネデットが何處に居るかを問うた。ノエミは彼が坐つて居る處を指して教へた。セルヴァ夫婦はノエミがベネデットと會見したいと思つて居る事を僧に話した。ドン・クレメンテは顔を赤めてもちもぢして居たが、ベネデットに頼んで見て呉れよと云はれて、斷る事が出来なかつた。そして遂にベネデットの側へ行つた。

二人が共に話して居た間に、チヨヴァニとマリアとは其時まで起つた出來事をノエミに話した。あの病人は教師が來てからは一言も口をきかなかつたから、懺悔を聞く事は出来なかつた。其中にあの大雨が非常な勢で降り出した爲に、教師が聖油を取りに行く事は出来なかつた。人々は病人がもう二三時間も生きて居るだらうと思つて居たのに、三時に彼

は到頭息を引き取つた。瀧の様に降つて居た雨の勢が稍弱くなる直に、ドン・クレメンテと教師とは小屋を出たが、チヨヴァニとマリアとは、死人の母が全く狂氣の様になつて居たから、彼の姉が来る迄母の側に跟いて居た。それから二人はノエミを捜しに其處を出た。宿屋に彼女の姿が見えなかつたので、二人は會堂の方へ出掛けた。四辻で彼等はドン・クレメンテが一番立派な家の一つから出て来るのに遇つた。二人は彼が如何いふ用向でその家へ行つたのか知らなかつた。今マリアは熱心な様子で、ベネテットの事、彼が死にかけて居た男に與へた靈的の助の事などを話して、彼を褒めた。彼女も彼女の夫も、今容易に村中の者を使喚してベネテットに反對させる事が出来る人々が、彼に對して戰を挑んだ事を見て、大層腹を立て、居た。彼等は又教區の教師の氣の弱い事を非難した。そしてドン・クレメンテの行爲に對しても不満足の意を表した。ドン・クレメンテがその弟子を追ひ遣らうとする者に力を貸すなどは怪しからぬ事である。餘人はいざ知らず、彼が何故教師が來た時にベネテットに家を出よと云つたのか？一體彼が院長の命令を奉じて此處へ來るといふ事からして既に間違つて居る。ノエミはその命令がどんなものか少しも知らなかつたが、ベネテットがその法衣を脱がされるのだと聞いた時に、大層腹を立て、そんな命令は従ふべきものでないと言つた。

彼等が話して居る中に、ドン・クレメンテとその弟子が入口に近付いて來た。僧はベネテットを待たせて置いてセルヴァ夫婦とノエミの側へ來て、他にも未だ數人の人がベネテットに面會したいと云つて居るので、彼はこの村の或る紳士の家を借りて、その面會の場所とする手筈をして置いたから、今からベネテットを其處へ連れて行かねばならぬが、纏てセルヴァ等を迎へに戻つて來る、と云つた。

ドン・クレメンテが家を借りる約束をした紳士といふのは、今朝セルヴァ等がイエネの坂の途中で出會つた男のことであつた。あの時彼が待ち受けて居たチヨヴァニと公爵夫人は其後間もなく二人の婦人並びに數人の紳士と一緒に到着した。其一行の中に新聞記者が一人居つた。それは先程の片眼鏡を掛けた若い男であつた。このイエネの住人は、この様な立派な客を迎へたので、嬉しさの餘に氣が狂はんばかりであつた。そして今日は宛然自分が公爵にでもなつたやうにぐつと反身になつて、萬事大まかに振舞つて氣前の好い所を見せやうとした。それ故ドン・クレメンテが教師の忠告に従つて彼に頼み込んだ時に、彼はベネテットの爲め

に古い黒の着物一揃ど、黒い襟飾と、黒い鍔廣の帽子とを用立てる事を無造作に承諾した。彼が用立て、呉れた着物が並べてある室で、ベネデットは黙つて法衣を脱いで、その俗人の着る衣服を着始めた。窓際に立つて居た彼の師は泣吃逆を抑へ兼ねた。暫時してから弟子は聲静に彼を呼んだ。

「御師匠様、私の装を御覽なさい！」

彼は、丈も幅も大過ぎて身に合はぬ着物を着て、落着いた様子で微笑んだ。師は接吻する積でベネデットの手を握つたが、彼は惶しく手を引き込めて、兩腕を擴げてドン・クレメンテを胸の上に抱き締めた。ドン・クレメンテは今もベネデットの弟とも見え、子とも見えた。そしてこの後悔せる、陋劣な人間の迫害の手先は、神の火を以て鼓動するベネデットの上で、塵や灰になつて失せ去るかとも見えた！二人はこの様に抱き合つた儘で、永い間物をも云はずに立つて居た。

遂にドン・クレメンテは口を開いて低い聲で囁いた。

「私はお前の爲めに斯うしたのだよ。私は神の御恵が、法衣の中でよりもこの粗末な着物の中で、もつと明に輝くのを見たさに、この辛い使に態々自分で來たのだよ。」

ベネデットは彼の言葉を遮つた。

「否、否！ どうぞその様な事を云つて私に妙な氣を起させないやうにして下さいませ！ 先日サンタ・スコラスティカで貴方がその法衣を私に着せて下さいました時に、私はあの幻の中で私とその法衣を着て死にかけて居る有様を見た事を思ひ出しまして、身の程をも考へずに嬉しく感じましたが、今その私の借越を懲し給ふ神様に感謝せなければなりません。實際あの時に私は「私は眞實神に愛せられて居る！」と叫ばぬ許に心が傲りました。それに今——」

「嗚呼！ だが併し——！」

と僧は叫んだが、直眞赤な顔をして口を噤むた。ベネデットは師の心の中に「お前が今脱いだその法衣を再び着る折が絶対に來ないと誰も云つては居ないよ！ あの幻が決して實現しないも誰も云つては居ないよ！」といふ考が浮んで居たけれども、謹慎深い爲めか、又はベネデットの死に言ひ及ばす事を避けるためか、その考を口に出し度くないと思つて居る事を、了解し得たと自思つた。で、彼は笑を含んで師を掻き抱いた。師は急いで他の事に話を紛らさうと思つて、かの教區の教師の爲めに言譯をした。教師は今日の出來事に就い

て大に心を悩まして居る。そして若し上官を恐れなかつたならば、彼はベネデットを追ひ遣るやうな事はしないだらう。彼はマンツオニの小説「許嫁」の中のドン・アツボンテイオのやうな教師ではない。彼は自分一個の身の上に関して少しも恐を有つて居ないので、唯だ、教會の政治を執つて居る人々と争ふ事が信者に頭を與へはせぬかと、そのみを恐れて居るのである。

ベネデットは答へて云つた。

「私はあの人を宥します。そしてまた、神様があの人を宥し給はん事を祈ります。けれども、この様に道徳的勇氣に缺けて居る事は教會の大弊害で御座います。多くの人々は上官と争ふよりは寧ろ神様その者と争はんとして居ります。そして彼等は神の御聲が響く自分等の良心を棄て、その代りに上官の良心を自分等の良心として、凡ての責任から遁れやうと致します。彼等は上官の命に従つて、善と争つたり、或は悪と争ふ事をしなかつたりする事が、世の人に頭を與へ、世の人の眼に基督者の品性を汚して見せるものであるといふ事を覺りません。彼等は、決して善とは争はず、悪とは争ふ事を止める事なく、上官を非難せず、凡そ善に反対もせず悪を助けもせぬ事柄に就いては全く従順に上官の命に従ひ、又上

官の足下に生命をさへ投げ出す事があつても良心を決して棄てないといふ事に依つて、彼等の神に對する義務をも、上官に對する義務をも共に全うする事が出来るといふ事を覺りません。左様です、假令生命を棄てる事があつても、良心を決して棄てはなりません！之に依つて地位の低い者は、良心と正當な服従との他は凡てのものを奪ひ去られても、純粹な地の鹽となるので御座います。そしてこの様な鹽の多くが集つて一つとなる所では、その鹽が固く附着する所のものは、腐敗から救はれますが、その鹽が附着しない所のものは、腐敗して朽ち果て、仕舞ふので御座います！」

斯く語つて居る中にベネデットの容貌は變つて來た。語り終つて彼は立ち上つた。その眼は光を放つて、その額は眞理の靈の尊貴な光を以て輝いた。彼はドン・クレマンテの肩に手を掛けた。

「御師匠様」と顔を和げながら「私は私に與へられました家とパンと法衣とを後に殘して此處を去りますけれども、生命があります限は眞理なる基督を説く事を決して止めない積りで御座います！私に此處を去りますけれども、熱と口を噤んでは居りません。貴方は説教をした或る俗人に聖ピエトロ・ダミアニが送つた手紙を、私に見せて下さつて、讀めよと仰

有つた事をお覚えで御座いますか？あの人は會堂の中で説教を致しました。私は會堂の中で説教を致しません。若し基督が私に貧しい者の家で話せよと命じ給ふならば、私は貧しい家で話す積で御座います。若し主が私に宮殿の中で語れよと命じ給ふならば、私は宮殿の中で語る積で御座います。若し主が私に寢室の中で話す事を命じ給ふならば、私は寢室の中で話す積で御座います。若し主が私に屋根の上で語れよと命じ給ふならば、私は屋根の上で語る積で御座います。昔基督の名に依つて働いて居て、弟子達にそれを禁せられた人の事を考へて御覽なさいませ。あの時基督は「その人を止むる勿れ」と仰せられました。私共は弟子達の言葉に従ふべきで御座いませうか、基督の御言葉に従ふべきで御座いませうか？」

「左様、その福音書の中に出て居る人に就いてお前の云ふ事は正しいけれども、併し人は基督の御真意の在る所を思ひ違へる事があるかも知れぬといふ事を忘れてはならないよ。」とドン・クレメンテは答へた。彼の心は全くこの様に云つたのではなかつたが、彼の心が語らんと欲する思慮深くない、訓練を経ない言葉は、彼の唇を越す事を許されなかつたのであつた。

ベネテットは言葉を續けた。

「御師匠様、畢竟するに、私が此處を追はれますのは、確に私が人々に福音を説いたからでは御座いませぬ。私は二つの事を貴方に申し上げて置かねばなりません。その中の一つは斯うで御座います。私がこのイエネへ参りましてから、その時一度限しか會つた事のない一人の人が、私に宣教師になる爲めに僧にならぬかと申しました。私はその様な働をせよとの神の御召を蒙つて居る様に思ひませんと答へました。それからもう一つの事は斯うで御座います。私がイエネへ参りまして間も無い頃で御座いましたが、教區の教師さんと宗教上の話をして居ります中に、私はカトリック教の教義の生命は永遠に續くべきものだといふことや、カトリック教の教義の精神が、絶えずその形體を變化させて、その力と美とを無限に増す能力を有つて居る事などを話しました。御師匠様、貴方はこの様な思想は誰から出て——貴方を通じて——私の心に来たのが、御存知で御座いませう。教師さんは私の言葉が氣に入つたのか、その通りを餘所で話されたのに相違御座いませぬ。その翌日教師さんは私に、スピアコでセルヴァ氏に會つた事があるか、又あの人の著書を読んだ事があるかと問はれました。教師さんは、自分はその人の著書を読んだ事はないが、あの人

の書いた物は避くべきものだといふ事は知つて居る、と云はれました。御師匠様、これで貴方はお解りになりましたでせう。私がこの様な風にイエネを出て行きますのは、セルヴァさんの爲めと、貴方がセルヴァさんと御入魂だといふ事の爲めで御座います。私は今貴方を愛して居ります程に貴方を愛した事はこれまでに御座いません。是から先、私は何處へ流れて行くか知れませんが、主が近い處か、遠い處か、何處へ私を遣し給ひましても、どうぞ貴方の魂が私をお見捨てなさるやうな事が御座いませぬ様に！」

悲と愛の情に聲顫はせて斯う云ひながら、ベネデットは再び師の肩に顔を押し當てた。彼を抱いたドン・クレメンテ自身も、種々の感情の嵐に胸を張裂かれる様に思つて、彼の宥怒を乞はうか、或は彼の前途に光榮が、眞の光榮が、彼を待つ事を彼に告げやうかと、心が定まらなかつたので、唯だ、呼吸するのも苦し氣に、

「お前には解らぬが、私も亦お前の魂が私を見捨て、呉れては困るのだよ！」と云ふより他に言葉が無かつた。

ドン・クレメンテは弟子が脱いだ法衣を恭しく手に取り上げて、叮嚀に疊んだ。疊み終

つてから彼は、ベネデットをサンタ・スコラスティカへ引取る事は出来ぬから、セルヴァ氏に彼の世話を頼まうかとも一時は思つたが、その様に公然にチヨヴァニ氏の保護を受ける事は、ベネデットに取つて便宜であらうか、又その使命を果たす上に於て利益であらうか、今になつて如何も疑はしく思ふと云つた。

ベネデットは微笑を洩らした。

「左様で御座いますとも——私共は光を愛するより以上に闇を恐れて宜しう御座いませうか？併し私は出来るならば御意の在る所を私に教へ給はん事を神様に祈らねばなりません。神様は私がスピアコへ行く事を望み給ふかも知れません。或は左様で無いかも知れません。ではお氣の毒で御座いますが今何か食べる物と葡萄酒を少しと此處へ持つて來させて下さいませんか。それから私に會ひ度いと云つて居る人等を此處へお通し下さいませ。」

ドン・クレメンテはベネデットが葡萄酒を呉れよと云つたので心竊に驚に堪へなかつたが、その驚を面に現さなかつた。そして、セルヴァ夫婦と連れ立つて來た娘をも彼の所へ寄越さうと云つた。ベネデットは訝し氣に師の顔を見た。彼は先刻教會堂の中で見受け

た娘が、それよりも前に、彼と會談したいと云つた時に、ドン・クレメンテが、油断するなと暗々裏に彼に警告するかのやうに、彼の腕を締めた事を想ひ起した。ドン・クレメンテは今顔を眞紅に染めながら、あの行動の理由を説明した。彼は以前にサンタ・スコラスティカであの娘がもう一人他の人と連れ立つて居たのに遇つた事がある。先刻腕を締めたのは我知らず爲た事である。あの娘と連れ立つて居た人は今遠くに居る。

「私はお前の所へ食物を持たして寄越して、それからあの人達に左様云つて置いてから、直寺へ歸らねばならぬから、もう是きりで會はないよ。」

此後スピアコへ行くか或は何處か他所へ行くかといふ事に就いて、ベネデットが今し方如何にも意味あり氣な調子で「左様かも知れませんが、或はさうでないかも知れませんが」と云つた事を思つて、ドン・クレメンテは訣別を告げる際に低聲で尋ねて見た。

「お前は羅馬へ行く積かね？」

ベネデットは返事をせずに、一度彼に與へられて其後取り返された粗末な法衣の包を辭に師の手から取つて、戦く手でそれを口の所まで揚げて、それに唇を押し當てた儘、永い間熟として居た。

之は平和と勞働と祈禱と福音の言葉とに過ごした日を追懐する悲か？行手に輝く樂しき時の豫想か？

遂に彼は包を師の手に返した。

「では御機嫌よくお暮しなさいませー！」

ドン・クレメンテは急いで其處を立ち去つた。

この家の主人がベネデットに貸して呉れた室には、大なる長椅子が一脚と、黄味掛つた地に藍色の花模様のがたくつてある布を掛けた小なる四角なテーブルと、ぐらぐらする椅子が數脚と、古くなつて色の褪めた、革の裂目から填充物が見える肘掛椅子一二脚と、汚れた額縁に這入つた、鬘を冠つた先祖の肖像畫が二枚あつた。窓は二つあつたが、その中の一つは鼠色の壁に殆ど光線を遮られて居た。もう一つの方からは畑と美しい静な丘と空とが見えた。ベネデットは面會人を迎へる前に、畑と、丘と、みすばらしい村その物とに名残を惜む爲めに、この窓に近付いたが、不意に疲勞を覺えたので、窓の闌に身を寄せた。これは、稽な、快い疲勞であつた。彼は自分の身體の重量を殆ど感じなかつた。そして彼の心には神祕な

祝福が漲り溢れた。纏て彼の思が當所も無く彷徨ひ始めるに連れて、彼は静な、罪の爲い外界の生命——屋根から落ちる雨垂、丘陵の香を孕んで今此處で意味あり氣に動く空氣——を感知して、心を動かされ始めた。彼の青年時代の遠い時の記憶、彼が未だ獨身で、結婚の事など更に念頭に無かつた頃の記憶が、今彼の心に還つて來た。彼は上部ヴァルソルダのピア・ビスカニオの頂で會つた、あの雷雨の終を想ひ起した。若し彼の兩親がもう三十年、いやもう二十年でも、生きて居て呉れたならば、彼の運命はどんなに異つたものになつたらう！兩親の中一人だけでも！彼は心の眼を以てオリアの墓地に在る

神の中に在るフランコに

彼のルイサ建之

と彫り付けた墓石を見た。そして彼の眼に涙が一杯溜つた。此時、彼の理性のこの弱い倦怠、この疲勞の誘惑に對する彼の意志の猛烈な反動が起つた。

「いや、いや、いや！」

と彼は半ば聞える位に呟いた。すると彼の背後で誰かの聲が之に應へた。

「貴方は僕等の話す事を聞くのを好まれないのですか？」

ベネデットーが驚いて振り返ると、其處に三人の青年が立つて居た。彼には彼等の這入つて來る足音が聞えなかつたのであつた。三人の中最も年長者と思はれる丈の低い、色の淺黒い、多くの事に關する知識を頭に藏して居る事を表す眼を有つた、風采の好い青年がベネデットーに、何故法衣を脱いだのかと、憚る色も無く問うた。ベネデットーは答へなかつた。

「理由を話す事を好まれないのですね？ いや、別段承らなくとも構ひませんから、僕等の云ふ事をお聞き下さい。僕等は羅馬大學の學生で、信仰なんぞ極めて薄い人間です。この事を僕等は隠さずに始に告白して置きます。それから僕等は僕等の青春の時代を出来るだけ愉快に又最も有益に送りつゝあるのです。この事も亦始に告白して置きます。」

彼の友の一人が彼の上衣を引張つたけれども、彼は構はず饒舌り續けた。

「黙つて居給へ！尤も僕等の仲間にも、聖者なんぞを餘り信じちや居ませんが、大層潔い男が一人あります。併しその男は今此處には居ません。仲間の中で、その他にもまだ此處に居ない者が少しあります。その連中は宿屋でカルタをやつて居ます。今云ひましたその「潔い男」は、君等と一緒に行くのは嫌だ。僕は如何とかして獨で會ふと云つて、如何しても一緒に來ないのです。僕等は僕等が云ひました様な人間です。僕等は羅馬から此處へ見物に來

ましたので、都合が好くば奇蹟を目撃しやうと思つて居ましたのです。實際僕等は何か面白い目をする積でやつて来たのです！」

彼の友は「止せ止せ！」と云つて彼の言葉を遮つた。

「だつて本當の話ぢやないか？」と彼は中々敗けて居ぬ「面白い目をする積でやつて来たのです！僕は腹藏なく話すんですから、氣にお障へ下さらないやうに願ひます。いや本當に面白い目をする積で居つたから、すんでのことで酷い目に遇ふ所でした！先刻僕等が少し戯言を云つたら、奴等は僕等を殴り倒さうとしましたでせう。あれは皆貴方の名譽と光榮のお蔭です！その代に、貴方があの狂者の様な連中に向つてなすつた御演説を聞く事が出来ました。あの時僕等は思ひましたね、「之お振つてる！これお坊主や半坊主の口から出る言葉にしちや新式だ！これお誰よりも僕等に御詠向の聖者だ！」と。粗畧な口を利きまして濟みません！それで僕等は早速貴方に面會を願ふ事にしたのです。といふ譯は、僕等は孰かといへば懷疑的で、世俗的の快樂を好みはしますが、それでも多少智的で、或る宗教上の眞理に興味を感じて居るからなのです。僕なんぞは近い中に新佛教の信者になるかも知れません。」彼の友が之を聞いて笑つたので、彼は腹を立て、彼等の方を向いた。

「本當だぜ！僕は有難屋の佛教徒にはなりはしまいが、僕には基督教よりも佛教の方が面白いんだ！」

それから、この様に時と場合とを考へずに話を岐路に走らした事に就いて、三人の學生の間に口論が始まつたが、纏て第二の代表者として、丈の高い、瘦ぎすの、眼鏡を掛けた男が始めの男に代つた。この男は頭と腕子張つた前腕とを頻に痙攣的に動かしながら、神經質らしい様子で話した。その話の趣意は次のやうであつた。彼は屢彼の友とカトリック教の生命に就いて議論を戦はした。彼等は皆、カトリック教の生命は涸渇して居るから、根本的改革を斷行せなければ、如何しても目前に迫つて居るその死を避ける事が出来ないと思ふ確信して居る。彼等の中でその様な改革は實行し得べきものだと思ふ者もあり、然思はない者もある。彼等はベネテットの様な知識のある、現代的精神を有つたカトリック教徒の意見を聴く事を切望して居る。それで彼等はベネテットに質し度いと思ふ事を澤山有つて居る。

此時、今まで控へて居たもう一人の男が、今度は自分の順番が廻つて来たと思つて、混亂した質問の流をベネテットに注ぎ掛けた。

ベネテットは教會改革の戦士となる氣があるか？彼は法王と最高會議との無謬説を信

じて居るか？彼は處女マリヤと聖徒との崇拜の現今の形式を是認するか？彼は基督教民主主義者であるか？將來に於て行ひたいと思ふ改革に就いて彼は如何いふ意見を懷抱して居るか？彼等はこのイエネでチヨヴァニ・セルヴァを見掛けたが、ベネデットーは彼の著書を見た事があるか？彼は最高監督が徒歩で外出する事を禁じられて居る事や、僧侶が自轉車に乗る事を許されない事を是認するか？彼は聖書に就いて如何いふ意見を有つて居るか？聖書の筆者等が神の默示を蒙つて書いたといふ事に關して、彼は如何信じて居るか？

ベネデットーは答へるに先立つて、暫時の間この若い質問者の顔を嚴然として注視した。遂に彼は口を開いた。

「或る醫師がどんな病氣でも癒すといふ評判を得た事がありました。醫學といふものを信じない一人の男が、その醫師の技術や學問や所論を驗さうと思ふ好奇心に驅られて、彼の許へ行きました。醫師は暫時の間その男に思ふ様饒舌らせて置いてから、その手首を握りました——斯ういふ風に。」

ベネデットーは最初に話した青年の手首を握つて、言葉を續けた。

「彼はその手首を握つて、霎時黙つて居ましたが、臆てその男に申しました。「友よ、君

の心臓は病氣に罹つて居ます。私は始に君の顔色を見てそれと覺りましたが、今私には君の棺桶を拵へて居る大工の槌の音が聞えますぞ！」

ベネデットーに脈所を抑へられて居た青年はぎよつとして思はず後込みました。

「君の事ではありません。醫師が醫學を信用しない人にさう云つたのです。醫師は尙言葉を續けて云ひました。「君は健康と生命とを得る爲めに私の處へ來たのですか？それならば私はそれを二つとも貴方へ上げませう。若しその爲めに來なかつたのでなくば、私は貴方の相手をして居る隙がありません！」その男は、何時も自分は無病だと信じて居たのに、之を聞いて眞蒼になつて申しました。「先生、私は貴方に身體をお任せ申します、何卒生命を與へて下さい！」

三人の學生は呆氣に取られて霎時言葉が出なかつた。ベネデットーは彼等が漸く氣を取り直して彼に答へやうと思ふらしい様子を見て取つて、更に言葉を續けた。

「若し三人の盲人が私に眞理の燈を呉れよと云つたならば、私は何と答へませうか！先づ斯う答へませう。「それよりも前に、その燈を受ける爲めに貴方等の眼の準備をして來なさい。今それを貴方等の手に渡した所で、貴方等はそれから光を受ける事も出來ず、唯だその

燈を壊して仕舞ふ許でせう」と。

すると、丈の高い、瘦ぎすの、眼鏡を掛けた學生が之に答へた。

「貴方の眞理の燈を見る爲めに太陽の光を室へ入れないやうにする必要はありますまい。けれども、貴方は僕等を新聞の探訪員だと思つて居られるから、それで貴方の信仰を僕等に語る事を喜ばれないのだといふ事はよく解つて居ります。今日僕等は——勤くとも僕は——貴方の御希望通りの心持を有つて居りません。僕は盲目かも知れませんが、僕は法王に頼んで光を貰はうといふ氣になりません。又ルーテルのやうな男に頼む氣もありません。併し、羅馬には僕や僕等なごよりも善い心を有つた青年が居ます。羅馬へ来てお教へ下さい。僕等にもお説を聞かせて下さい！今日は僕等は唯だ好奇心を有つて居るばかりですが、明日になれば如何でせう？——或は適當な氣分になるかも知れんではありませんか？羅馬へいらつしやい——」

「君のお名前を承つて置ませう。」

とベネデットが云つた。

別の男が名刺を差し出した。それには「エリア・ヴネテルホ」とあつた。ベネデットは

訝し氣に彼の顔を見た。

「左様です。僕は猶太人です。けれども、この二人だつて、洗禮こそ受けて居りますが、極めて怪しい基督者で、僕と全く同様です。その上僕は宗教上の偏見なんぞちつとも有つて居ません。」

會見はこれで終つた。室を出て行きがけに、一行の中の一番若い男、先刻質問の流をベネデットに浴せ掛けた男が、最後の襲撃を試みた。

「貴方はカトリック教徒が政治問題に關して投票するのはよいと思ひですか？せめてこれだけでも答へて下さい。」

ベネデットは黙つて居た。

「この質問にも答へて下さらないのですか？」

と青年は答を促した。

ベネデットは微笑を洩した。

「お答へしない方が勝手です。」

次の間に発音がして、扉を二度軽く叩く音が聞えた。そしてセルヴァ夫婦がノエミと一緒に這入つて来た。マリア・セルヴァは真先に這入つたが、ベネデットーの變つた装を見て、憤と遺憾の念を舉動に現す事と、低い笑聲を抑へる事が出来なかつた。それから彼女は顔を赤めて、彼に何故法衣を脱いだのかといふ意味の事を何か云はうと思つたけれども、適當な言葉が即座に口に出なかつた。ノエミの眼には涙が浮んだ。暫時の間四人とも黙然として居たが、互の胸の中は無言の裡によく解つた。纏てチヨヴァニは低い聲で。

「心の覆面布を彼女遂に棄てざりき。」

とダンテの天國篇第三章の一句を唱へながら、不恰好な着物を着て居ても尙彼には尊く見える者の手を握り締めた。

「でも貴方、こんな物をお召し遊ばすな！」

と夫ほどに神秘的でないマリアは叫んだ。

ベネデットーは「その様な事は話さずに置ませう」といふ様な身振をして、渴仰と尊敬とに充ちた眼を以て、彼の師のまた師の顔を見た。

「貴方は如何ほどの真理と、如何ほどの利益とを貴方が私にお與へ下さいましたか、お

お解りで御座いますか？」

チヨヴァニは自分がドン・クレメンテを通してこの男に如何に深い感化を與へたかを知らなかつたから、定めて彼が自分の著書を読んだのであらうと思つた。そして彼は心を動かされて、自分が一人の靈魂に幾分かの眞の利益を與へる事が出来たといふ事を、斯く靜に自分に示し給ふ神に心密に感謝した。ベネデットーは尙言葉を續けた。

「若し私がお宅の畑で働く事が出来まして、時々貴方にお目にかゝつてお話を承る事が出来ましたら、どんなに幸で御座いましたでせう！」

ノエミは言葉に表す事が出来ない記憶に充ちたあの晩の事を想ひ起して、思はず低い叫聲を洩した。チヨヴァニはベネデットーが今夜イエネを立ち去る積で居るとドン・クレメンテに聞いて居たから、この機會を利用して、彼に自分の家へ來ぬか、ベネデットーの希望次第で、彼がノエミとの話を済ませてから、四人一緒に出掛けてもよいではないかと云つた。ノエミは蒼白い顔をして、返事如何にと待ちながら、この時始めてベネデットーの顔を熟と見た。「有難う御座います。若し私がお宅の門を叩きましたら、其時には何卒戸をお開け下さい。唯今の所では是以上に何とも申し上げられません。」

とベネデットーは云つた。

チヨヴァニ夫婦は室を出て行かうとした。ベネデットーは彼等に止らん事を乞うた。屹度嬢様は貴方がたにお隠しなさらねばならぬやうな秘密をお有ちではありますまい。縦しお兄様には秘めて置かねばならぬにしても、尠くともお姉様にはお隠しなさることはありますまい。このマリアに向けた間接の愁訴も、ノエミが、この秘密は自分の秘密ではない、ごもちもちしながら云つた爲めに、何等の効をも奏さなかつた。そしてセルヴァ夫婦は退出して仕舞つた。

ベネデットーは立つた儘で居た。そしてノエミにも椅子に掛けよと勸めなかつた。彼はジアンが今自分の前に立つて居るのだと知つて、彼女が何事を云はんとするかを豫想した。それはジアンからの傳言に定まつて居る。

「嬢様？」

彼の様子は慇懃を缺いて居なかつたけれども、「早く云ふだけの事を云つて済ませて下さる方が結構です」と明に語つて居た。

ノエミはそれと覺つた。若し誰か他の者がこの様な様子をしたならば、彼女は腹を立てた

であらうが、ベネデットーがしたのであるから彼女は腹が立たなかつた。彼の前に出ると彼女は何となく自分が卑しい者だといふ様な氣がした。

「妾は貴方が大層御懇意で、また大層お愛しなすつていらつしやいました或る方の事に就きまして、貴方が何かお聞きになりましたか如何か、貴方に伺つて呉れると或る人に頼まれましたので御座います。妾は伊太利人では御座いませんで、その方のお名前を本當に發音する事が出来ますか如何か判りませんが、ドン・チウセツペ・フロレスさんといふ方で御座います。」

ベネデットーはびくりとした。この様な事を云はれるとは實に意外であつた。

「いえ！私は何も存知ません。」

と彼は氣遣はし相に答へた。

ノエミは霎時黙つて彼の顔を見詰めた。彼女は言葉を續ける前に、彼女が將に彼の心に苦痛を與へんとする事に就いて豫め彼の宥恕を乞ひ度く思つた。聽て彼女は悲し氣に低い聲で云つた。

「或る人が妾に手紙を寄越しまして、その方は最早この世に居られませんと貴方に申し

上げて呉れろと申しました。」

ベネデットは頭を垂れて、両手で顔を隠した。噫、ドン・チウセツペ、懐しいドン・チウセツペ、懐しい、立派な、清浄な靈魂、懐しい、朗な額、神に充ちた懐しい眼、懐しい優しい聲！ノエミの眼には付かなかつたが、二滴の涙が静に湧いた。其時彼は心の中にドン・チウセツペの聲を聞いた。「お前は私が此處に居る事、私がお前と共に居る事、私がお前の心の中に居る事を感じぬか？」と。

永い間二人とも黙して居たが、遂にノエミが低い聲で云つた。

「誠に済みません！貴方にこんなに御苦痛を與へねばなりませんでした事は實に残念に存じます。」

「苦痛であつて、又苦痛ではありません。」

とベネデットは頭を上げて答へた。

ノエミは恭しく沈黙を守つて居た。ベネデットはその人が何時この世を去つたのか知つて居るか？ノエミに問うた。

四月の末頃だつたと思ふ。その頃ノエミは伊太利に居なかつた。彼女は或る友と白耳義のフ

ルウヂュに居た。其時その友の所へ通知があつたのである。彼女がその友に聞いた所によると、その人は——ノエミはベネデットの胸の中を深く酌量つてその名前を口にする事を控へた——その人は大層聖い死方をした相である。彼女はまたその人の書類はその市の監督に委託せられたといふ事をも話して呉れよと頼まれた。

ベネデットは之を聞いて満足の意を表す身振をした。その身振はまた、この會見を閉ぢやうといふ意味を表して居るやうにも取れた。けれどもノエミは動かなかつた。

「未だ申し上げねばならぬ事が御座います。」

と云つて、それから彼女は急いで言葉を續けた。

「妾に一人カトリック教徒の友達が御座いますが——妾はカトリック教徒では御座いません。新教徒で御座います——その人は神様を信じる信仰を失ひました。その人は慈善事業に身を委ねるやうに人から勧められましたのですが、一緒に居なさる弟さんは宗教といふ宗教はこれにも反對なので御座いますから、御自分の姉さんが今までとは行を變へて、慈善事業の爲めに奔走したり、宗教上の主義によつて善い事業を助ける人々と交際したりなさる事を大層厭にお思ひなされるので御座います。唯今その弟さんは病氣で居なさいますの

で、無暗と腹を立てたり、興奮したり、慈善家を偏寵な迷信家だと云つたりしなされるので御座います。そして姉さんに貧民を訪問したり、若い娘を保護したり、棄兒の世話をしたりするな。そんな事は坊さんのする事だ。空想家のする仕事だ。この世界は自分勝手にぐるぐる回つて行くのだから、勝手にぐるぐる回らせて置かねばいけない。そんなに下等社會の者と近しくする事は、唯ださういふ人々の頭の間違つた危険な思想を注ぎ込むだけで何の役にも立たない、と云ひなされるので御座います。それで、妻の友達は、弟さんと別れて仕舞ふか、今まで公然として居た事を是からは内密で爲て、弟さんに嘘を吐いて置くか、孰かしなければなりません。確な相談相手が如何しても入るので御座います！で、その人は、妾に手紙を寄越しまして、貴方に如何すればよいか伺つて呉れろと申して参りました。その人は貴方がこの邊で澤山の人を助けていらつしやる事を新聞で見ましたので、貴方が厭だとは仰有るまいと思つて居るので御座います。」

ベネデットーは答へた。

「その弟さんが肉體も精神も病氣に罹つて居なされるのならば、その人は自分の家の中で慈善の仕事が出来るではありませんか？ 弟さんに對して姉らしくない姉になつて、それで

神様を知る事が出来ませうか？ その人は今までの慈善事業を止めて全く弟さんの爲めに盡しなさらねばなりません。出来るだけの愛情を以て弟さんの身體の病と精神上的の病とに氣を付けて介抱して」——彼は「その人が私を愛して居る愛情の凡てを以て」と云ひかけたのであつたが、左様云つては自分がその人を直接に知つて居ると明言するやうなものであるから、今の様に云つたのであつた。——「弟さんに片時の間も無くてはならぬ者だと思はれる様にして、漸々に、説教なんぞせずに、唯だ親切といふものだけを以て、弟さんを感化しなければなりません。この様に眞の親切、活動的な、倦まない、辛抱強い、分別のある親切の化身とならうと努める事は、その人自身にも大なる利益を與へます。斯ういふ風にしたならば、その人は無言の中に段々と弟さんを感化しなされるに定まつて居ます。弟さんはその人がする事は皆善いと思ふ様になるに定まつて居ます。左様なつてからまた慈善事業を始めればよいのです。獨で始めたらいのです。其時には今よりもつと好い結果を見る事が出来ませう。今ではその人は他人から左様しろと云はれたから爲て居なされるのでせう。そして多分餘り好い結果が上らないでせう。けれどもその時には、弟さんの爲めに盡したのが習慣となつて、自然と親切な行をするやうになりませう。そして今よりも立派な成功を見る

事が出来ませう。」

「どうも有難う御座います！ 妾はその友達に代りましてお禮を申します。又妾自身からもお禮を申します。貴方のお言葉は妾に取りましても本當に結構で御座いました。ですが、この御忠告を、この御奨励のお言葉を、貴方からだと云つてその友達に傳へましても宜しう御座いますか？」

この奨励と忠告とはその友の求に應じて直接ベネテットの口から出たのであるから、今の様な間は不必要と思はれたが、併しベネテットは確と當惑した。ノエミがジァンの爲めに彼に求めた所は、彼女が彼の明白な傳言を帯びて行く事であつた。

「私は何者です？ 私にどんな權威があります？ 私は祈りますとその人にお云ひなさい！」
ノエミの心は震うて居た。今彼に宗教上の話をしかけやうと思へば、實に容易く話せるのだが！ けれども彼女は口を得開かなかつた。噫！ 併しこの様な好機會を見す見す失ふとは！ 左様だ、如何しても話さねば氣が済まぬ。とは云ひながら、どの様な事を云つたものだらうと、緩々思案して居る隙はない。で、彼女は一番始めに頭に浮んだ事を云つた。

「大變失禮で御座いますが、唯今祈ると仰有りました序に伺ひ度いと存じますが、貴方は

本當に 妾の姉婿の宗教上の意見と皆善いとお思ひなさいませうか？」

彼女はこの質問を發すると直、實に差出がましい、下手な事を云つたと思つて耻かしかつた。それで彼女はそれよりも一層愚な事を云つて居ると自分にも解つて居ながら尙如何しても云はねばならぬやうな氣がしたので、急いで次の様に云ひ足した。

「姉婿はカトリック教徒で御座いますし、妾は新教徒で御座いますから、妾は如何いふ事を信じれば宜しう御座いますのか知り度う御座いますので。」

「嬢様、凡ての者が山の頂で靈と眞とを以て父を拜する日が何時かは参りますが、今日では深い谷から、影と象徴とに宿る父を拜するのが一番宜しう御座います。その靈と眞の方を向いて色々の高さまで登る事が出来る者も澤山ありますが、又多くの者は登る事が出来ません。植物の中には或る高さよりも上へ植ゑれば實を結ばないものがあります。その様な木を構はず益々上へ持つて行つたならば、遂には枯れて仕舞ひます。その木に適した土地からその木を他所へ移すなどは愚な事で御座います。私は貴方をよく存じませんから、お姉婿さんの宗教上の御意見を準備も無く貴女の衷に植ゑたならば、善い實を結ぶか如何かは何とも申し上げられません。併し私は貴女にセルヴァさんの助を借りてカトリック教を深く御

研究なさる事をお勧め申します。忠實な新教徒でカトリック教を満足に解して居る者は一人も御座いませんから。」

「貴方はスピアコへいらつしやらないので御座いますか？」

「ノエミは怖々尋ねた。」

隠れた憂愁の調子が彼女の聲の中に響いて、ベネテットの心の中に、快い苦痛の念を呼び醒ました。その念は今迄に感じた事の無い新しいものであつたから、直に恐怖と變じた。

「いゝえ、参りますまいと思ひます。」

ノエミはそれは残念だと云ひ度くも思ひ、又云ひ度く無くも思つた。彼女は何か意味の解らぬ言葉を云つた。

次の間に誰かの発音がした。ノエミは頭を下げた。ベネテットも辭儀をして之に應へた。斯くて改めて訣別を告げる事もなくこの會見は終つた。

公爵夫人も大層ベネテットと語り度く思つて居た。彼女は一緒に來た數人の男女を俱して這入つて來た。最早若い時代を過ぎたのに上々した氣が未だ沈着かず。迷信と懷疑とを半

半に有ち、自己中心であるが無情ではないこの公爵夫人は、彼女の馬車の御者をして居る老人の娘の肺病患者を深く愛して居た。彼女はイエネの聖者とその奇蹟との噂を聞いたので、半分は慰の積、半分は好奇心を満足させる積で、この旅行を企てたのであつた。そして彼女は聖者に羅馬へ來て貰ふ方がよいか、それとも肺病の娘をイエネへ遣る方がよいか、確め度いと思つて居た。是よりも前、彼女は從兄の或る最高監督の家で、今イエネに逗留して居る僧の中の一人と知合になつた。その僧が今日イエネで彼女に遇つて、自分は聖者を如何思つて居るかを話し、又聖者の名望が地に墜ちた事を吹聴した。併し公爵夫人は僧侶といふものを一向信用しないし、また大層ロウマンティックな過去を有つて居ると噂せられて居る男に會ひ度いといふ氣があつたし、其上に彼女の同行者——就中或る婦人——が彼女と同じ好奇心を有つて居たから、彼女は如何しても是非とも彼に近づく手段を見付けやうと決心したのであつた。

彼女の一行の中に一人の年配の英國婦人が居た。その女の財産と、一風變つた服装と、接神家風の基督教神祕説とは、有名なものであつた。そして彼女は法王と、この友達を嘲る公爵夫人とを、形而上學的に戀うて居た。是等の人々はベネテットの妙な服装を見て、互に

顔を見合はせて微笑んだが、その微笑は危くすく笑となる位であつた。すると例の年配の英國婦人は逸早く友達の先驅をして、自彼等の代表者となつた。彼女は拙い佛蘭西語で次の様な事を云つた。自分は今教育ある人に話して居るといふ事を知つて居る。自分は世界各國の男女の友人と共に、カトリック教の教義の中で實際全く理窟に合はない、今後に於てもまだ役に立つとは誰も正直に信じない二三の點、譬へば教役者の獨身生活だとか、地獄に關する教義だとかを改良して、法王の管下に凡ての基督教會を併合する爲めに盡力して居る。この様な改革を成就する所の聖者が一人欲しい。ベネテットーがその聖者になるのである。その事は或る靈（自分自身は交靈術をやらぬが、或る友人がやる）、アラヴァットスキー伯爵夫人の靈の默示があつたから確である。それ故どうしてもベネテットーに羅馬へ来て貰はねばならぬ。又羅馬へ来れば彼は彼のその聖徳によつて、今此處に居るチヴネテラ公爵夫人にも一臂の力を貸す事が出来やう。

「私共は本當に貴方をお待ち申して居ります！こんな穢い穴のやうな所を出てお仕舞ひ遊ばせ！早く出てお仕舞ひ遊ばせ！早く！早く！早く！」

彼女の演説はこれで終つた。ベネテットーは峻厳い眼で、公爵夫人の片眼鏡から新聞記者

の片眼鏡まで、嘲笑を含んだ顔や惘然した顔の環を一亘すつと見廻した。

「一寸失禮！」

と云ひ棄て、彼はその室を出た。

彼は室をも家をも出た。身に合はぬ着物を着て不恰好に歩きながら四辻を横切つて、衰弱した身體の方よりも寧ろ精神の方に促されつゝ、脇目も振らずに坂を下りて行く道を辿つた。彼は今夜を何處かの樹蔭で過ごして、明朝スピアコへ行き、スピアコからドン・クレメンテの助力を借りてテイヴォリへ行つて時々サンダ・スコラスティカへ来る知合の深切な老僧の許に寄寓する積であつた。セルヴァ夫婦が招いて呉れた事は實に願つても無い幸であるが、彼にはもうその好意を受ける考がなかつた。彼の心は清淨で何の疚しい所もないけれども、先刻のあの若い外國婦人の美しい聲と、「貴方はスピアコへいらつしやらないので御座いますか？」と云つた時の悲しさうな調子が、彼の胸の中に怪しい反響を起した事と、あの一瞬時に、「若しジャンがこの娘の様だったら、私は彼女を棄てはしなかつたらうに！」といふ考が彼の心を閃き過ぎた事とを、彼は忘れ得なかつた。成程神祕家の教へる通り、

苦行と斷食は何の役にも立たなかつた。併し今はその様な考は既に消え失せた。彼の心には唯だ、假令過去に於て激しい試練に打ち勝つた事があつても、また思はぬ時に現れるかも知れず、そして僅な事に遇つて一溜もなく敗れるかも知れぬ人間固有の弱點を、耻ぢる念のみが残つて居た。小な村には人の影が見えなかつた。嵐が歌むのを待つて、トレヴ井やフ井レツチノやヴァレビエトラから来た人々は、あの娘は癒されたといふがどうも疑はしいといふ事、もう一人の病人が癒されなかつた事、あの人民を腐敗させる似而非カトリック信者に惑はされるなどいふ警告が誰の手からとも知れず迅速に人々の間に傳かれたといふ事など、今朝あつた出来事を語り合ひながら家途に就いた。ベネデットーが村を出て行く姿を二三人のイエネの女が見た。彼等は彼が俗服を着て居るのを見て大層驚いたが、多分彼が教會から放逐せられたのであらうと察したから、皆黙つて彼を見送つた。村を離れて五六歩行つた時に、誰か背後から驅けて來て彼に追ひ付いた。見ると賢さうな青い眼を有つた、瘦形の美しい青年であつた。

「マイロニ先生、貴方は羅馬へお出でなさいますか？」

ベネデットーは自分の本名が如何してかは知らぬが、斯く人に知れて居ることを快から

ず思つた。

「どうかその名前で私を呼ばないやうにして下さい！私は羅馬へ行きますか未だ判りません。」

「私は貴方に隨つて参ります！」

こそその青年は感情に激したやうな聲で云つた。

「私に隨つて行く？如何いふ譯で貴方は私に隨つて行くて云ふのですか？」

青年はベネデットーの手を執つて、彼が然させまいとするのも構はず、その手を自分の唇に當てた。

「如何いふ譯でと仰有いますか？私は世の中が厭になりまして、そして神を見出す事が出来ませんでした、今日、貴方を通して、私は幸福の中に生れ出たやうに思ひます！どうぞ、何卒、貴方のお供をさせて下さい！」

「愛する者よ、私は何處へ行くのか自分にも判りません！」

とベネデットーは甚く心を動かされて答へた。

青年はベネデットーに、せめて何時また會へるかといふ事だけでも云つて呉れよと乞うた

が、ベネテットーが眞實返答に苦しむ様を見て、彼は叫んだ。

「いや、また羅馬でお目にかゝりませう！ 貴方は屹度羅馬へお出でなさいませう！」

ベネテットーは微笑んだ。

「羅馬で！ 羅馬で私の居所が如何して判りますか？」

青年はベネテットーが羅馬へ行けば屹度大評判になるから、誰でも彼の居所を知るやうになるに違ひないと答へた。

「神の御意ならば！」

とベネテットーは情愛の籠つた身振を以て訣別を告げる意を表しながら云つた。

青年は彼の手を捕へて、霎時彼を止めた。

「私もロムバルデーの者で、ミラノのアルベルテイと申す者で御座います。どうぞお忘れ下さいませう！」

彼はベネテットーの姿が驛馬徑に隨つて曲つて見えなくなるまで、熱心に後見送つて居た。

丘の頂に大な腕を擴げて立つて居る十字架を見た時に、ベネテットーは急に感極まつて

身が震ふので、立ち停らねばならなかつた。暫時して歩を續けると、眩暈がして歩けなかつた。それで道を行く人の邪魔にならないやうに、躊躇しながら一二間脇へ寄つて、野原の窪んだ處の草の上に倒れた。それから眼を閉ちて熟として居たが、これは單に一時氣分が悪くなつた位の事ではなく、何かもつと遙に重大な事だと覺つた。彼は全く感覺を失ひはしなかつたが、聽覺と、觸覺と、記憶と、時との觀念を失つて仕舞つた。

彼は我に還つてから暫時は、例の法衣とは異つた、がさがさした布が手の甲に觸る心地を不思議に思つて、之が元の儘の自分なのであらうかと心配するよりも寧ろ可笑しく感じた。

彼は胸の邊を探つて卸や卸穴に觸つたけれども、未だ合點が行かなかつた。彼は熟考へ込んだ。イエネの村の小供が一人この邊を通りかゝつたが、彼の姿を見て驚いて驅けて歸つて、聖者が十字架の近くの草の上に倒れて死んで居ると、大聲を揚げて村中に知らせた。

睡眠中と目が覺めた當座とに吾人を支配する朦朧と曇つた理性の力を以て、ベネテットーは考へてみた。——これは自分の衣服ではない。これはピエロ・マイロニの着物である。自分は今も尙ピエロ・マイロニである——斯う思つた時にぎよつとしたので、全然氣が付いた。彼は身を起して坐つて、自分の姿と、夕暮の影に包まれた周囲の野や丘陵を見廻はした。か

の大な十字架に眼が留つた時に、彼の心の騒は静まつた。彼は気分が悪かつた、非常に気分が悪かつた。立ち上らうと思つたが、中々容易には立てなかつた。驢馬徑の方へ足を運ばせながら、彼はこの様な有様で如何したらよからうかと自問うた。誰かイエネの方から足早に此方へ下りて来た者があつて、彼の前で止つた。「あらまあ！ 貴方で御座いますか！」と叫ぶ聲が聞えた。ベネデットはこれは今日あの烈しい雨風の最中に彼に向つて熱情に溢れて話しかけた女の聲であると知つた。イエネの村で先程の子供の報知を聞いた者は澤山あつたが、この女唯一人が彼の處へ急いで来たのであつた。他の者等は小供の言葉を信じなかつたのか、それとも、信じ度くなかつたのであらう。この女は聖者が死んで居ると聞いて、悲しさの餘氣が狂はんばかりになつて駆け付けたのであつたが、今不意に立ち止つて、彼から二歩とは離れの所に、物をも言はずに立つた。彼は女が自分の爲めに態々来て呉れたのだとは思はなかつたから、挨拶の言葉を後に残して歩を續けた。女は小供の話が眞實でなかつたのを一時は嬉しく思つたけれども、彼が實に苦し相に歩く様子を見て胸が塞がる様に感じたので、彼の挨拶に答へなかつた。そして彼の背後から隨いて行く事も得しなかつた。彼女は彼が足を止めて、驢馬に跨つて此方へ登つて来る一人の男に話すのを見て、何を云つて居る

のか聞かうと思つて、その方へ驅せ寄つた。今登つて来た男は、セルヴァ夫婦の命を受けてベネデットを捜しに来た馬子であつた。セルヴァの一行は、飯を下りて行く中にベネデットに追ひ付くであらうと思つて、女等を二頭の驢馬に乗せて、彼が出てから間もなくイエネの村を出發したのであつたが、アニオ川の岸に着くまで彼の姿が眼に付かなかつたので、彼等はスピアコから来た通り掛りの人に尋ねてみた。所がその男もベネデットに遇はなかつたと云つた。で、ノエミはテイヴォリ行の終列車に乗る筈であつたから、失望の色を隠して、チヨヴァニと一緒に先に行つた。この馬子はベネデットを捜しに、またその序に宿屋に忘れて置いた日傘を取りに、遣はされたので、マリヤはその歸をインフェルニロの洞の岩の間で待つて居る——少し離れて立つて居た若い女教師は、ベネデットが後生だからイエネから水を少し持つて来て呉れよと馬子に頼むのを聞いた。そして二人がまだ何か話して居る中に、彼女は後を聴かずに一散に驅けて行つた。

ベネデットは馬子と手短に相談した上で、セルヴァ夫人が待つて居る所まで驢馬に乗つて下りる事に同意した。彼は唯一人十字架の近くに坐つて、馬子が水と日傘を持つて引き返して来るのを待つた。新月はアルテナツツオの丘陵の上に上らんとして、晴れた空を明くし

た。今宵は暖で、そよこの風も無かつた。ベネデットは顛覆の所がざくざくして熱があるのを感じた。彼の呼吸は速くて短かつた。けれども彼は少しも苦痛を感じなかつた。野に茂る馨しい草も、此處彼處に立つ樹木も、大なる暗い丘陵も、彼の心には皆生きて、宗教に充ち満ちて居るやうに思はれた。凡てが神秘的な敬虔な愛に満ちて、かの弦月をさへ眞珠色の空に響ゆる高い丘陵の方に傾かしめるかのやうに感せられた程麗しく見えた。この儘罪に汚れぬ自然の事物と心を合はせて祈りながら、暮れて行く日と共に世を去るならば如何に楽しい事であらうと、ドン・チウセツペ・フロレスが彼の心の中で囁いた。

イエネの方から此方に急いで来る蹻音が聞えた。其蹻音は彼から少し離れた處で止つた。小さな女の兒が一人ベネデットに近付いて、コップと水の這入つた罎とを怖々彼に手渡すと、其儘引き返して逃げて行つた。ベネデットは驚いて彼女を呼び止めた。彼女は羞澁みながら徐々返つて來たが、自分の名を問はれても、親の名を問はれても、何とも答へなかつた。「その兒は宿屋の娘さんで御座います。」

と一人の聲がした。ベネデットはその聲の主の誰だかを知つた。そして月の光が弱かつたけれども、その人の顔をも認め得た。その女は、夕暮に淋しい處で若い女の身が連も無しに立つて、敢て近付かなかつたのであつた。

「どうも有難う。」

と彼は云つた。

女は小供の手を引きながら少し近寄つて、低い聲で彼に尋ねた。

「貴方はあの坊さん達が死んだ病人の母親に會つて話して居た事を御存知で御座いますか？」

母親は貴方が息子を殺しなすつたのだと云つて居る事を御存知で御座いますか？」

「貴方は何故私にそんな事をお話しなされるのですか？」

とベネデットは少し鋭い調子で答へた。

女は用も無い事を云た爲に彼に氣を悪くさせたといふ事に氣が付いたので、大變辛く思つた。

「噫！堪忍して下さいませ！」

暫時して彼女は又云つた。

「貴方に一つお尋ね申したい事が御座いますが——」

「何ですか、云つて御覽なさい。」

「貴方はもうイエネへは決してお歸りなさいませんか？」

「決して歸りません。」

女は黙つて居た。此方へ近付く響音が遠くに聞えた。それは馬子と驃馬との響音であつた。女は聲の調子を低うして云つた。

「お願ひで御座いますから、もう一言仰つて下さいませ！ 貴方は來世の生活を如何いふ風に想像していらつしやいますか？ 私共はこの世の中で知つて居た人達に來世で遇ふと貴方は信じてお出でなさいますか？」

月の光がこの様に弱くなかつたなら、ベネテットーは大な涙が二つその若い女の顔を傳つて流れるのを見たであらう。

「我々の住むこの地球が滅亡するまでは、我々の來世の生活はこの地球の上で努力の生涯を送るので、真理と合一とを求めて向上しやうとする靈魂は皆此處に集つて、共に努力するのであらうと、私は信じて居ます。」

馬子の鋏底の靴の小石の中で軋る音が間近まで來た。

「左様なら、御機嫌よく！」

と女が云つた。女の今の聲は涙で潤んで居た。ベネテットーは之に答へた。

「左様なら！」

驃馬に跨つて彼は暗い谷間へ下りて行く。彼の身體は熱で燃えて居るやうな心地がする。

彼は一度は行くまいと思つたが矢張セルヴァの住居へ行くのである。馬子の話によればノエは今宵出發する相であるから、彼處で彼女に遇はない事は判つて居るが、彼女が居やうか居やうまいが今はもう如何なつてもよい。彼は彼女を恐れては居ない、先刻優しい感情の動くのを覺えたあの時の事をさへ早忘れて居る。それとは別の興奮した思が彼の魂の中に騒ぎ立つて居る。ドン・クレメンテの言葉、青年アルベルティの言葉、年配の英國婦人の言葉などが頭の中にくるぐる渦巻いて居る。そして例の幻の断片が繪のやうに心眼の前を閃き過ぎる。左様だ、是からセルヴァの住居へ行く。が、彼處に居るのも暫時の間である。彼が坂を下りて行くに連れて、深い谷間からアニオ川の強大な聲が益々高く怒號する――

「羅馬へ！ 羅馬へ！ 羅馬へ！」

第六章 三通の手紙

ジアンよりノエミに

七月四日ヴェナ・テイ・フォンテ・アルタにて

鉛筆で書いて堪忍して下さいよ。妾は今ホテルから三十分程かゝつて來られる場所の、羊の群が水を飲みに来る石の水溜の縁に腰を掛けながら、貴女の御手紙をまた読み直したところですよ。小さな木の管からちよろちよろ水溜の中へ流れ込む細い一筋の水、その優しい聲は、妾の胸を痛ませる或る事を、妾に想ひ起させます——野を通り、森を抜けて、狹霧の中をあの人と一緒に歩いた事、この、此處の泉の側で休んだ事、辛い言葉、幾年かの涙、何か水の中に書かれた事、嬉しかつた——最後の——一瞬間。妾が三年経つた今、またヴェナへ來たといふ事は、カルリノの爲めに大なる犠牲を拂つたのです。妾は何時でも、弟を愛して居たのですけれど、イエネからのあのお音信は、弟の爲めに之よりもっと大なる犠牲をも恐れないやうに妾をせうでせう。いくら盡しても報いられないとは知りながら、喜んでもっと大なる犠牲を拂ふやうに妾をせう。

妾には貴方の手紙が氣に入らないの。何故だか、その理由は何時かまた話させよう、今は止めます。此處では字が書き悪くつて、逆も駄目です。泉のすつと上の高所から霧が舞ひ下つて、寒い西風が吹いて居ます。妾はカルリノの爲めに身體を大事にしなければならぬ。これが又犠牲ですわ、妾は自分の健康が厭なんですから！

其後。

ノエミさん、封中の鉛筆で書いた半枚の紙を、何とかしてあの人の手に渡るやうにして下さいな。貴女は妾がごんなにあの人の言葉に従つて居るかを、あの人に話すのを躊躇していらつしやるが、せめては斯ういふ風にしてその事をあの人に知らせるのを手傳つて下さいな。貴女の手紙が妾には氣に入らないといふ一番の理由は、何時でも短過ぎるからですわ。妾がごんなにあの人の様子を聞き度がつて居るか、貴女は知つて居るでせう。あの人は今貴女と同じ家に世話になつて居るぢやありませんか？ スピアコでは、あの人は何も用事がなくつて屹度困つて居るでせう？ それに貴女は何も彼も二言三言の中に約めて仕舞ふんですもの、酷いわ！——あの人は追々快い方です。讀書を中々なさいませ。野菜畑で働いて居らつしやいます。この夏は私共と一緒に過ごさなされるかも知れません。書き物もしなさいませ。——た

つたこれつばかりでせう！さうして置いて、貴女はあの人が本當にどういふ病氣に罹つて居るのか、どんな物を讀むのか、若し貴女等と一緒に夏を過ごさない場合には何處へ行く積で居るのか、書き物つて手紙を書くのか書物を書くのか、貴女と話をする時には——貴女があの人と決して話をしないつて筈はないから——一體どんな事を話すのか。貴女は斯ういふ事はちつとも知らして呉れないぢやありませんか？あの人の事を可成話さない方が妾の爲めだなんて、例の逃口上はもうやめて下さい。それは貴女が發明しなかつた大變便利な逃口上だけれど、それは馬鹿氣てますわ。何故かといへば、貴女があの人の事を妾に話さうが話すまいが、全く同じ事なんですから。妾の望は全く死んで仕舞つたので、生き返るやうな事はありません。だから、長い手紙を寄越して下さいな。屹度あの人は貴女を改宗させやうと思つてるに違ひないわ。そして貴女とあの人はよく一緒に大層眞面目な話をするに違ひないわ。それだから、貴女はあの人の事をあんなに少し許しか知らせて呉れないんでせう。貴方を改宗させたつて餘り大した手柄でもありませんまいに。貴女は宗教上の事になると感情的で、明確な、冷靜な、斷定的な、觀察力を有つて居なさらぬから。何の因果か、妾にはそれが生來に備はつて居るので、妾はこんなものを有つて居なければ、幸福だらうと思ひますの。

貴女は何時白耳義へ歸る積ですの？國許の事は打遣つといても可いの？何時だつたか、貴女は餘り信用が出来ない代理人の事を妾に話した事があつたでせう。妾等は多分八月に旅行するでせう。兎に角今ではカルリノはさういつてます。けれど弟はちよいちよい氣が變るから、確には判りません。妾は九月に貴女と一緒に和蘭へ行つてみたいと思つてます。では左様なら！何卒手紙を寄越して下さいよ。あの人が澤山本を讀むなら、貴女があの人に何か本を借りて、先刻云つた半枚の紙を葉の代に挿んで置けば可いでせう。兎に角何か好い方法を見付けて下さいな。今云つた様にして可いし、何か他の仕方でも。貴女も女でせう！妾の事を思つて下さるなら、何か考へて下さいな！だが、本當に貴女はもう妾の事なんかちつとも思つて呉れてやしないんでせう？貴女が有の儘を白狀すれば左様なんでせう！けれどもね、此處のホテルに妾に惚れ込んで仕舞つた女の一人居るのよ！笑ひ度くばお笑ひなさいだが、之は本當の事よ。その女の人は羅馬に住んで居る人で、主人は内務次官なの。その人は是非妾に今年の冬を羅馬で過ごさせやうと獨で定めて居るんです。之はカルリノの考次第で如何なるか判りません。その人は弟を包圍攻撃して居るのですが、弟は黙つて攻撃させて置いて、抵抗もせず、城を明け渡しもしないで居ます。左様なら！手紙を

下さいよ。手紙を、手紙を、もう一度、手紙を！

ノエミよりジャンに（七月八日スピアコ發信）

妾は貴女の御註文通りよりもつと上手にやりましたよ！妾の居る前で義兄が基督以前の或る古代の僧侶の事を云つた拉典語の文章の一節を、記憶の中から引用した所が、その言葉があの方に印象を與へたものと見えて、あの方は義兄にその言葉を紙に書いて呉れると仰有いましたの。妾等は別荘の上の檜の森の草の上に座つて居たのです。妾は早速鉛筆と、それからあの半枚の紙を、字の書いて無い方を表に向けて、義兄に渡しました。義兄が書くときマイロニさんはそれを受取つて、拉典語を讀んで、裏の方を見ずに、その儘ポケットの中へお入れなさつたの。之は詐欺的行爲でした。妾は貴女の事を思へばこそこんな罪も犯したのですよ。これでも貴女は今後また妾の心を疑ぐりなさるんですか？

あの方の病氣の事は、今までももうすかつり貴女に知らせたぢやありませんか？あの方は二週間程熱でお困りなさつたのです。お醫者さんは今日腸窒扶斯だといつてるかと思つて、その翌日は左様ぢやないつて云ふんでせう。到頭熱は無くなりましたけれども、未だすつか

り元氣が回復しないので、大層瘦せてゐらつしやいます。何でも身體の内部に漆濃い病氣があるらしいのです。お醫者さんは食物を喰ひく云つてますの。それでこの頃はあの方も前は少し様子を變へて、肉類を食へて、葡萄酒も少しづつお上りなさいます。昨日義兄のお友達、あの名高いマイダ教授が、羅馬から義兄に會ひに来なさいました。義兄はその方に願つてマイロニさんを診察して貰つて、その意見を聞きましたが、その方は或る水薬をマイロニさんに飲ませると仰有いました。けれどもマイロニさんは屹度それをお飲なさいませぬ。この事は間違ないと思ふ位に、妾にはマイロニさんの心が解つて居ると自分で思つてますの。併し前の週にはすんくよくお成んなさいました。朝の中と夕方とに野菜畑で少しお働きなさいます。今朝大變早くお起きなすつて、何を爲なさる事か、貴女、階段をすつかり洗つてお仕舞ひなさるんですよ！昨日階段が汚いと云つて姉が婆やに小言を云つたんです。所か今朝婆やがスピアコの自宅から七時に家へ来てみると、マイロニさんがちやんと婆やの代に洗つて仕舞つてゐなさつたの。姉夫婦はあの方にそんな事をしなすつてはいけませんつて云ひました。義兄なんかは殆ど叱るやうに云ふんですよ。多分義兄はマイロニさんは全然氣質が異つてるからでせうよ。義兄と來たら、蜘蛛の巣が一面に雲の様に張つて居ても、箒に手を

觸れやうともしないんですからね！マイロニさんは如何な物をお読みなさるのかつて？あの
方が何をお読みなさるのか妾に仰つた事は、後にも前にも唯た一度で、それも僅ばかりの
間お話しなすつたわけです。その事は後から書きませう。あの方が今年の夏を此處でお過
ごしなさるかも知れないとこの前に書きましたが、あれは姉や義兄がその事を希望して居る
からだつたのです。けれども今では妾はあの方が此處に居ずに羅馬へお出でなさるだらうと
いふやうな氣がします。之は併し妾にそんな氣がするといふだけで、何も確に判つて居る
ぢやありません。

あの方が妾を改宗させやうと思つてなさると貴女は云つてゐらつしやるが、それが容易い
事か容易くない事か、又マイロニさんがそんな事を思つてゐらつしやるか如何か、そんな事
は妾は知りませんわ。妾は貴女に手紙を書く時には、あの方の事をマイロニさんと云つて居
てせう。けれどもあの方に話す時には唯だベネテットさんと云つて居ます。あの方がさう云
つて呉れると仰有るからです。義兄は屹度一度は妾を改宗させやうと思つた事があるに違ひ
ないと思ひます。義兄は妾を改宗させるのは實に容易いと知つたものですから、この頃はそ
の事をちつとも妾に云ひません。妾にはマイロニさんを義兄と同じ様には考へられません。

妾思ふのに、マイロニさんには基督教といふものは、何よりも先に、基督の御精神、甦り給
うた基督の御精神、永久に私等の中に住み給うて、マイロニさんの言葉を借りて云ふと、私
等が経験する基督の御精神に、従うた行爲と生涯とを意味するのでせう。あの方の宗教上
の使命は、或る一つの基督教會の信條を他の基督教會の信條以上に樹てやうといふのぢやな
いと、妾には思はれます。尤もあの方のお送りなさる神聖な生涯は全くカトリック教的だ
といふ事は疑の無い事です。あの方が義兄と一緒に教義の事をお話しなさるのを聞き
ますと、何時でも、決して教會と教會との間の差異を論じなさるのではなく、それよりも寧
ろ何か或る信仰箇條を分解して、その解釋を或る特別な見地からする時は、その箇條が實に
強い光を發する事を示すが爲めです。義兄もこの様な事柄には通曉して居りますが、義兄が
話すのを聞いてみますと、人は何よりも先に、義兄の心の中に非常な知識が貯へられて居る事
を感じます。それは異つてマイロニさんの話を聞くと、人はあの方の胸の中に活ける基督
が、甦り給うた基督が、在す事を感じて、心が燃えるやうに思ひます！全く、心の底を少し
も隠さず正直に云ひますと、あの方が妾を改宗させやうと思つて居なさらないとは思ひます
が、それでも餘り確に左様だとは云ひかねます。或日の事でしたが、私等は橄欖の森の中に

居ました。あの方は義兄と基督教の實質を論じた或る獨乙の書物の事を話してゐらつしやい
ました。何でもその本は新教徒の神學者が書いたので、大分喧しい議論を惹起したものでら
しいのです。マイロニさんは、この新教徒はカトリック教を論ずる時に、實際充分公平な考
を以てする積であるには相違ないが、事實に於いてその人はカトリック教の何たるかを知つ
て居ないと仰有いました。マイロニさんの意見によると、新教徒は誰も本當にカトリック教
を解して居ない、彼等は皆非常に偏見を有つて居て、カトリック教の中の外部的の矯正し得
べき或る弊習を目して、之はカトリック教に是非無くてならぬものだと信じて居るのです。
其時私等の側に杏の入つた籃がありました。マイロニさんはその中から大變よく熟しては
居るが早少し腐りかけて居るのを一つ選つて、斯う仰有いました。「此處に少し腐つた杏があ
ります。若しこの杏の何たるかを知らないけれども、人附合良く思はれ度いと思ふ人に、こ
れを上げやうと云つたならば、その人は、成程この杏は或る部分はしつかりして善くはある
が、不幸にしてその或る部分は腐敗して居るから、誠に残念ながら頂戴する事は出来ない、
と云ふでせう。この本の著者の新教徒がカトリック教を論ずる調子は丁度そのやうです。所
が若しこの杏を知つて居る人に上げやうと云つたならば、その人はこの杏が全く腐敗して居

ても構はずに貰ふでせう。そして立派な、健全な果實を生せしめる爲めに、この杏の中の
不死の種子を自分の畑に植ゑるでせう。」マイロニさんはこの言葉を義兄にお話しなすつたの
ですけれども、あの方の眼は始終妻の眼を見詰めてゐらつしやいました。またこの他にも、
先達イエネであの方は妾にカトリック教が解るやうになれと仰有つた事があるんですよ。そ
の事は兎に角、妾が何時までも新教徒の儘で居るにしても、それは妾に解るとか解らないと
かいふ譯ではなくて、妾が自分の最も神聖な感情に従ふからでせう。

それからねえ、ジャンさん、この他に少し遠慮なく貴女に云ひ度ひ事があるの。妾貴女が嫉
妬心を有つてゐなさんぢやないかと思ふのよ。若し本當に左様なら、その結果妾が云ふに
云はれぬ悲しい思をするといふ事が、多分貴女には解らないでせう。若し貴女がそんな事を
思つて居なさんなら、あの方に對してはもとより妾に對しても、實に實に濟まない事だといふ
事が、貴女には解らないのではないかと懸念します。妾は今心の奥底を貴女に打ち明けやう
と思つてますの。ねえ、ジャンさん、若し妾が心の底を打ち明けなければ、妾は自分を責
めねばなりません。貴女の爲めにも、あの方に爲めにも、また妾自身の爲めにも、自分を責
めねばなりません。あの方はお接しなさん人には誰にでも深切で、お優しいのですよ。殊に

身分の卑しい者にはさうなので、貴女は家の下働をする爲めに毎日スピアコから通つて来る婆やをも嫉みなさるかも知れませんよ。姉や妾には、あの方は言葉に表すよりも寧ろ黙つて深切に優しくして下さるのです。妾等姉妹の側にゐらつしやる時には、あの方は静で、無邪氣で、愛想よくしてゐらつしやいます。そして別段妾等の側に來る事を避度く思つてゐらつしやる様には見えませんが、それでも姉か、妾か、孰か一人だけだと、一緒にゐらつしやつた事は今迄に一度もありません。あの方の眼から見れば、妾は一つの魂なので、あの方に取つては魂は、丁度妾の父が家の大な庭の中の一番小さな植木をでも大切にしたらのと同じ事なのです。父は出来るならば自分の心の温味を以て樹を霜に當てない様に保護し、それに自分の活力を傳へて生長させ、花を咲かせ度と思つて居ましたのです。けれどもあの方から見れば妾も他の魂も皆同じ事なので、その間の唯一つの差異は、多分、あの方は妾か他の魂よりも餘計眞理から遠ざかつて居る爲め、それだけ餘計に霜に曝される虞があると思つてゐらつしやる事せう。けれど、あの方の態度にはこれといつてそんな様子は現れて居ません。

ジャンさん、妾は實際あの方の事を思ふ時に、深く心が動きます。けれど、この妾の情が、世間に通例のあの情と、少しでも似て居るなど云はれるのは實に厭です。この感情は尊敬、一種の敬虔な恐、畏敬の情なのです。妾にはあの方の身體の周圍に、何か魔法の環の様なものがついて居て、妾がその環の中へ足を踏み込みなど、決して爲てはならないやうに感じられます。あの方の前に居ても、妾の動悸は速くなるやうな事はありません。却て遅く打つやうに思ふのですが、併し之は如何だか判りません。ジャンさん、妾は本當にこれ以上胸の中を正直に話す事は如何しても出来ません。それ故、何卒、どうぞ、之は嘘だなど思はないで置いて下さいよ！

今の所で、妾は白耳義へ行かうとは思つて居ません。もつと先で暫時行つて來るかも知れません。弟さんに宜しく。カルリノさんがあの老僧と娘とを到頭フォーマロー星へお遣なすつたか聞き度い事ね！妾も時々あのフォーマロー星の事を思ふ事がありますよ！弟さんにね、若し貴女と一緒に今年の冬に羅馬へいらつしやるなら、一緒に合奏させようつて、云つて、下さい。左様なら。妾貴女を抱いてよ！

ヘネテットよりドン・クレメンテに（遂に送らす）

我が父よ、主は我が魂を去り給ひて候なり。我を罪の手に渡し給ひたるにはあらね

ど、主はその在す事を感ずるの念を悉く我が心より取り去り給へり。十字架上の耶穌基督の絶望の御叫聲は、時に我が全身を貫き通し候。我神在すこの一念に、我が凡ての思を集中しんと努むる時、我神の御意に服従ふ一行爲に、我が凡ての知覺を集中しんと努むる時、我はその努力より唯だ苦痛と落膽とを享受するのみにて候。我は、重荷に得堪へて地に倒れ、鞭の最初の一打に促されて起き上らむと努むれど、力及ばずして再び倒れ、二度、三度、四度鞭たる、に及びては、唯だ身を震はすのみにて、起き上らんと得せざる駄馬に等しき感を抱き申候。我福音書を繙くも「基督の模倣」を開くも、その中に少しの味をも見出さず、祈禱文を唱ふるも、徒に倦怠に壓されて、口を噤むのみ。地に平伏せば、地はこの身を凍らさむとす。斯く我に爲し給ふを恨みまつりて神に訴ふれば、神の沈黙は愈々我に敵するが如く見ゆ。大神秘家の教に従ひて、我が斯く靈の歡喜を慕ひ求むる事、及びそを奪はるゝ時に斯く悲しみ悶ゆる事の非なるを己の心に語れば、我が心は之に答へて、その神秘家は謬れり、人恩寵の己が身にあるを感ずる時は、その歩む道安全なれど、斯く星無き夜の如き靈の闇の中に在りては、人はその踏み行く道を見る事能はず、唯だその足の柔き草に觸るゝ時に後退りするの外手段無し、而もその足を空虚なる空間に踏み入るゝの虞あれば、之にても猶不安

なり、と云ふ。父よ、我が父よ、神の靈に満てる汝の御胸の温さを我が感じ得る爲めに、御腕を開きて我を抱き給へ！我何故に、如何なる場合にも汝と語るに書簡を選びて、サンタ・スコラスティカへ行く事を敢てせざるかに就きては、多くの理由の候也。汝は肉體に於てよりも靈に於いて更に多く我と共に此處に居まし、汝が我が目の前に立ち給ふ時よりも猶容易く、我は汝と一となり、汝と融合する事を得候。而して我は思想に於て汝と融合し、我が魂を汝の御魂の中に押し入るゝの必要を感じ候。多分我は此書簡を御手許に送り候べし。されども亦、送らで置くやも計られず候。父よ、父よ！汝に書を送り参らするは、面に語るよりも深き感を我に興へて候なり！今我が筆の尖に突進するこの熱情を以ては、我は得語り候はず。この熱情は如何にするも我が唇には突進し申さず候。我は筆もて書くことにより、汝の衷なる死なざるものに向ひて語り、叫び候なり。我は筆もて書く事により、汝の御魂の中にさへも在りて、汝若し我が前に居給はば、我が熱情の火を消すべき、かの「死すべきもの」を悉く汝より剃ぎ取り候なり。汝を促してその思想を覆はしめんとする、事物に就ける不完全なる知識と、分別心と、この二つの死すべきものを汝より剃ぎ取り候なり。否、我はこの書簡を送り申すまじ。されど、送らすとも、こは汝の御許に達しな

む。我はこの書簡を焼き棄て候へし。されど、焼かるゝとも、こは御許に達しなむ。我が
 聲無き叫の御許に達せざる筈の候はねば——或は今、夜の闇の中に、汝の眠り給ふ時、或は今
 より二時間の後、夜の闇尚深き中に、汝と我が屢祈禱を共にしたるかの懐しき禮拜堂の
 中にて、汝が兄弟達と共に祈り給ふ時、我が音無き叫の汝の御許に達せざる筈の候はねば。
 我何故に悲痛の中に沈みしか、神何故に我を棄て給ひしかを、我は知る。我は神の我を
 棄て給ふ時、我が魂の活ける泉悉く涸れ、活ける胚種乾枯び、而して我が心死せる海の
 如く成る時毎に、我はその何が故に然るかを知る。そは我わが背後に美しき音楽を聞きて後
 振り返りし爲めか、或は我が行く可き道に非ざる方の花野より風のまにまに漂ひ來る薫に心
 を引かれて足を止めたためか、或は我が前に霧立ち上るを見て恐れし爲めか、或は又、荆棘
 に足刺し貫かれて腹立たしく感じたる爲めに候なり。瞬時、唯だ僅なる時の閃き——さ
 れどその瞬時の中に戸は開けて、悪しき風の入り來る！毎時に斯くの如くにて候——熱心な
 る一瞥、聞くに快き譚辭、去り難に見る姿、回想さるゝ罪、之等のものゝ中就にてもあれ
 一にて事足るなり、悪しき風は充分入り來る隙を得申候。
 さるを今は之等の原因悉く相合して來り候よ！闇は我が行く道を包みぬ。我は柔き

草の中に足踏み入れて、その草を感じたり。我は足を後に引きぬ。されどそはその刹那に於
 てにてはあらざりき。如何なれば私の斯くは比喩を用ゐて語るぞや？書けよ、書けよ、真相
 を明白に、この卑法なる手よ！書けよ、この家は安逸の樂地なりと。我柔き臥褥と、軟き
 襪衣と、ラヴエンダーの香を樂しみ、更にまたチヨヴァニ・セルヴァ氏との談話と、智的
 歡喜を以て我を充たす讀書と、教育ありて優にやさしき二人の年若き淑女と同居する事と、
 彼等の心の中に潜める敬慕の情と、その中の一人の抱けりと思はるゝ或る感情の薫と、この
 樂境に隠棲して、凡て下劣なるもの、卑しきもの、汚れたるもの、厭はしきものと遠く離れ
 て、是等の人々と共に心靜に送る生涯の夢とに、我が心喜べりと。

我は世の罪を見て、そを恐れて後退する嫌惡の情を感じて候ひき。而も罪に向ひて戰を
 挑み、その爪牙より人の靈魂を奪ひ返さむとする熱烈なる悲愁は之を感じざるなり。瞬時、
 唯だ僅なる時の閃きの間——我は嘗てありし時の如く、十字架の手に抱かれて痛苦より遁れ
 ひとしたり。されど、徐々に十字架は我が腕の中に無情の死せる木と成りたり。斯くの如
 きは嘗てあらざりし事にて候なり！我は自語して云く「諸の靈、空中に在る諸の強
 き狡猾なる力は、我と我が使命とを滅さんとして謀計を廻らし居れり」と。我は自に答へて

云く「誇よ、去れ！」と、其時最初の考は再び我が心を占めて候。斯くの如き憫むべき状態に在りて、我が心は日毎に、終日彼方此方に輾轉せり。而してこの煩悶の一部分をだも我は努めて外に現さざりし故に、又チヨヴァニ氏も二人の女性も、我が内部の外部と同じく平静にして純潔なるべきを疑ひ居らざりしを我は知り居たれば、我は時として己を偽善者なりとして賤しみたる事も候ひしが、また直に思ひ返して、否、さにあらず、我が潔き静なる外面は、我を助けて活くる事を得しめ（茲に謂ふは靈的生活に候）、又表面に於て強き様見ゆる事は我れをして餘儀なく強からざるを得ざらしむるなりと、自語 仕り候ひき。我は髓を蟲のために蝕み取られ、木材は朽ち居れども、尙樹皮に頼りて生活を續け、樹皮によりて葉と花とを生じ、樂しき蔭を擴げ與ふ一もこの樹木に己を譬へて候ひぬ。然る後我は自に告げて云く「そは人間の前にては善き議論なり、さりながら、そは神の御前にても善き議論なりや？神の御前にても？」と。而して我は又も自語して云く「神は我を癒し給ふ事を得ひ、樹木は癒され得ずとも、人は癒され得べければ」と。神が我が意志のまた舊の如く神の御意と調和して働き得んが爲めに我に求め給ふ可き事柄を、我が爲し能はざりし故に、我が心はまた甚く惱みて候ひき。神は我に通れん事を命じ給ふ、通れん事を！神はアニオ川の水

聲の中に在せり。アニオの聲は、我がイエネを去りし宵より、絶えず「羅馬へ！羅馬へ！羅馬へ！」と云ふ。而して神はまた我が身の活力を噛み亡ぼせる眼に見えぬ蟲の力の中にも在せり。されば我果して答ひ可きか？我果して答ひべきか？主よ、公平なる處置を求むる僕の呻吟を聞き給へ！

我は今日までに幾度か、少しく健康を回復し次第此處を去るべしと云ひたれど、この家の人々は我を此處に留め置かんと思ひ居り候。然るを争て我は彼等に向ひて「我が友よ、君等は我が敵なり」と云ふ事を得申すべき。我が臆病を見給へ！何故に我は然云ひ得ざるか？然云ふは悪しといふ理由何處にありや？

或る日、我はかの年若き新教徒の婦人の一瞥の中に、「君若し去り給ひなば、妾の魂は如何になり申すべきか？君よ、妾を君の信仰に導く事を翼ひ給ふは宜しからざるや？妾は未だこの儘にては導かれ申すまじ。」てふ質問を認めて候ひき。否、我は凡てを書く事能はず、凡てを書くは宜しからず。我は争で一瞥の中に含まるゝ意味や、一言の調子一別に離して見なば誠に平凡なる一瞥、一言の意味、調子一を紙上に書き表はす事を得申すべき。是はかの聖テエロームをして氷の如き水中に飛び入らしめたる如き眼色にはあらず、縦し然りとす

るも、渺くとも我が感情は聖子エロームのそれとは似も通はぬものにて候。氷の如き水も、唯だそれ美にして純潔なる一瞥に對しては無益にて候なり。是に勝ち得るものは唯だ火のみ、至高の愛の火あるのみ！噫！我が心の最も微なる鼓動さへ我が全身の纖維を震動す。この死すべき我が心より我を釋き放たむ者は誰ぞや？その心の中に在りて、果實中の胚種の如く、己の爲めに天に屬ける體を準備しつゝある不死の心を釋き放たむ者は誰ぞや？我は凡てを書く事能はず。凡てを書くは宜しからず。されど、誠に、この一事を書き申すべし。主は我を罔りて、奔に陥れむとし給ふなりと！我が倒るゝを見て、主は我を嘲り笑ひ給はむ！如何なれば我は、かの死海と砂漠との間に住みて罪業消滅のために苦行する人々に就きて云へる「金無く、女一人だに無く、報を愛する心を悉く棄て」てふ引用句を、J. D. の書き送りし言葉、我と彼女との過去の罪の熱猶冷めやらぬ言葉、最も恐しき時を我に想起せしむる言葉を載せたるかの紙片の裏面に書き付けたるや？かの極めて内氣なる人の、如何なれば敢て秘密の音信を強ひて我が手に達せしめんとはせしぞ？

風は我が部屋を吹き開けて候。嗚呼！アオオ！アオオ！汝は斷ゆる隙無く我に命令して倦まざるか？我は今、直に、出發たざるべからずとや？不可能なり、戸は悉く錠も

て固められたれば。加ふるに、斯く無斷にて立ち去るは耻づ可き事なり。然せば我は神を辱むべし、この家の人々は「主は何たる忘恩の、何たる狂愚の僕を有ち給ふ事ぞや」と云ふべければ。來ませ、我が師の靈よ、來ませ、來ませ！語り給へ、我傾聽せむ。汝の我に云ひ給はむとする所は何ぞ？汝の我に云ひ給はむとする所は何ぞ？噫！汝は我が嵐に惱むを見て微笑み給ふ。汝は我に去れよと云ひ給ふ。然り、されど主の僕らしく去れよ、主自我が去らむことを命じ給ふなりと彼等に告げよと云ひ給ふ。汝はアオオの水聲の中の神の御聲に従へよと云ひ給ふ。今し風は歌まむとす、満足したるが如く、その聲を收めつゝありと思はる。然り、然り、然り、涙ながらに我は去りなむ！明日、明朝！我は然彼等に告ぐべし。而して我は羅馬に行きて誰の許に到るべきかを知る！嗚呼！光、嗚呼！平和、嗚呼！泉は再び我が魂の中に湧き漲る！嗚呼！死せる海に熱情の波立つ！然り！然り！涙ながらに！我感謝す！我感謝す！光榮は汝にあれ。天に在す我儕の父よ、御名を崇めしめ給へ、御國を來らせ給へ、御意を成させ給へ！

其一

四邊が既に暗くなりかけてから、自用馬車が一輛、羅馬のテラ・ヴネテ町の、とある家の戸口に停つた。二人の婦人が降りて、足早に暗い入口の中に隠れた。そして馬車は歸つて行つた。轆てまた一輛の馬車が着いて、その暗い戸口にもう二人の婦人を下して、同じ轆轆と引き返して行つた。斯ういふ風に、十五分間も経たぬ中に五輛の馬車がこの家の前に停つて、尠くとも十二人の女の姿がその暗い入口に吞まれた。それから後は、此狭い町は再び平素の静けさに還つた。半時間程経つてから、男子が三々五々連立つてコルソ通の方から、此方に来始めた。彼等はこの家の戸口で立ち止つて、近傍の街燈の光で家の番號を讀んで、それから中へ這入つた。斯ういふ風にして、もう四十人許の者が暗い入口に吞まれた。最後に來た者は二人の僧侶であつた。その中の一人が家の番號を讀まうとしたが、近視眼なので、如何しても讀めなかつた。すると同伴の男が笑ひながら彼に云つた。

「這入り給へ、這入り給へ！ ぜうも四邊がルーテル臭いから、此處だらうよ！」

で始の僧はその異端臭い闇の中へ這入つた。二人は四階目に點つて居る小な油燈を目當に、暗い、汚い階段を上へ上へと昇つて行つた。三階目に辿り着いた時に、二人は憐寸を摺つて、戸に附いて居る標札を讀まうとした。

「此方で御座います、此方で御座います！」

と上の方から聲がして、黒つばいモーニング・コートを着た愛想の好い若い男が、二人を迎へに降りて來た。彼は大變恭しい様子で、他の人々は貴方がたを待つて居られますと二人に話して、それから彼等を案内して、階段と殆ど同じ位に暗い次の室と廊下とを通つて、大な一室へ這入つた。この廣間には大勢の人が居て、四本の蠟燭と二個の古ぼけた油燈とに朦朧と照らされて居た。若い男は燈火の暗い事の言譯をして、兩親が電燈も、瓦斯も、石油も嫌ふものですから、と云つた。先刻から三々五々連立つて來た男子は皆此處に集つて居た。法衣を着て居る者が三四人あつた。白鬚のある赭顔の老人を除けては、他の者は皆學生らしかつた。女は一人も見えなかつた。人々は凡て立て居たが、確に身分のある人物らしいこの老人だけは腰を掛けて居た。室内には小川や洞穴の中に滴る水の雫の囁のやうな密々と語る聲が充ちて居た。かの二人の僧侶が這入つた時に、主人役の若い男が云つた。

「もう宜しう御座います！」

室の中央に一團を成して居た人々が颯と分れて環になると、その真中にベネデットーが現れた。彼の爲めに、蠟燭を二本點して置いてある小さな卓と、一脚の椅子とが準備してあつた。彼はその蠟燭を除つて呉れよと求めた。それから卓も亦彼の氣に入らなかつた。彼は疲れて居るからと曰つて、かの白鬚のある赭顔の老人と並んで長椅子に腰を掛けて話す事を許して呉れよ、と人々に乞うた。ベネデットーは黒い衣服を着て居た。そしてイエネに居た時よりも肉が落ちて、血の氣が薄かつた。頭髮が前よりも生え上つて廣くなつた額は、何處となくドン・チウセツペ・フロレスの額のやうな嚴な様子を帯びて居た。彼の眼は一層光を増して碧く見えた。熱心の色を現して彼の方に向いた人々の顔の多くは、彼の言葉を聴く事を願ふよりも、彼の眼と額とに魅せられて居るやうであつた。彼は少しも身振をせずに、兩手を膝の上に置いた儘、次の様に語り出した。

「私は今、如何いふ方々に向つてお話をするのか、始め申して置き度いと思ひます。といふ理由は、今晚此處に居られる方々は皆一樣に基督と教會とに就いて同じ考を有つて居られるといふのでは無いからであります。私は教役者の方々に向つてこの話を致すのではあります。彼は一通の手紙を取り出して讀み上げた。

「我等はカトリック教の信仰の中に教育せられ、後成人となるに及びて、我等は自己の自由意志の聲に従ひて、その摩訶不可思議なる秘密を承け入れて候。爾來我等は行政及び社會の方面に於いて、その信仰の中に刻苦勵精致し候。然るに今我等の行手に一の新しき秘密立ち塞りて、我等の信仰はその前に躊躇き倒れんとす。カトリック教會は、自真理の源泉なりと稱しながら、今日、自己の基礎たる教典や、自己の教義の條文や、自己の無謬説などの、研究の對象となるを見て真理の探究に反對しつゝあり。我等に取りては、之即ち教會が最早自己の力を信せざるに到れる事を意味し候。カトリック教會は、自生命の媒介者なりと揚言しながらも今日は、その中に在りて青春の元氣に充ちて生活するもの凡てを鎖縛し窒息せしめつ

つあり。今日は、その中に在りて老衰して顛倒れんとするもの凡てを支柱を以て支ふる事に努めつゝあり。我等に取りては、之即ち死、遙なれども遂には免るべからざる死を意味し候。カトリック教會は基督に因りて凡ての事物を改新せん事を願ふと公言しながらも、我等、基督の敵の手より社會の進歩を嚮導する權を奪ひ取らんと努むる者に敵對す。この一事實、及び他の多くの事實は我等にとりて、教會が口に基督を説きて心に基督を有せざる事を意味し候。斯くの如きは今日のカトリック教會の状態に候はずや。神は斯くても猶我等が教會の命に服従する事を望み給ふべき乎。この疑問を携へて我等は貴下の許に來れり。我等は如何に爲すべきか。自カトリック教徒なりと言明し、カトリック教を説かるゝ貴下、世評によれば——

此處まで讀んでベネテツトは中止した。
「これから先は別に重要な事ではありません。」
それから彼は談話を續けた。

「私は、私に手紙を寄越された方々に斯うお答へします。何故に諸君はカトリック教徒だと言明して居る私に教を求められるのですか。諸君は私が教會の長者中の長者だと思つて居られるのですか？ 果して然らば、若し私の言葉が諸君の所謂教會の教へる所と異つて居た場

合に、諸君は私の言葉を享けて心を安んじますか？ 茲に一つの比喩談があります。渴を覺えて居る巡禮が或る有名な泉の側へ參ります。來て見るとその水盤には嘔吐を催す様な味のする腐り水が一杯溜つて居ます。滾々として湧く清い泉はその水盤の底にあるのですが、彼等には氣が付きません。そこで彼等は失望して、遂に其處を去つて、近邊の石切場で仕事をし居る石切人夫に助を求めます。石切人夫は彼等に清い水を與へます。巡禮等がその水の湧き出す泉の名を問ひますと、石切人夫の答へて云ふには「これはあの水盤に在る水と同じ水です。地面の下ではあれもこれも同じ一つの流です。掘りさへすれば見付かるのです」と。扱て、諸君はこの咽喉の渴いた巡禮で、私は石切人夫で、カトリック教の眞理がその地下の、目に見えぬ水の流であります。その腐り水の溜つた水盤は教會ではありません。教會は清い水が流れる土地全體であります。諸君は教會とはかの法王廳のみをいふのではなく、全世界に亘つた信者、聖められたる人々凡ての集合であるといふ事と、又、何人たるを論せず、基督を信する人の心底からは、かの泉其物、眞理其物から發する清冽な水が滾々として湧き出づる事があるといふ事とを、不知不識の中に認めて居られますから、それで私に教を求められたのであります。諸君は不知不識の中にこれを認めて居られるのです。若し不知不識でな

くば、諸君は教會がこれに反對する、教會があれを壓へる、教會は老衰しつゝある、教會は口に基督を説いて心に基督を有たない、などは云はれないでせう。

私の言葉を誤解しないやうによくお聞き下さい。私は法王應を裁決くものではありませぬ。私は法王應の權威を尊重する者であります。私の云はんと欲する所は唯だ教會は單に法王應のみで成立つて居るものではないといふ事でありませぬ。今もう一つ譬を以てお話をませう。何人の思想の中にも亦一種の神聖政治があります。譬へば義しい人の事を考へて御覽なさい。其人に取つては或る特殊の思想、或る特殊の目的が主動觀念であつて、それが其人の行爲を支配します。その觀念とは、彼の宗教上、道徳上、及び市民としての義務を果す事でありませぬ。是等の種々雑多の義務に、彼は自分が教へられた通りの傳説的解釋を下します。けれども、この鞏固く樹立てられた思想の神聖政治のみで其人全體が成立つて居るのではありませぬ。その下には、多くの他の思想、夥しい他の觀念がありまして、人生の興ふる印象や經驗によつて絶えず變化され、改められつゝあります。その思想の下に更に又靈魂といふ別の境地があります。潜在意識があります。此處で色々な、玄妙な力が一つの玄妙な働を致します。此處に神と我との不可思議な接觸が起ります。今云つた様にその主動觀念がその義しい

人の意志の上に權威を以て臨みますけれども、その思想の下に在る多くの他の思想も亦それと等しく極めて重要なものであります。何故かといへば、この思想は外界の現實なる物に關する經驗と、内部の神に就ける事に關する經驗から、絶えず眞理を享受つゝあるからであります。そしてそれ故に、その上に在る所の思想、かの主動觀念の中の傳説的要素の完全に眞理と一致して居ない點を改め正すかのやうに思はれるからであります。そしてその上に在る強い思想に取つては、この下に在る思想は、上に在るものを新しくする所の清新なる生命を無盡藏に湧出する泉なのであります。人間の命令からではなく、事物の天性から、思想の眞の價値から、出る所の正當な權威の源なのであります。教會とは人全體をいふので、決して他のものから離れて別に在るところの尊重せられた主動觀念の集合のみではありませぬ。教會とは傳説的觀念を有つて居る神聖政治をいふのであつて、又それと同時に、現實界から絶えず眞理を見出し、傳説に對して絶えず反動を起すところの一般俗人をもいふのであります。教會は公定の神學であつて、又それと同時に、公定の神學に對して反動を起す所の尊い神の眞理の無盡藏であります。教會は死にませぬ。教會は老衰しません。教會は活ける基督を口にするのではなく、心の奥深くに有つて居るのであります。教會は絶えず活動する眞理

の貯蔵所であります。そして神は諸君に教會の内に留つて、教會の爲に滾々として湧く泉となる事を命じ給ふのであります。」

颯と吹く風のやうに、感動と讚嘆の情が聴衆を揺がした。ベネテットの聲は先程から段々高くなつて來たが、彼は今立ち上つて、激した様子で叫んだ。

「併しながら、教會の政治を執る者の斯ういふ時勢遅れの教義が氣に入らぬといひ、羅馬の教會會議の斯ういふ命令、法王廳の政治の斯ういふ傾向が面白くないからといつて、教會を棄て去らうなど、は、諸君の信仰は何といふ信仰です！ 諸君の母の服装が諸君の嗜好に適はないからといつて母を母でないなど、いはるゝ諸君は何といふ子です！ 着物一枚の爲に母の慈愛に満ちた胸が變りますか？ 諸君がこの慈母の胸に凭れて、涙ながらに自分の弱小事を基督の前に告白して、基督がその病を癒し給ふ時に、諸君は約翰傳の中の一節の眞偽や、第四福音書の眞の著者や、イザヤが二人ある事などに就いて、彼是考へますか？ 諸君がこの母の中に集つて、聖餐によつて基督と合體する時に、諸君は檢閲官會議や、宗教裁判所の判決に心を亂されますか？ 諸君がこの母の胸に横はつて、死の影の中に入る時に、法王が基督教民主主義に反對するからといつて、この母から出て諸君を包むところの平和の美しさが幾分

かでも減りますか？

友よ、諸君は云ふ『我々はこの木の蔭に息らうて居たが、今その皮は龜裂して乾枯びんとして居る。この木は枯れて仕舞ふであらう。我々は他の木を求めやう』と。併しながら、その木は枯れません。諸君に耳があれば、今新しい皮が出来かゝつて居る音が聞えるでせう。この新しい皮は一定の時間の間生存して、時刻らば之も亦龜裂して、乾枯びて、更に又新しい皮がそれに代るのです。その木は死ぬるのではありません、その木は生長するのであります。」

ベネテットは疲勞を覺えて腰を下して、黙した。聴衆の中に、彼の方に押寄せんとする波の波動のやうな動搖があつた。彼は兩手を舉げて彼等を制した。そして優しい、勞れたらしい聲で云つた。

「友よ、もう一度お聞きなさい。學者とパリサイの人と、長老と高僧とは昔も今も常に革新に反對します。彼等に就いて諸君に語るの私の爲すべき事ではありません。神が彼等を裁き給ふでせう。我々は自如なる事を爲て居るのかを知らない人々凡ての爲に祈ります。併しながら、又他のカトリック教徒の陣營。即ち戦つて居る者の陣營に居る人々も、全く罪